

記島南海

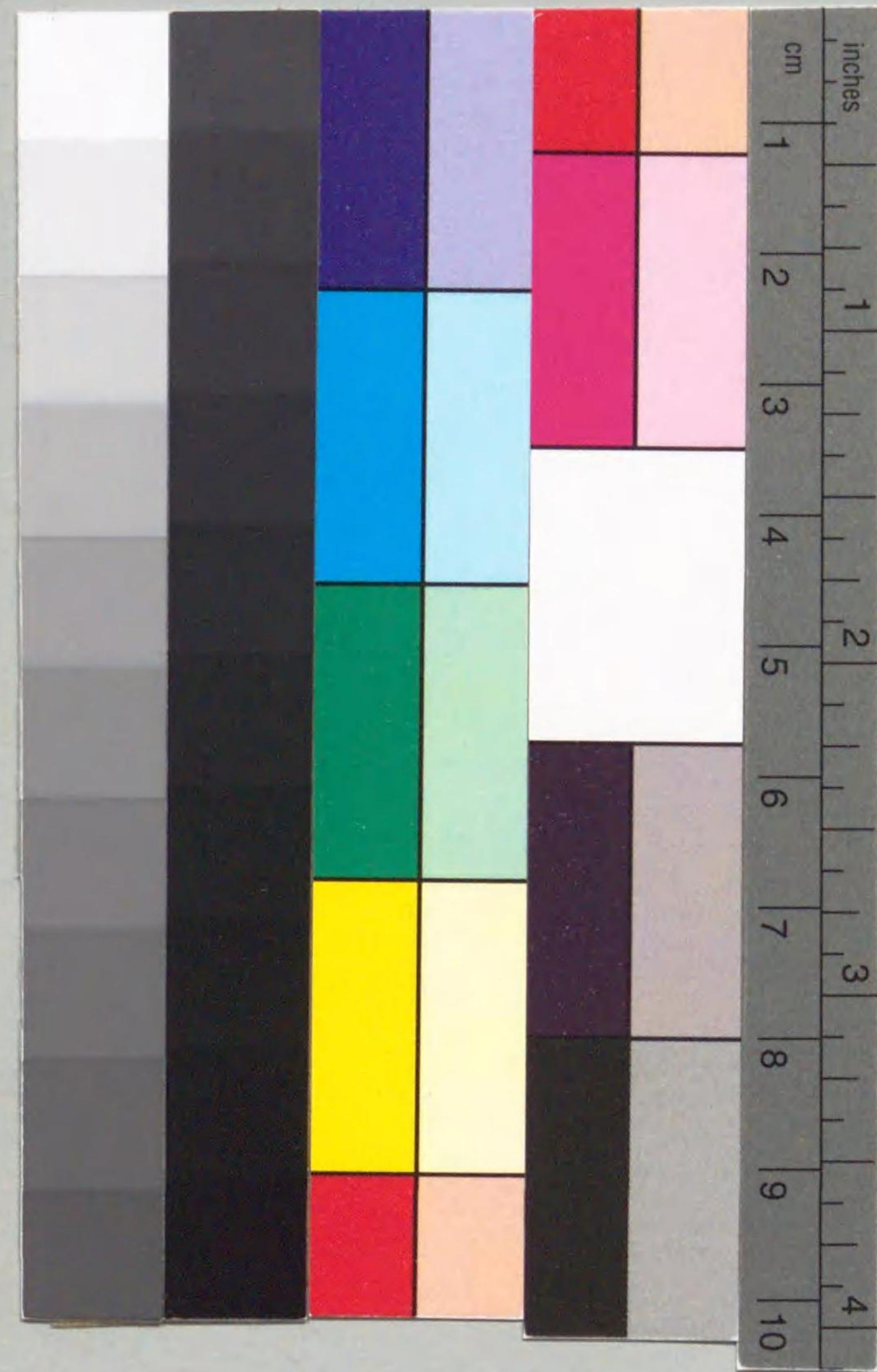
著平葦野火

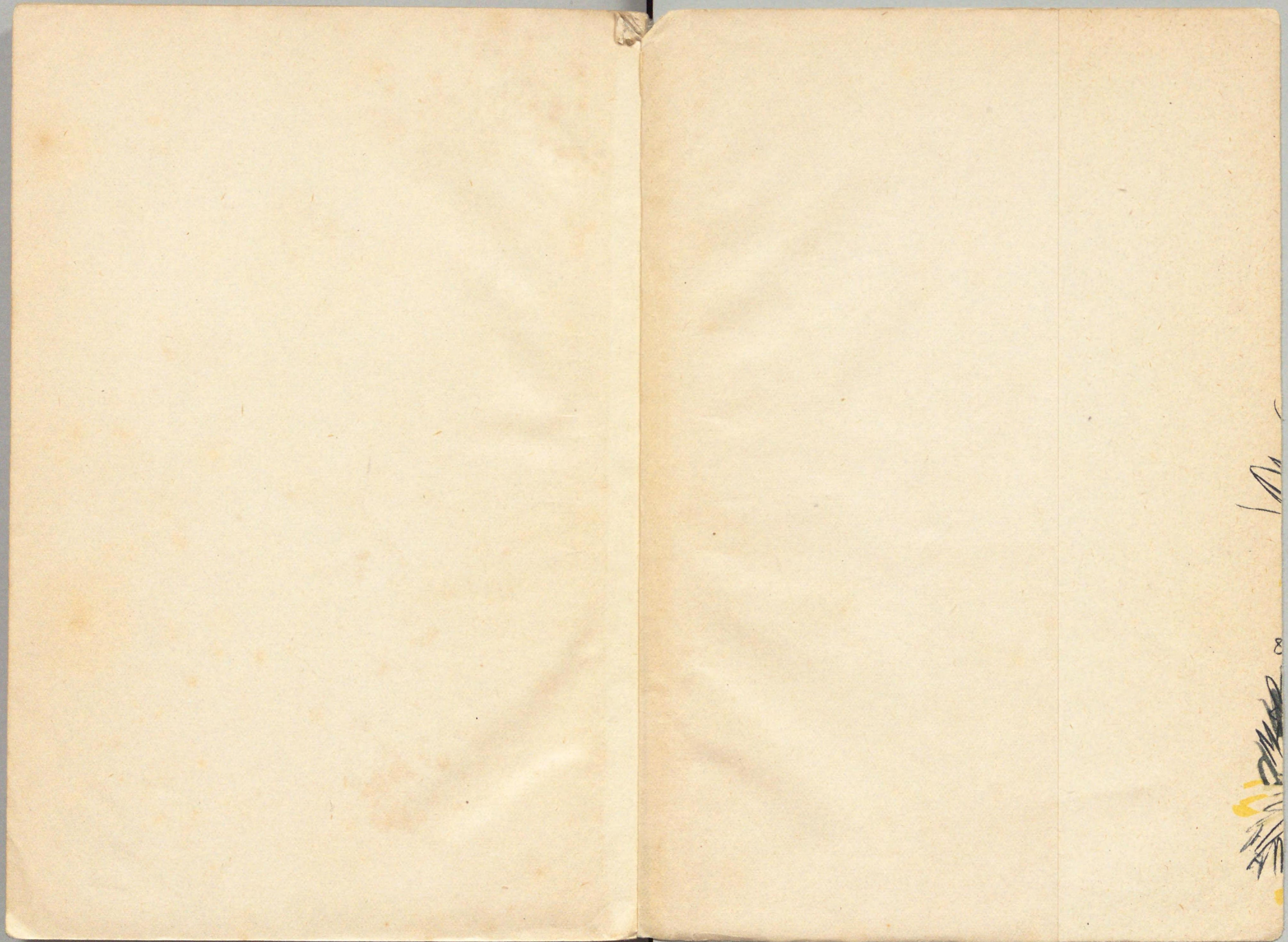


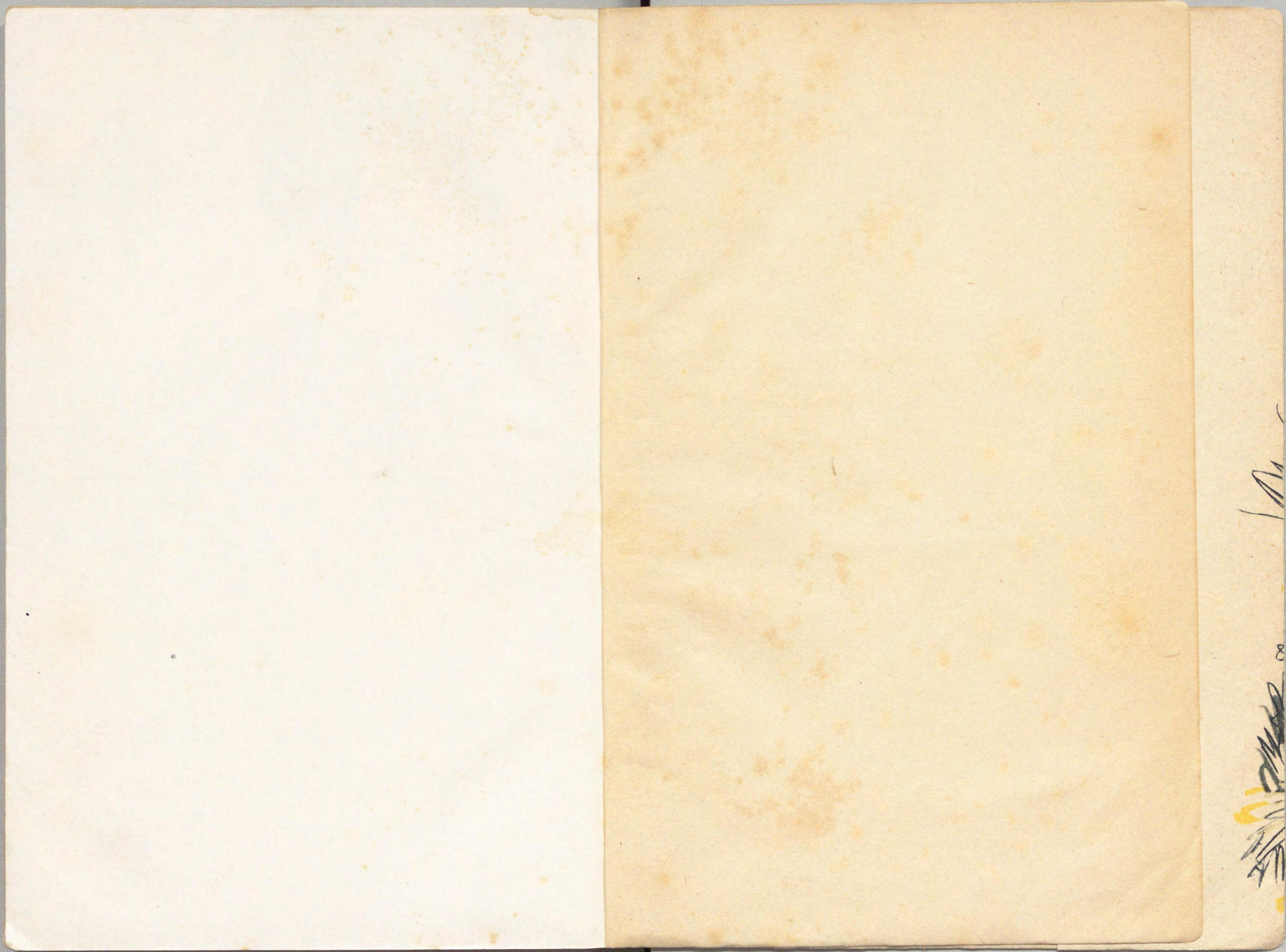
915.6
H461k



00031463





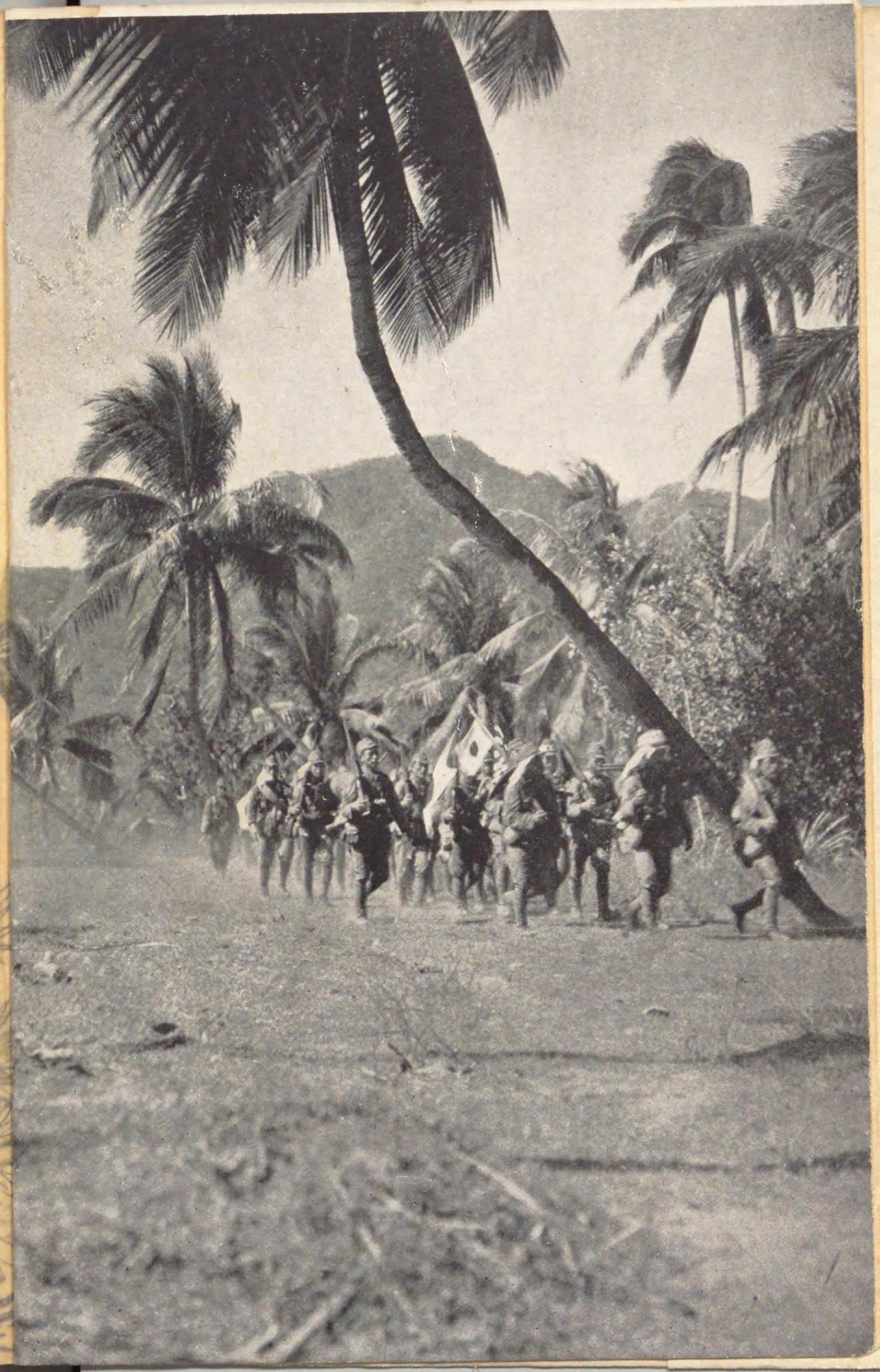


Handwritten text and a drawing on the right edge of the right page. The text is partially cut off and includes a vertical line, a horizontal line, and the number '8'. Below the text is a drawing of a plant or leaf with yellow highlights.

記島南海

著平葦野火

行發社造改

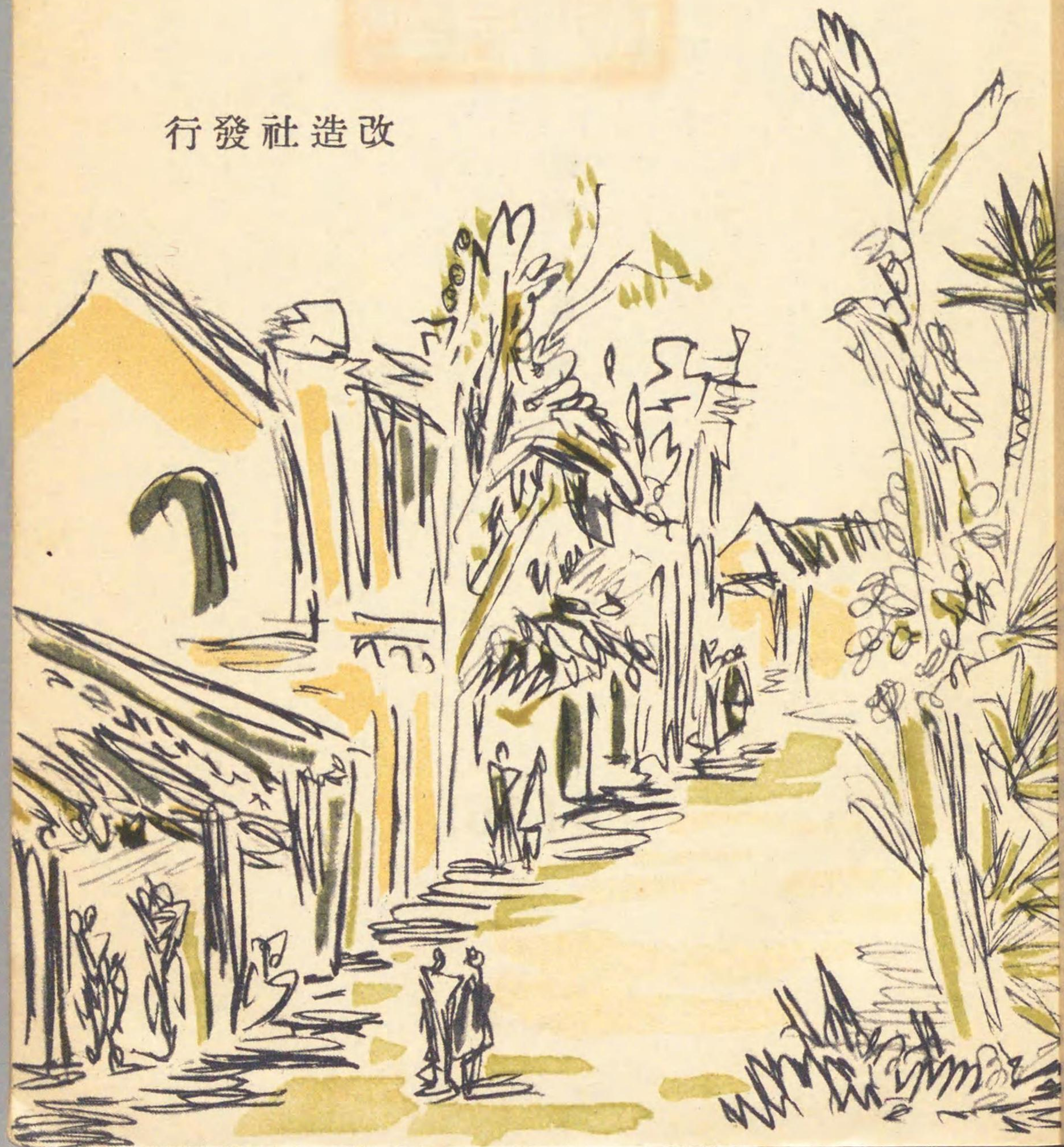


Handwritten notes in black ink on the right edge of the book cover, including a large character '八' and some illegible scribbles.

記島南海

著平葦野火

行發社造改



915.6
H46/2



裝幀 星野 順一

31463

915.6

目次

海南島記

一、輸送船	一
二、上陸	八
三、海口市	一九
四、海南書局	三
五、傳單	四
六、海南迅報	六
七、東洋の南端	七
八、瓊山	八
九、R.R. CUTHERBERT その他	九
十、街	一〇
十一、治安維持會	一一

十三、農曆元旦	一三九
十二、客	一四一
追補	一四三

東莞行

一、汽車	一四九
二、石灘	一五五
三、トロッコと兵隊	一六〇
四、石龍	一六六
五、東莞	一七一
六、治安維持會	一七七
七、普濟醫院	一八四
八、月と鶏	一九二
九、再び、トロッコと兵隊	一九八

海南島記

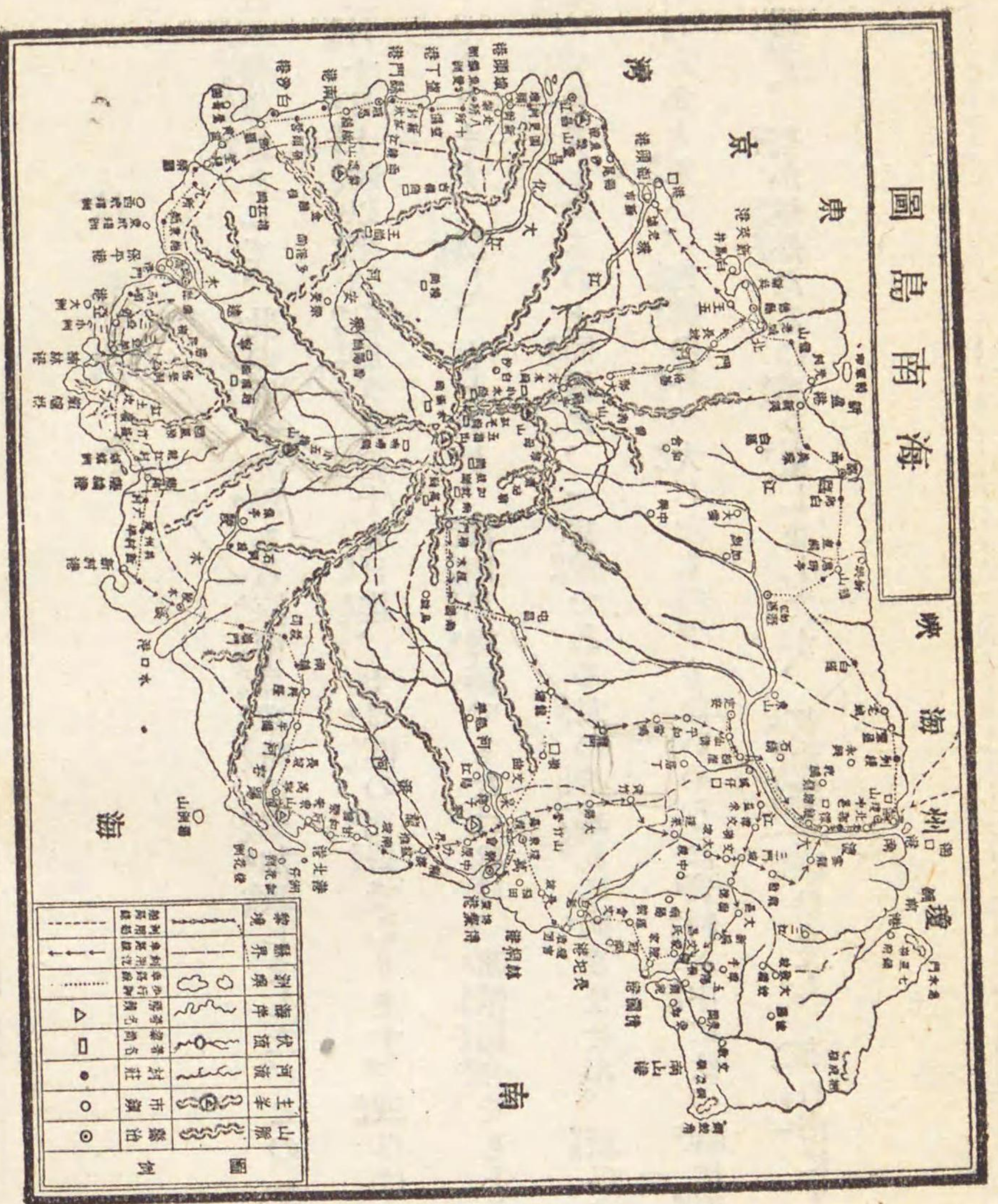
(十日間の報告)

海南島誌

(十日間の記録)

はしがき

私は軍報道員として、此の度の光輝ある海南島攻略に参加致しました。この「海南島記」は、二月十日上陸以來、農曆元旦の十九日迄、十日間の記録であります。或ひは「資料・海南島」であります。然し、もとより、海南島地誌でもなければ、事情紹介でもありません。従来私の書きましたものと同様に、一兵隊である私の身邊記に過ぎません。或ひは多少の興味もあらんかと思ひ、寫眞の外、大したものでもないやうな資料（中には、特に原文の儘）を並べ過ぎ、些か雑然たるの感を呈しましたが、御海容を願ひます。海口市にて。三月一日。

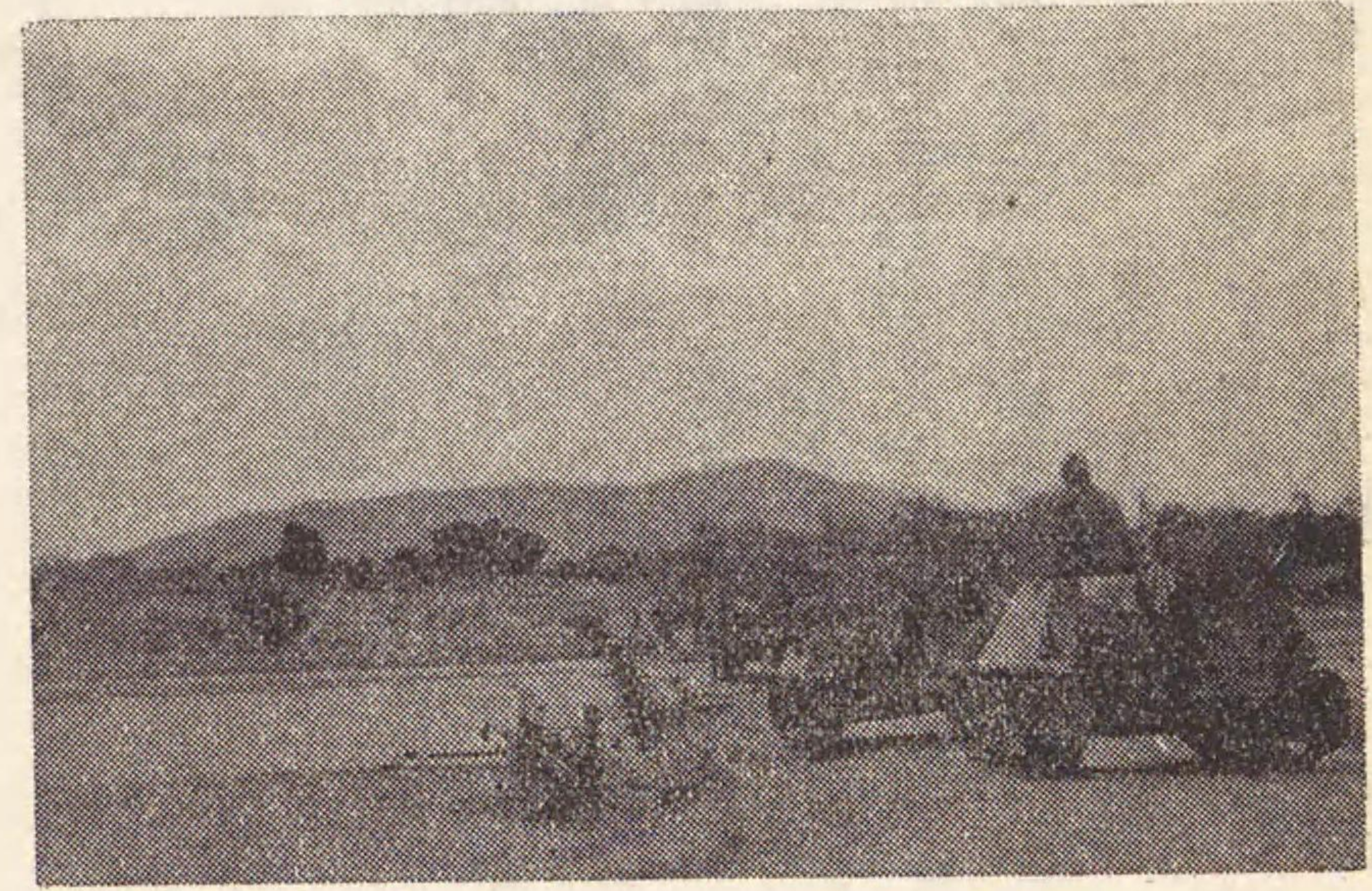


一、輸送船

灼けつくやうな南海の太陽の下に出て来ると、我々の船は大きな波のうねりを喰つて相當に揺れる。我々の前後左右を進航してゐる多くの輸送船や、軍艦も、見てゐると、氣の毒なほどがぶつて居る。船艙にある我々の兵營は狭く、襦衣一枚になつてゐても、すぐにじつとりと汗ばんで来て、汗が玉になつて、首筋をたらたらと流れ始める。二つに區切られた船艙の二階には新聞記者連中が居り、階下である我々の寓居は、疊五六枚數位の所に三十人程詰め込まれて居るのである。晝間は色々用件があつて、事務室の方に行つたり甲板に出たりしてゐるが、夜になつて、さして寝る段になると、到底我々の寢所は借家人を悉く收容するに足りない。毎夜、四五人は外にはみだし、ルンペンのごとく、空地を探し求め、藁を敷いて外で寝なければならぬ。ところが、はみだした立花軍曹や伊藤君などが、却つて、狭苦しい自宅よりも、外の方がゆつくりして氣持

がよいなどといふのである。私と中野伍長とは押し潰されたやうに、丸窓のある一番隅つこに居を構へた。海南島に向つて進む多くの兵隊達が満載され、むんむんする人いきれと、馬欄からのぼつて来る異様な臭気の中に居る。私自身の経験から云へば、敵前上陸のための輸送船にあることは、これで四度目である。それらの経験を私は別の文章で書いたが、それが例へば十度目であらうとも、人間が一瞬によつて死を決定されるべき戦場に向つて行くといふことについては常にその感慨は同じである。ただ既に兵隊達は外見して誠に無雑作に見え、何等そのやうな新しい経験に對して危惧しては居ないやうに見える。彼等はまるで遠洋航海の旅でもするやうに、屈託なささうに、風景につい

牛 鐵 が 我 の 撃 攻 林 楡



て語り、雲を眺め、海の色を批判する。將棋をさしたりトランプをしたり、流行歌をうたつたり、酒をのんだり、げらげら笑つたりして居る。その逞しさは駭くばかりであるが、私にはその逞しさに全く蔽ひ隠されたごとく見える兵隊の悲壯な感情について一層の悲壯さが感じられてならないのである。時



時、甲板で乗艇演習が行はれた。紺碧の荒波に船は揉まれ、歩くのさへよちよちであつたけれども、我々には色々な仕事があつた。私達は報道部の事務室としてメス・ルームを借りた。我々が帯びて来た任務に關してのさまざまな計畫や、整理や、多くの新聞記者の統制などのために、我々の指揮者である才田大尉は寸暇も無かつ

た。我々は船の動揺のために、皆すこし頭が痛いと言ひながら、宣傳報道宣撫等に關するさまざ
まの協議をした。我々の未知の土地に對する計畫に關して、極めて有力な意見を提出してくれた
のは、才田大尉と同室で來てゐた特務機關の勝間田さんである。私は勝間田さんの運命について
の話を聞くに及んで非常に胸を衝かれた。私達が出發前後に參考として讀んだ海南島に關する書
籍の中に海南島に於ける唯一の日本人居留民としての勝間田善作氏の名があつた。私はそれに甚
だ興味を感じて居たのであるが、圖らずも我々は輸送船中で善作翁の三男であり、事變前まで父
とともに海南島にあつたといふ勝間田義久さんと一緒にになり、俱に仕事をすることになつたので
ある。勝間田さんのお父さんが海南島に渡つたのは明治二十九年の夏だといふことである。その
時は、當時横濱にあつたオースチン商會の推薦で、島に多く棲息してゐる珍鳥や奇獸の採取の爲
であつたらしく、それから長い間、海南島を隈なく跋涉し、自分で勝間田洋行といふのを興し、
藥種メリヤス綿布等の日本品を島へ紹介するとともに、島産のテグス等を日本へ輸出してゐた。
又、農園を拓いた。私達の持つてゐる海口市の地圖に日本人公園とあるのがそれである。善作
氏はその後熱心に日本人の招致に努め、一時は四十九人の在留邦人が居たこともあるが、度々

の日貨排斥と暴戻な支那官憲の壓迫のために、次第に邦人は引き揚げ、事變前には又も勝間田氏
一家のみとなつてゐた。排日の空氣は非常に激しく、甚しきは、遂に、當時陳章が師長であつ
た第五十二師の少壯軍人の間に勝間田一家暗殺の計畫すら樹てられるに到つた。海口市公安局
からは保護のために六名の警官が派遣されてゐたがそれだけでは最早保障出來ない状態となつ
て來たので、遂に、廣東總領事館より引揚命令が來、廣東第九區（海南島）行政督察專員公署委
員であつた黃強の厚意に依り八月二十一日、積鹽船で、涙をのんで海南島を去つたといふのであ
る。爾來臺灣に居つたといふことであるが、今、日本軍の海南島攻略に際し、軍の一員として
これに隨行し、云はば第二の故郷である海南島に向つてゐるといふことについて、勝間田さん
（父君善作氏は海軍に従軍されてゐるといふことで一度もお目にかからなかつた）の胸中の感懷
のほどは、充分に推察されたのである。海南島及び、第一の我々の目標である海口市や瓊山府城
の状態について明るい勝間田さんを得たことは、我々の計畫にとつて非常に有力であり我々の
計畫を極めて具體的にした。例へば、海口市内には、何處からでも望み得られる高い建物はな
いか、といふことについても（それは、スローガンを書いた大きな佈告をぶら下げるためである）

直ちに、民國日報社の隣にデパートであつた五層樓があることを語り、我々の居を定むべき宿舎についても、抗日の親玉の經營してゐる敵産の海南書局といふのがあることを知らせてくれ、その他、何かにつけて参考になることが多かつた。我々は、今度の海南島攻略は、銃火を以てする戦闘とともに、重大なる文化の戦ひであるとの意氣込を持つたのである。

報道部として「陣中ニュース」を船中で發行した。船泊ニュースとして入つて来る同盟電を要約し、謄寫版で印刷して毎日配布した。あまり船に強くないらしい伊藤君が、青い顔をし、時々げろを吐いたりなどしながらも、必死の形相で原紙を切り、ニュースを印刷するさまは、まことに悲壯なものであつた。海の上で日々の出来事を知らせる「陣中ニュース」は非常に喜ばれた。兵隊達が澤山貫ひにやつて来るので部數を増さなければならなくなつたほどである。

仕事の合間には、私は中野伍長と二人で碁を打つた。丸窓の明りを頼りに青い海を見たり、青い空を見たり、窓から吹きこむ熱帯の生ぬるい風に吹かれたりして、小さい碁盤でやるのである。一尺四方の折り疊みになつた碁盤は、私が出發の直前に、日本から到着したのである。黄色い碁盤の裏には、達筆で次のごとく書かれてある。

黑白三百六十一路軍謹而御機嫌伺上候廣東の大石頓死漢口のセキ崩れで敵も大弱りです。う併し相手も中々長考してねばる様です今後のヨセが相當難しいと存じますどうか最後迄頑張つて下さい。

松村生

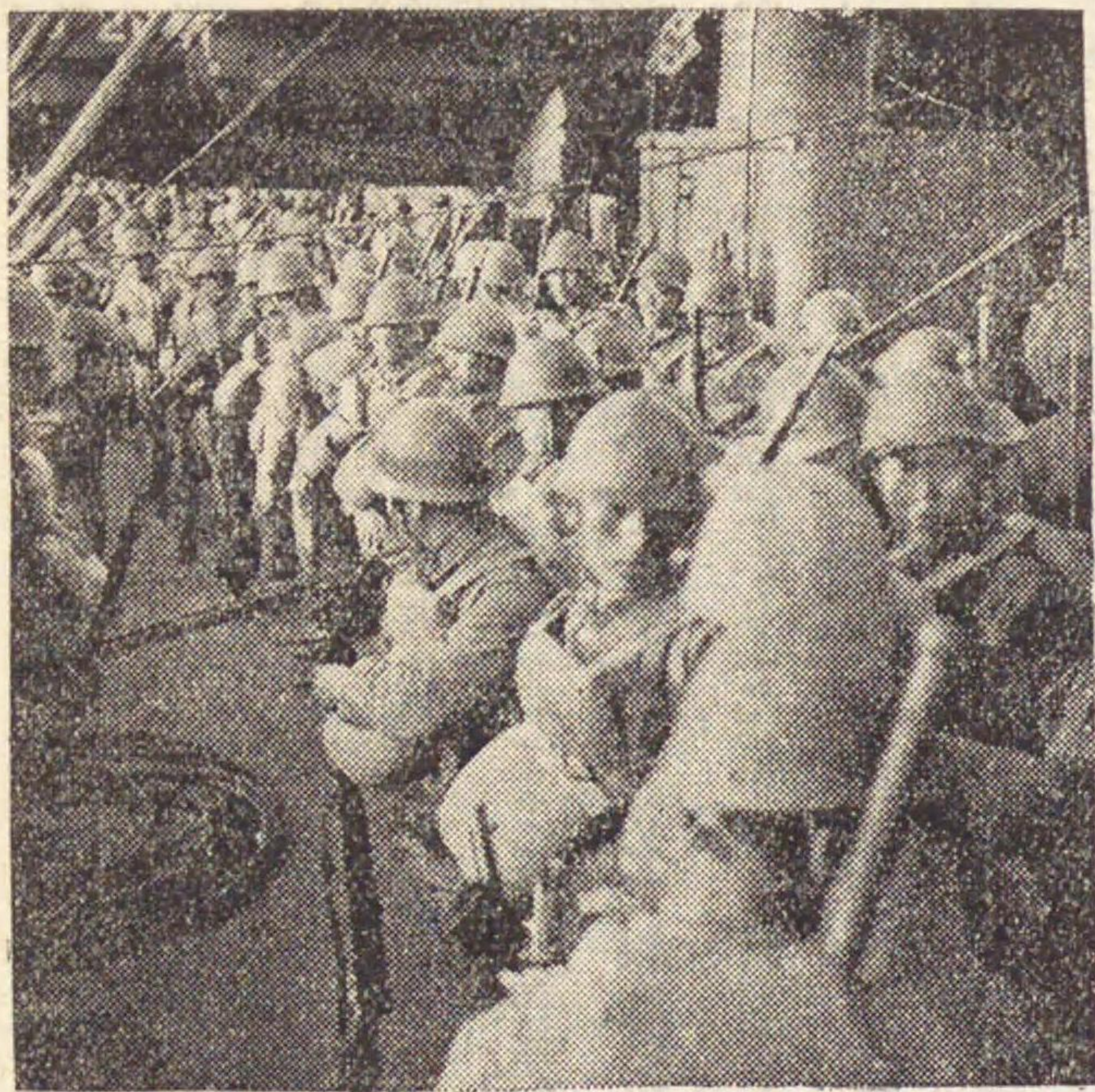
松村といふのは往年の私の碁の師匠である。當時は三段であつたが、今は故あつて森姓を名乗り、四段となり、長崎に住してゐるといふ。碁の師匠は碁の師匠らしく、弟子である私に碁盤を送つてくれ、それはこの無聊なる船中のつれづれをこよなく慰めてくれたのである。中野實口惜しがるといへども、遠くわが敵ではない。

私達が甲板に出て風に吹かれてゐると、中野伍長が私の肩を掴み、あそこから何か来ると云ひだした。船尾の方を見ると、五十米位後方を、波を切り、まつ白い飛沫を散らして私達の船を追跡して来るものがある。私もそれは鯨か海豚か、そのはげしく波を切るさまは、もつと狂暴な海獣だと思つたのである。すると傍に居た佐藤事務長が、あれはこの船から引つ張つてゐる霧の標識です、と云つて笑つたので、私達も笑ひだしてしまつた。この附近特に海南島の沿海は、二月に入ると極めて霧が深い。船の姿が霧の中に隠れてしまふので、後から来る船に前の船の位置

を知らせるために、あれを引張つて白い波頭を立てる、といふのである。それかあらぬか、次第に私達の進んで行く海の上は白々と霞みはじめ、波のために凸凹のあつた水平線が模糊と消え始め、それまで時折り船と併行して飛んでゐた白い海鳥の姿も見えなくなつて来た。英國の驅逐艦が或地點まで追跡して来たが、霧の中に判らなくなつてしまつたといふことを、私達は聞かされた。

九日の夜になつて我々の船は瓊州海峡に入つたと云はれた。豫期して居た霧はそんなに深くはなく、ただ黒々とした夜の中を我々の船は進んでゐた。深夜に到つて、我々の船團は秀英砲臺から數十發の砲撃を受けた。外側を進んでゐた私達の船は、殆ど危険を感じなかつたが、幽かに砲聲を聞き、後で聞くと、艦隊の旗艦の周圍には相當の砲弾が落ちたといふことである。我々の船はやがて闇夜の海上に錨を投じた。豫定泊地である澄邁灣に着いたのである。

二、上 陸

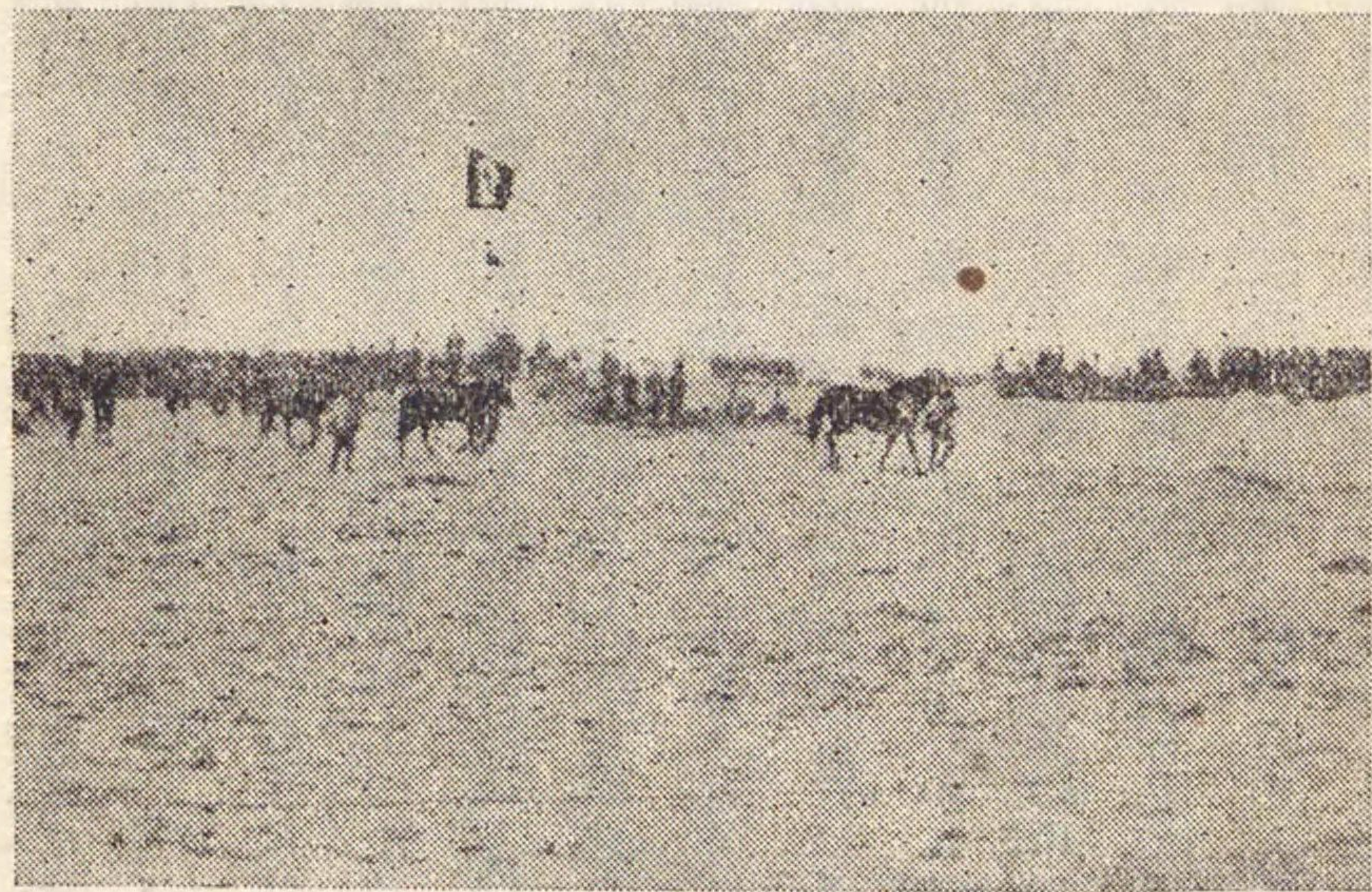


船 中 に て

武装して甲板に出ると月明である。半月がまつすぐに立つてゐて、ほのかに明るく、舟艇に移動するために甲板に集つてゐる兵隊を照らして居る。私達は第二回目に上陸するのである。第一回上陸部隊は既に海南島の土の上にある。深更から敵前上陸を開始した部隊は、數十分の後には既に上陸に成功した。緑の信號弾が上つた。敵は全く居ないらしい。私達は新聞記者と同乗し、多くの鐵舟は波を蹴り、爽快な機關の音を立てて疾走した。やがて、果しもなく續いた美しい砂濱に我々の舟艇は到着した。油を溶かしたやうな柔い波が、ゆるやかに渚を洗つて引いてゆく。續々と淡い月光の中に兵隊が上陸し、砂を踏んで前線へ出發してゆく。次第に東の空が白み始め、ほのぼのと明けて来た。

才田大尉は上陸の情報を傳へた後、前線に追及するのために馬に乗つて出發した。必要な情報があつたら馬を飛ばして引き返して来る。それで無かつたら今夜瓊山で遭ふ、本部と共に瓊山に来るやうに、と才田大尉は云ひ残し、行つてしまつた。各新聞社は第一報を送るべく、各々位置を占めて無電を張りはじめた。然し、砂原ばかりでポオルを立てるところが無く閉口して居る。見渡すかぎり茫々たる砂漠である。さくさくとめりこむ砂を踏んで私達は歩きだした。歩きにくいこと夥しい。何處まで續いてゐるか判らない砂原に、ところどころに砂丘がもりあがり、重なり、濱えんどうのやうな低く這つた草が點々と生えてゐる。時には小高い砂丘の上にパイ

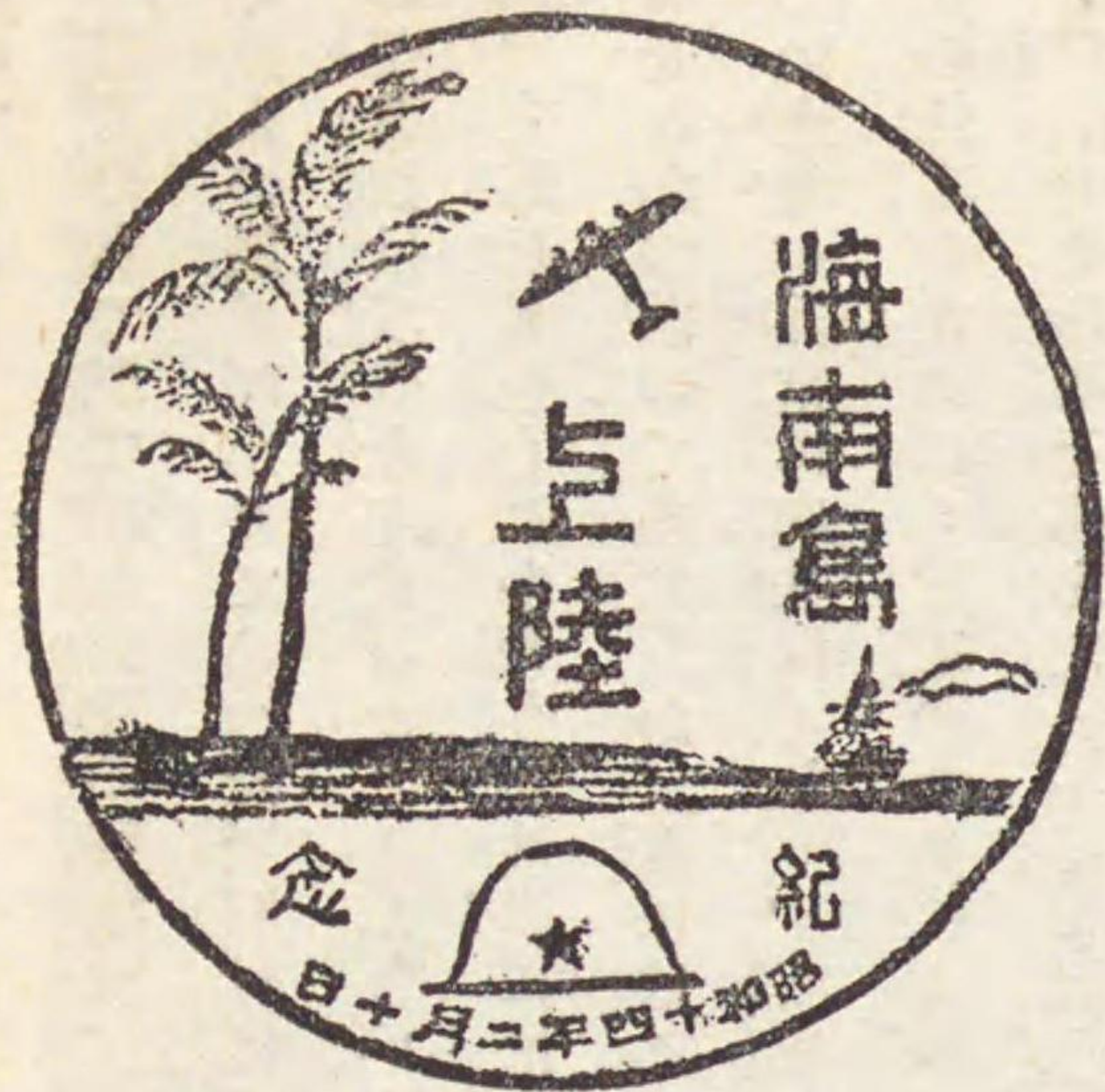
陸 上 海 邊 澄



アップルの樹がある。適かの砂原の盡きる所に林がまばらに見え椰子の木が數本羽をひろげたやうに立つてゐる。飛行機がしきりに上空を飛んでゐるが、あまり高くも飛んでゐないのに、霧の中に見えなくなり、空の中に爆音ばかりが轟いて聞える。くつきりと霞の幕を張つたごとく、汀から先の海は幻燈のやうな青さの中に黒々と數十隻の艦船の姿を浮き上らせて居る。眼を遮るものもない、この茫漠たる廣さと、すぐにべたべたとなる鹽を含んだ海風と、たれこめた霧を被つた雲と、私達が歩いて行く砂の道に繁る龍舌蘭や仙人掌、パイナップル、椰子等の植物と、所々所にある蛇の抜殻と揉みこむやうに照りつけて来る強烈な太陽と、それらのものによつて作られてゐる茫洋たる風景は、嘗て私の見たことのないものであり、その取りとめもないやうな廣大さに、私は、ああ、なるほどこれは海南島である、と、當然のことを何か事新しいものごとく、感嘆して呟かざるを得なかつたのである。然しながら、私達はこの何時盡きるとも知れない砂原の歩行と、まるきり道の分らないの閉口した。次々に上陸して来た部隊は炎熱の沙漠の中を、次々に出發して行き、我々は沙漠の中に取り残されてしまつた。各新聞社は熱心に無電を打つてゐるがなかなか調子よく行かない様子である。私は中野伍長と二人で、後から来る新聞社の

ために、道の角々に煙草の箱殻を割いて標識をし、砂の中を歩いて行つた。我々は道の標識をし
たけれども、正確な道を我々も知つてゐた譯ではない。砂原が盡き、畠の道に出たけれども、そ
こもまた砂である。砂原を開墾して深い大きな畔を作り、植ゑられてゐるのは悉く芋である。縦
横に通つてゐる道はどれがほんたうなのか少しも判らない。我々の持つてゐる簡単な地圖では、
示された地點など全く判らない。椰子の木の下に部落があるらしいから、そこまで行つてみよう
と、中野伍長と二人で、誰も居ない砂原の道を行つた。

私達はやがて、數本の椰子の下に點々と見える家と、奇妙な聲に耳を奪はれる。その聲は最初
は小鳥の囀りのやうに聞え、笛を吹いてゐるやうにも聞え、きやらきやらとけたたましく、風に
運ばれて傳つて來た。近づくにつれて、石崖の上にある部落の前を多くの人影がしきりに右往左
往する姿が眼に入り、それは兵隊ではなく、その奇妙な聲がそれらの部落民たちに依つて發せら
れてゐることが解つたのである。私達はその聲を聞き、何か嬉しくなつて來たのである。部落の
前には多くの島民達が、男は勿論、女や子供たちが大勢、何か痾高い聲で、叫び立ててゐた。
なほも、近づいて行くと、その多くの女子の中に、日本の兵隊らしいのが居るのが見え、それ



が、まもなく、通譯の賴君と、伊藤君であることがわかつた。除君も、寫眞の猪飼君も居た。住
民達は粗末な汚れた着物を纏ひ、悉く跣足で、赤銅色の皮膚に、てらてらと大きな額を光ら
せ、南洋の土人に近い表情を湛へてゐた。石造りの家が數十軒しかない小さな部落である。石壁
の上ですらりと首を並べたり、屋根の上につたりして、土民達は我々を見てゐる。突き當りの
石壁に日の丸のある佈告のポスターが貼られ、際立つて
白く光つてゐた。一線部隊と共に先行した報道部の先發
隊が貼つて行つたものであらう。この村は、女の方が權
利を持つてゐるらしく、一人の四十位の女が先頭になつ
て、我々と接衝をした。この部落は何といふか名前がな
いと云ひ、我々の質問に對して、一人の男が「那流地
方」と紙片に書いた。私は嘗ての戦場で、部落民が全く
逃げず、然もこのやうに女も子供も兵隊の周圍に集つて
來て、笑を湛へ、會見したといふやうなことは初めての

経験である。

嘗ての私の経て来た無数の戦場は、悉く無人の廢墟ばかりであつた。聞けば、この部落民は兵隊などは身たことがないといふ。支那兵も全くこのやうな沙漠には姿を身せなかつたのであらうか。私にはこの新しい土地が非常に興味深くなり、我々の直接の仕事のためにも、軍のためにも極めて希望的である事を喜んだのである。我々は、早速紙片に赤鉛筆で日の丸を書き、速製の日章旗を十枚ばかり作つて與へ、それを部落の主だつたとところに貼るやうに指示した。彼等はずつと旗をくれと云ひ、私は

陸地地點にて中野伍長と並だ火野軍曹

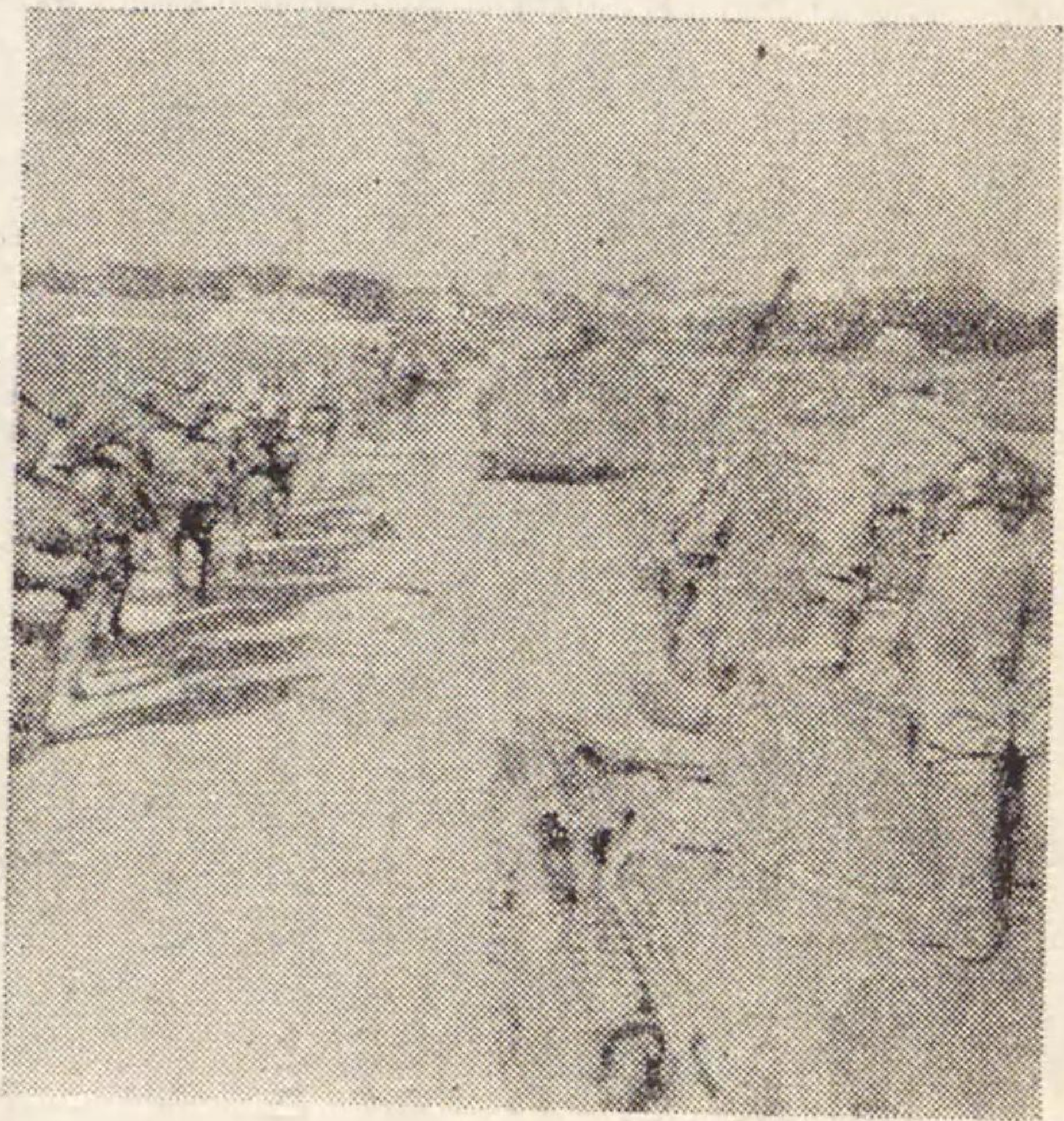


那流地方部落民

又しても旗を製造しなければならなかつた。私達は數人の苦力を雇ひ入れた。彼等は海口まで五十錢でよいと云ひ三人雇はうといふのに十人もの申し出があつた。海口市まで六七里あり、私達は一圓位やらうと思つてゐたのであるが、彼は五十錢でも大いに歓迎してゐる模様であつた。その部落から砂原が盡き、やうやく赭土の道になつた。見渡す限りの平野に、芋畑や甘蔗畑があつた。あまり丈の高くない細い甘蔗畑は一寸見ると高粱畑のやうにも見え、どこか滿洲の風景にも似てゐた。土饅頭の墓が到るところにある。薊の花が咲き、美しい小鳥が我々の行く道の上を歩いてゐる。九官鳥らしいのも飛んで居る。赭土の道に赤い埃が上る。照りつける太陽のために顔がひりひりして来る。私達は又二人になつてしまつた。部隊は、左翼隊と右翼隊とに別れ、その中央を部

隊本部が前進し、私達は本部に追及するやうに云はれたのである。部隊は點々として行くけれども本部はどの道を行つたか少しも解らない。部落はあるけれども、名を知る由もない。ISといふ標識を頼りに私達は歩いてゐたが或る部落に入ると、そこから先はその標識が無くなつてしまつた。部落民は到るところで、ぼかんとして我々を見て居る。平氣な顔で芋を掘つたり、畑を耕したりしてゐる。その部落の入口に來た時に、ぶうんと強烈な甘い匂ひが鼻をつき、入ると住民が砂糖をたいてゐた。甘蔗殻が山のごとく積まれ、甘蔗から液汁を搾るための軸木を牛に曳かせる廻轉式の石臼があつて、黒く焦げた釜の前に、朴訥な農民がしきりに薪を投げこんでゐた。何箇所もその設備があり、むんむんと甘い匂ひがあたりに充滿してゐた。どこに戦争があるかと云つたやうな長閑さである。

駐 進



私達がIの標識を見失つて、入り組んだ部落の中をうろついてゐると、騎馬の兵隊が來て、Iのはどちらへ行つたか知りませんかと我々に訊ねた。我々も迷つてゐる旨を答へると、どうもIの道の間違つたらしいな、此方に來るのぢやなかつたんぢやが、と不審さうにその兵隊は云つた。聞きただしてみると、Iといふのは本部ではなく、衛生隊で、指示してゐたのは反對の方面に來てしまつたのだと云ふのである。なんのことはない。我々は早合點して、全然別の部隊が、道の間違へて行つた跡を慕つて歩いてゐた譯である。中野伍長と私は苦笑し、又、引き返して、地圖を按じてみたりしたが、本部の行つたといふ方向は解らなかつた。瓊山へ出る道も全く見當が立たなかつた。私達は止むなく、海口へ通じてゐる本道に出た。



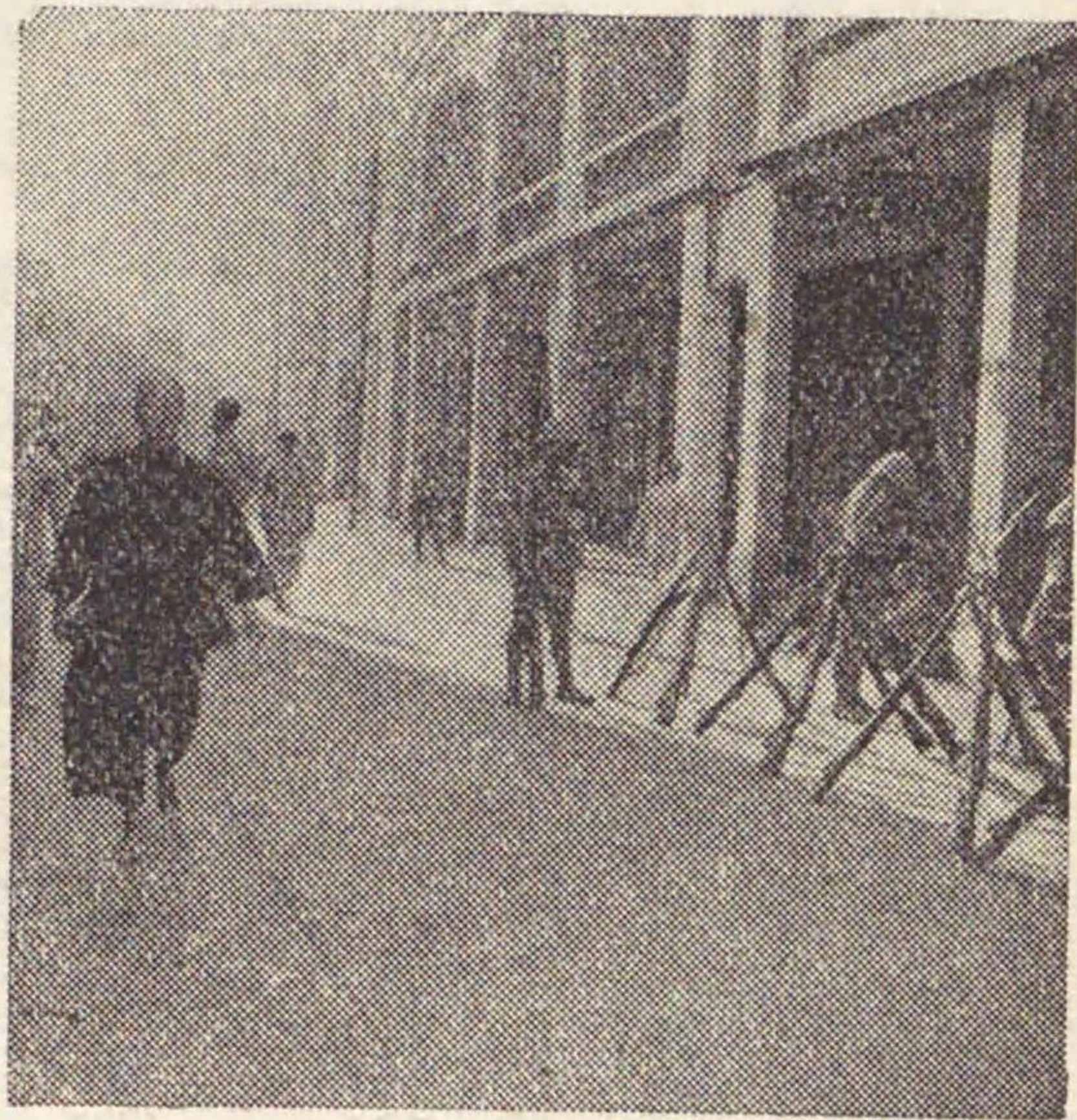
市 場

の方面に來てしまつたのだと云ふのである。なんのことはない。我々は早合點して、全然別の部隊が、道の間違へて行つた跡を慕つて歩いてゐた譯である。中野伍長と私は苦笑し、又、引き返して、地圖を按じてみたりしたが、本部の行つたといふ方向は解らなかつた。瓊山へ出る道も全く見當が立たなかつた。私達は止むなく、海口へ通じてゐる本道に出た。

部隊が點々と行く炎熱の道を私達は歩いた。私達と併行して行く兵隊は、汗にまみれ、眞赤な顔をし、背囊をはね上げはね上げ怒つたやうな顔をし、齒を食ひしばつて歩いて行く。銃を左の肩にやつたり、右の肩に移したりする。引きずるやうな軍靴の下から赤い埃が舞ひ上る。私達も足が痛くなつて來た。豆が出来たやうだ。私達は何度も休み休みして歩いた。道傍に休憩してゐた兵隊から、部隊本部はこの道をすつと前に行き、今日は早く海口に入る筈だといふことを聞いた。前方で激しい砲聲と爆撃の音が鳴り轟いた。飛行機がしきりに飛んでゐる。瓊山の方角らしく思はれた。

私達は歩きだしたが、やがて、後方から疾走して來た戦車に、同乗させて貰つた。部隊本部の杉本中尉と、堤戦車隊の八尋少尉とが居た。道路の上を埃にまみれ、蜿蜒として續いて行く部隊

海口入城

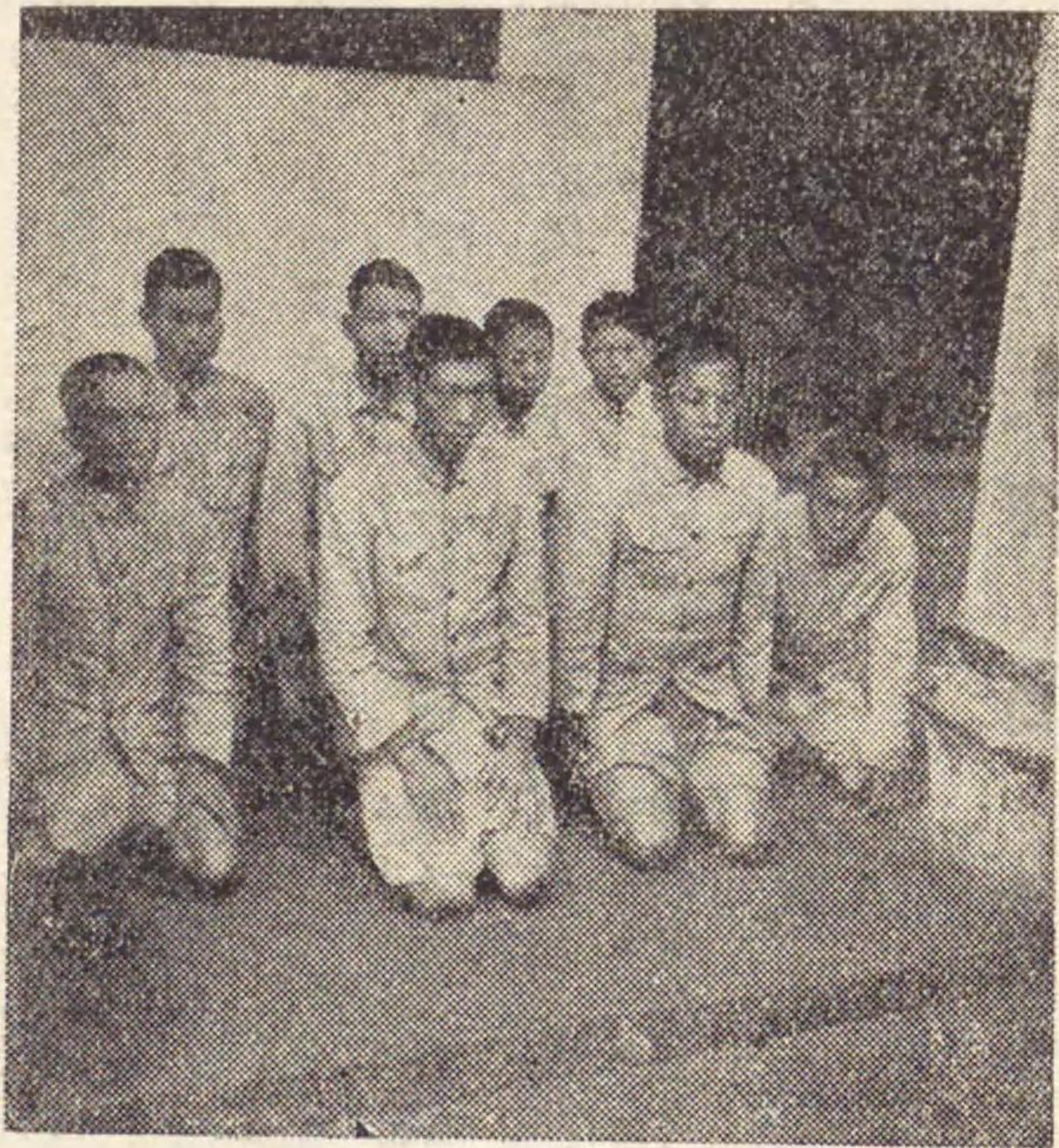


の列を我々は追ひ越した。道傍の繁みの中に、私達よりすつと先を行つてゐた報道部の一統が腰を下してゐた。氣の毒に思ひながらも、戦車はその前を疾走して抜けた。道は數箇所壊されて、戦車壕が掘つてあつた。前を行つた戦車隊や自動車隊が既にそれを埋め、我々は殆ど困らなかつた。ただ二箇所、石橋を落してゐる所があつた。戦車は道を降り川の中に入り、坂を駆け登り、パインアップルの繁みを踏み散らして、又本道に出たのである。その我武者羅な強さはあきれるばかりである。疾走する道傍に黙々と支那兵の屍骸があつた。やがて、蜿蜒曲つた赭土の道を疾走する中に、左手の丘の上に椰子に包まれた白堊の美しい建物が見え、海口灣を隔てて、まつ青な空の下に白々と光るやうな街衢の姿が見えて來た。街の上に聳え立つた五層樓の上には、翩翩とひがへる一旒の日章旗が見られた。

三、海口市

私達はここでも多くの支那人を見た。海口に入る道の兩側には高い煉瓦塀に圍まれた幾つかの

大きな洋館があつたが、右手には佛蘭西、左手には亞米利加の國旗が、翻り屋根や塀にも幾つも國旗の標識があつた。少し手前の部落にも住民が澤山居り、日章旗や日の丸のついた傳單が到るところに貼られてゐた。戰車隊に禮を述べて我々は町に入つた。四時半であつた。日章旗を手にした支那人が先頭に立ち五六人その後を随つた列が、幾つも往來した。何處かに避難してゐたのが歸つて行くのである。家の軒にも日章旗があつた。絢爛たる衣裳の姑娘や、子供達も多く見られた。町の入口にも佈告や、傳單が貼られてあつた。私達はその横に、後から來る者のために、報道部員は海南書局へ來れ、といふ貼紙を残して町に入つた。町の家には殆んど市民が居た。私は中野伍長と二人で、五層樓を目標に行つた。五層樓の絶頂から「日華協力建設新海南島」と書かれた布が下げられてあつた。狭い石登の道を陸續

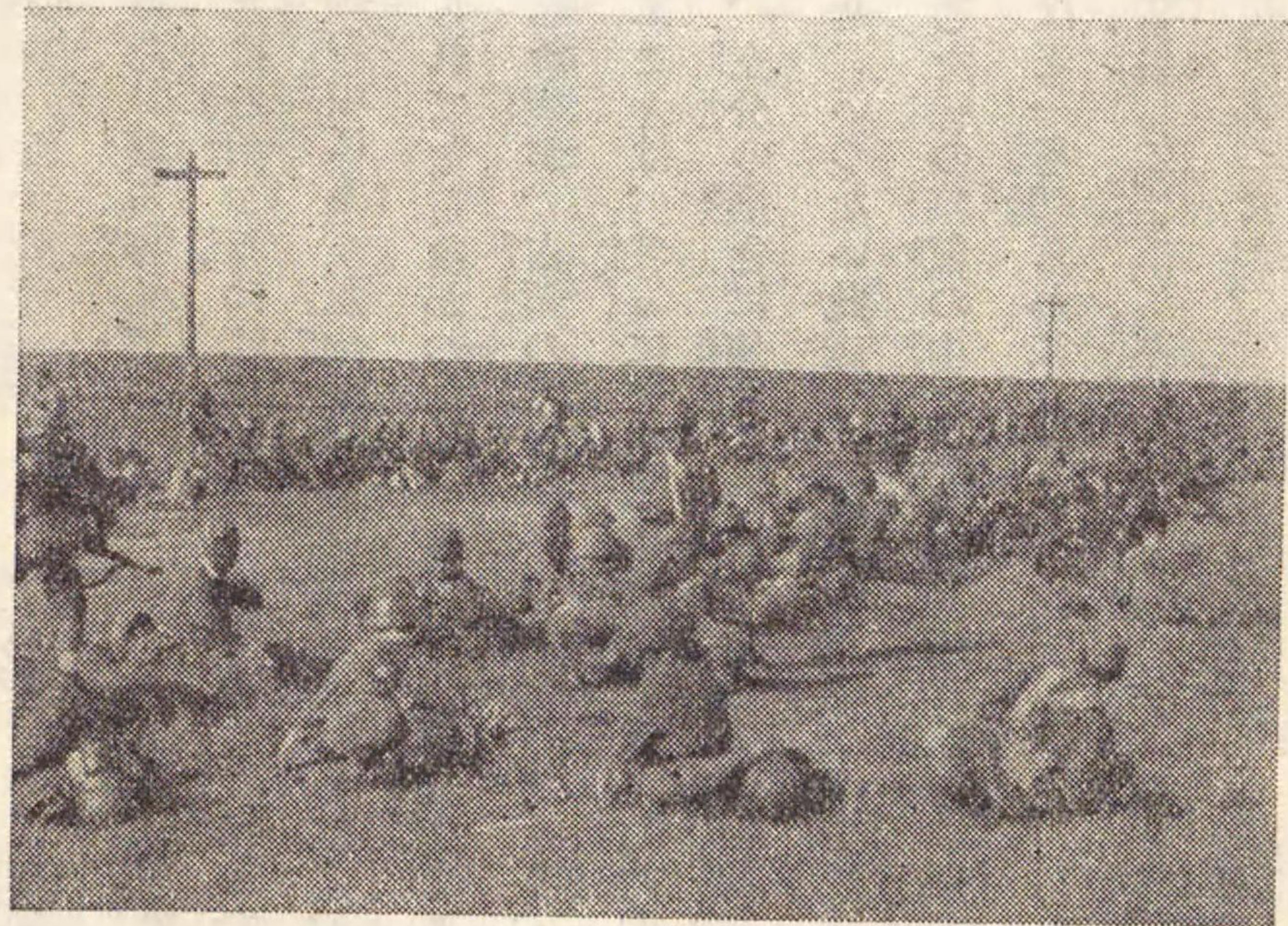


と市民達が往來し、五層樓の裏手に出ると、そこに市場があつて、外廓には、野菜賣りや、食物店、魚賣りなどが密集して混雑し、商賣が行はれてゐた。賣る方も買ふ方も、大きな聲を出し、高いとか安いとか、負けるとか負からぬとか、しきりに取引が行はれてゐた。腕をあらはにした美しい姑娘が我々の横を幾組も過ぎて行つた。市場の中にも、豚肉屋や野菜屋が澤山あつて、繁昌してゐた。これらの風景は、私には異様に感ぜられてならなかつたのである。那流地方でもさう感じたやうに、私達の軍隊が、戰鬥の後に占領した街が、占領の當日に於てかくのごとく、平常通り市場が開設され、商賣が行はれて居るといふことは、我々には實に不思議な氣がしたのである。住民が逃げずに残つてゐるといふことすら、充分の駭きに値するに、入場直後の状態が斯のごとくであるといふことは、一寸私を面喰はせ、いつたい此處の人間共は馬鹿なのではあるまいかなどとも考へられたのである。その時に感じた街の空氣の中に、この海南島全體の特種な性格が見られると思つたが、そのことは後になるほど一層明らかになつて來た。

市場の前を抜けて突き當ると、此處では、まさに壯烈な掠奪の最中であつた。そこは公安局で、玄關の衝立には、白墨で、岡村隊占領と書かれてはあつたが、兵隊の姿は何處にも見えず、

多くの支那人達が、女も子供も交り、家の中から、椅子や、机や、寝臺や、額や、蒲團や、着物や、その他のあらゆるものを擔ぎ出してゐた。又彼等は一枚の蒲團を奪ひ合ひ、さまざまの形相で罵り合つてゐた。中野伍長と私とは大喝してこれを止めたが、二人ではどうしようもなかつた。私達は遂に諦らめ、そこを後にした。私達は五層樓の横の細い路地を抜けて、大通りに出た。そこは鋪道のある立派な街衢である。右斜に白堊の尖塔が聳えてゐるのは海關である。左手に部隊本部が休憩をしてゐた。多くの兵隊が又銃をして歩道に腰を下してゐた。日章旗とともに海軍旗がひらめき陸戦隊の兵隊

止 休 小



も、澤山見えた。街は廣東と同じく、二階が張り出して、その下が歩道になつてゐる。この建築方法は中支では全く見なかつたもので、熱帯特有のものらしく、強烈な暑熱と、降り続く霖雨とを避けるためだと思はれる。兵隊の中に騎兵の岡伍長の顔が見えたので才田大尉殿はどうされたか、と聞くと、たつた今馬で上陸地點の方へ引つ返された、海口と瓊山入城の情報を新聞社に知らせるためです。今夜は歸つて來られるかどうか判らない、と云つた。私達は兎も角、海南書局に行つてみることにした。地圖を頼りに歩いて行くと點々と小さい店が商賣をしてゐるけれども、大通りの商店は悉く店を閉め切つて鐵の網戸を立て、どれにも大きな銃前が掛つて居た。何か忙しさに多くの支那人が歩道の上を歩いてゐる。飛行場附近で捕へたといふ捕虜が八人歩道の上に坐つてゐた。髪を伸したのも居る。彼等は殆ど海南人ださうである。私達は幾つか町を曲つて海南書局の前に出た。間口はあまり廣くなく、こりや大した家ではないぞ、と我々は一寸失望したのである。表には頑丈な鍵が掛つてゐて、どうしようもない。私達は近くの道傍に棄ててあつた壊れた自動車のなかから、鐵片を拾つて來て、叩いて見たが壊れさうもなかつた。すると私達の周圍に多くの支那人が集つて來た。私達は警戒したけれども、彼等は

ただ見物に來ただけで、その中から、一人の人品の卑しからぬ親爺が、私達の苦心を見かねたやうに、手眞似で、それは鋸で切つた方がよいと云ひ、私を招いて、どんどんと横町に入つて行つた。少しは用心しながら、私が従いて行くと、親爺は先に立つて暫く行つたが、何軒かある鍛冶屋と金物屋とに私を導いた。然し、それらは何れも表を閉め切つて、親爺がしきりに戸を叩いたけれども、返事が無かつた。すると親爺は又通りに出て、一軒の汽車会社と看板の出でゐる家の戸を、鐵門から手をさし入れて、何とか云ひながら叩いた。すると中から戸が開き、支那人が顔を出して、鐵門を開いた。町の家は悉く門を閉め切つてゐるけれど、皆中にゐるのである。親爺は中から細い鋸を借りて来て私に渡した。海南書局の前になると、群衆の中から又一人出て来て、その鋸を取ると、鍵の取手をぎしぎしと引きだした。するとこの細齒の鋸はすぐに二つに折れてしまつた。すると又群衆の中から、七つ道具を持つた變な男が現はれた。このひよろひよろの老耄は太い針金を色んな恰好に曲げたのを數種と、金槌を大小二個、ペンチ、釘抜き等を両手に握つてゐたが、私に委せなさいといふやうに七つ道具を振つて、その頑丈な鍵と戦ひ始めた。私はこれらの道具に依つて譯なく開くと思つたが、なかなかうまく行かず、老人

は息をはづませ、しまひには汗をたらしながら、その鍵と格闘した。鍵は長い時間かかつて、やつと壊され、ばらばらになつて落ちた。するともう一つ鐵門の錠があつた。然しそれは大して堅牢のやうには見えなかつた。集つて來た支那人達は鍵が落ちると喊聲を擧げ、手をたたいた。それから、私達を見て、好々と云ひ、機嫌をとるやうに、へらへらと笑つた。をかした連中である。次第に夕暮が近づいて來た。私は中野伍長を一人殘し、もう後からの連中が着く時分だと思ひ、引き返した。鈴を振りながら人力車がやつて來たので、私はそれを拾つた。人力車が平常通り客を乗せて、りんりんとよい音のする鈴を鳴らしながら走つてゐるのである。海關の前まで來ると、恰度到着した連中に出會つた。皆は痛さうに足を引きずり、戦車で行つてしまつた私達を恨むことしきりである。私の乗つて來た人力車に皆の荷物を全部積んで三好君が海南書局を知つてゐるといふので先に歸し、私達は晚餐のために市場に買ひ出しに行つた。私達は市場に入りこんで買ひ物をしたが、その物價の低廉なのに先づ駭き、私達がどうであらうかと思つて出した軍票を、支那人が平氣な顔ですぐに取つたのに更に意外の感を抱いたのである。私は支那人同志の取引を注意して見たが、海口市商會、輔幣代用券、と書かれた小さい紙幣が



やり取りされて居た。度々の佈告にも係らず、なかなか徹底しなかつた今までの各占領地域での軍票が、占領當日の市場で、何の疑問もなく、笑顔を以て受領されたといふことは、甚だ意外の感に打たれたのである。豚肉一斤二十銭は格安である。廣東では六十銭は取られる。野菜が一斤三十銭と云ふのは、豚より高く、筍棒である。大根、白菜、豆腐、たかなの漬物、醬油、砂糖、等を仕入れて歸つた。疲れが取れますよ、と云つて、頼君は、茶色の變な酒を飲んだ。すすめられたが、むつと臭く飲めなかつた。市場で蜜柑を買ふと、大して大きくもないのに二つ十銭と云つた。歸る途中で買ふと、十銭で六つくれた。疲れた我々の口にその蜜柑は非常においしかつた。煙草屋があつて、エムバシー一罐五十五銭と云ふ。木村君がこれは安いと云つて買ひこんだ。歸る頃には既に薄暗くなつてゐたが、

駭いたことには街には、ぱつと電燈が點いたのである。

海南書局に歸りつくと家の中はあかあかと電燈が點り、やあ、こりやすばらしい家だよ、と中野伍長が私達の顔を見るなり、嬉しさに云つたのである。才田大尉が歸つて來たのは殆ど深更に近かつた。

海南島派遣軍報道部發表 二月十一日正午 我海南島派遣軍の艦隊は九日夜半闇夜を冒して澄邁灣に入港 十日午前二時三十分弦月淡き灣内の瀾漣細波を蹴つて舟艇を進め午前二時五十分早くも海南島の一角に大學上陸せり
巨砲の轟き爆音高らかなる陸海荒鷲の活躍と相呼應して猛進撃を続け午前十時四十分其の先鋒は早くも數百の敵を撃破して首都瓊山に突入し正午之を完全に占領時を同じうして陸海兩部隊は緊密なる協同の下に海口を占領せり斯くして海南島の要衝は上陸後半日を出でずして我有に歸し堂々として入城を開始するや過半数市内に留まれる住民は日の丸を翳し嬉々として我軍を迎へたり其の夜の市内は電燈煌々として新戰場たるの感更に無し

翌けて紀元の佳節霧立ち籠むる我軍占領地域は日章旗を以て埋められ艦旗は翩翩として海口灣上を壓す避難民の復歸する者陸續として踵を接して街に溢れ新海南島の黎明は將に曙光を輝かしつつあり

これは海口に入つた翌日發表されたものであるが、上陸作戦に關しては數日後に、部隊本部の澁谷中佐から話を聞いたことがある。澁谷中佐は私の質問に對して答へた。今度の作戦の成功は、作戦の妙と、陸海軍協力が萬全であつたことが最大の原因であるが、天佑といふことも亦除外されない重要な理由であつた。一體上陸決行は紀元節を卜して行はれる筈であつたが、敵の裏を搔く意味で、決心を一日早めた。大體上陸附近は二月に入ると常に風強く、隨つて波が荒く、おまけに霧が深いといふので非常に懸念して居つたのであるが、當日はあの通り霧も殆ど無く、風も無く、波も無かつた。前日は非常な濃霧で波が高かつたさうである。又、今日は大變な深い霧である。どちらに一日違つても困るところであつた。次に、今度の海南島占領のためには、敵を破碎するといふことよりも、戦略と政略と相俟つて日本の眞意を理解させつつ、所期の目的を達成したかつたのである。作戦第一日より住民に大なる動搖を來さないやうにしたいと思

ひ、色々苦心したが、これも大體に於て成功したやうに見える。これには報道部宣撫班の協力を得た。

上陸作戦に於ける戦果

敵遺棄屍體 二五〇

捕虜 六〇

鹵獲品

二四 珊瑚砲 三

一五 珊瑚砲 一

小銃 二五〇

機關銃 二

小銃彈 五〇〇〇

砲彈 二〇〇

我が軍としても、戦死三、負傷者二、の尊い犠牲を出した。

澁谷中佐が報道部宣撫班の協力を得たと云つたのは、第一線と共に、右翼隊に行つた森本、安藤の兩君、左翼隊に行つた三好、木村の兩君が大いに活躍したことである。私達が行軍して過ぎた途中の町々には既に佈告や傳單が貼られ、日章旗が翻へり住民が逃げずに留まつてゐた。彼等は自分の装具の外に、多くの傳單や佈告文のポスターや、糊を入れたバケツ等を持てるだけ持ち、第一線とともに炎熱の行軍を續けたのである。然も殆ど第一線より先に出て行く状態で、仕事を續けて行つた。ところが、佈告や傳單を貼るのは道路を離れて部落に行かねばならない。支那人がすぐに寄り集つて来る。あまりいい氣持ではない。仕事をしてゐると、部隊からは遅れてしまふ。息を切らせて追つつく。或る部落で傳單を貼つてゐると、何處からか彈丸が飛んで來た。海口市の入口に來た時には、部隊は停止し、宣撫班だけ中に入れと云はれた。早速市中に入り、佈告や傳單を貼り、市民に日章旗をやつた。三好君と木村君とは、五層樓に上つて、用意して來た布片をぶら下げた。片側に「日華協力建設新海南島」片側に「日軍入市良民放心就業」。右翼隊では相當の激戦が行はれ、敵が逃げると同時に、森本君と安藤君とは部隊と一緒に瓊山の町に入つた。佈告やポスターを貼るとともに、布片に「良民們、絶對信頼我大日本軍的保障、快々

的回家、安居樂業」といふやうな文句を何枚も書き、道路を横に渡したり、高い家からぶら下げたりした。足には豆を作り、日に焼く、彈丸の下で任務を果した諸君は、それでも元氣で、早速「軍報道部」の看板を掲げた海南書局に揃つたのである。

四、海南書局

中野伍長がすばらしい家だと云つたのは嘘ではなかつた。兩側にある本棚にびつしりと本が詰り、間口はそんなに廣くもないのに、中は急に廣くなり、奥は何處まで深いか氣味の悪いほどであつた。奥には印刷工場があり、そこを抜けると活字を配列した文撰工場、その右に數十人の


前哨

第三期

本利巴日譯文島嶼、當部編定

目録

- 東郊の一日
- 我的狂喜詩
- 談談汪精衛的和平提議
- 文中女生的話
- 敬告戰時心理
- 話劇在農村



發行所：前哨社
 發行部：上海南京路
 電話：二二二二
 定價：每份五分
 零售：每份五分
 廣告：另議
 印刷：上海印刷局
 出版：一月十日
 發行：一月十日

海南書局の創立は可成古いらしい。海口隨一の本屋と云へば、無論海南島第一の本屋であらう。竝べられてある書籍には、相當に海南書局印刷發行のものがある。この主人は、唐品三と云ひ、抗日の親玉であつたと云ふが、抗日書籍も夥しいものである。庭の壁には、蘇東坡の像が浮き彫りにされてある。それには、「東坡笠屐圖」とあり、白髮白髯の老詩人が、市女笠を被り、下駄を履き、杖を曳いてゐる圖である。

宋蘇文忠公、爲吾瓊文化開山之祖、本局移建落成、摹遺像藉表景仰者、民國十七年瑞陽後二旬又四日也。

海南書局主人題

その横の壁に、陳銘樞が海南書局のために題した一文がある。陳銘樞は嘗て民國十七年頃瓊崖を統治したことがあり、戸口調査をやつたり、石樓を立てたり、公路を作つたりして、大いに改革を圖つてゐる。壁に題した字と云へば、私達が入る直前に書かれたと思はれる白墨書の文句が家の中の板壁に幾つもあった。あまり上手な字ではないが、「打倒日本」「打破日本帝國主義」「中國努力打日本鬼子死了」といふやうなものである。これは多分店員か職工の書いたものと思はれ

る。主人のと思はれる机の上には使ひ古された丸い墨入があつて、その蓋には、青天白日のマークの中に「勿忘國恥」の四字がある。印刷工場の入口の左側に、コンクリートの防空壕も作つてある。書棚に満たされてゐる多くの抗日文書は、平等さんが整理し、参考として必要な部數だけ残して、後は悉く焼却することにした。焚書は南渡江河畔で行はれた。後に海口市内の書局を全部調査したが、何れも抗日文書を多く販賣し、同光書局のごときは悉く共產主義と抗日の本ばかりであつた。これらの書籍類は甚だ多岐に互り、盡すべきなく、又一々内容を紹介すると面白いが、大變なので、書籍名を少しく列記するに留める。

東洋鬼子懷鬼胎 (通俗讀物編輯社編輯)

日本人民的反戰運動 (宋斐加著)

日本在中國の賭博 (阿特麗著)

血戰蘆溝橋

抗日英雄苗可秀

抗日十杯茶

抗戰歌謠

飛將軍空中大戰

郝夢麟抗敵殉國

抗戰時期民眾訓練與組織 (吳公虎著・海南書局出版)

抗日遊擊戰爭 (朱德著)

中國抗戰地理 (許卓山著・民族解放叢書)

戰時讀本 (民眾訓練及小學校用・初等第一冊より第四冊・高級第一冊より第四冊・上海生活

書店發行)

戰時的婦女工作 (羅瓊等著)

怎樣組織義勇隊 (屈曲夫著)

前哨 (前哨旬刊社編輯)

抗戰大學 (廣東・抗戰大學社)

戰地半月 (漢口・戰地半月社)

抗戰文藝 (中華全國文藝界抗敵協會出版部・漢口・週刊)

全民抗戰 (重慶全民抗戰社・五日刊)

繪本台兒莊 (靜星製)

抗日漫畫集 (林鴻林作)

その他、種々の書籍「少年畫報」「東方畫刊」「良友」等の寫眞畫報、新聞雜誌等にも、抗日抗戰の頁のないものはない。「東方畫刊」第一期第八號といふのに木製の機關車の寫眞がある。これは僕の撮した寫眞だよ、と梅本君があきれたやうに云つた。それにはちやんと「我方以木製火車頭轉移侵略國空軍轟炸交通路線的目標」と説明がつけてある。第一期第九號の終頁に日本の兵隊が可愛らしい支那の小孩子を抱いてゐる寫眞が出てゐる。これは占領地域内では子供を可愛がる日本の兵隊が何處でも撮す寫眞である。説明に曰く「侵略軍在佔據區域裏、常捕虜大批幼童。關於他們的命運傳說不一。侵略軍圍攻武漢、死傷甚重、凡是重傷的、大都需要輸血、才能够苟延殘命。侵略軍那能有這巨量的血呢？無疑地是出在這幼童的身上了。這

種殘酷的行爲、眞是空前絶後的。」これは一寸笑はせる。その他、拵らへ物を竝べて日本軍からの戦利品と麗々しく書いたり「繪本台兒莊」の紙芝居のやうな出鱈目な武勇傳など、噴飯させるものが少くない。それは無論笑つてばかりもすまされないが。

然しながら、抗日運動と共産主義とが直ちに連りがあつたとは一概に云へないやうである。昭和五年頃には瓊崖ソヴィエト地区といふのがあつて、海外にまで知られてゐたが、彼等は奥地に根據地を占め、都市附近に出没し、市民を拉致して身代金を要求すると云つたやうな手段を弄してゐた。當時駐屯軍



上部 支那の戦

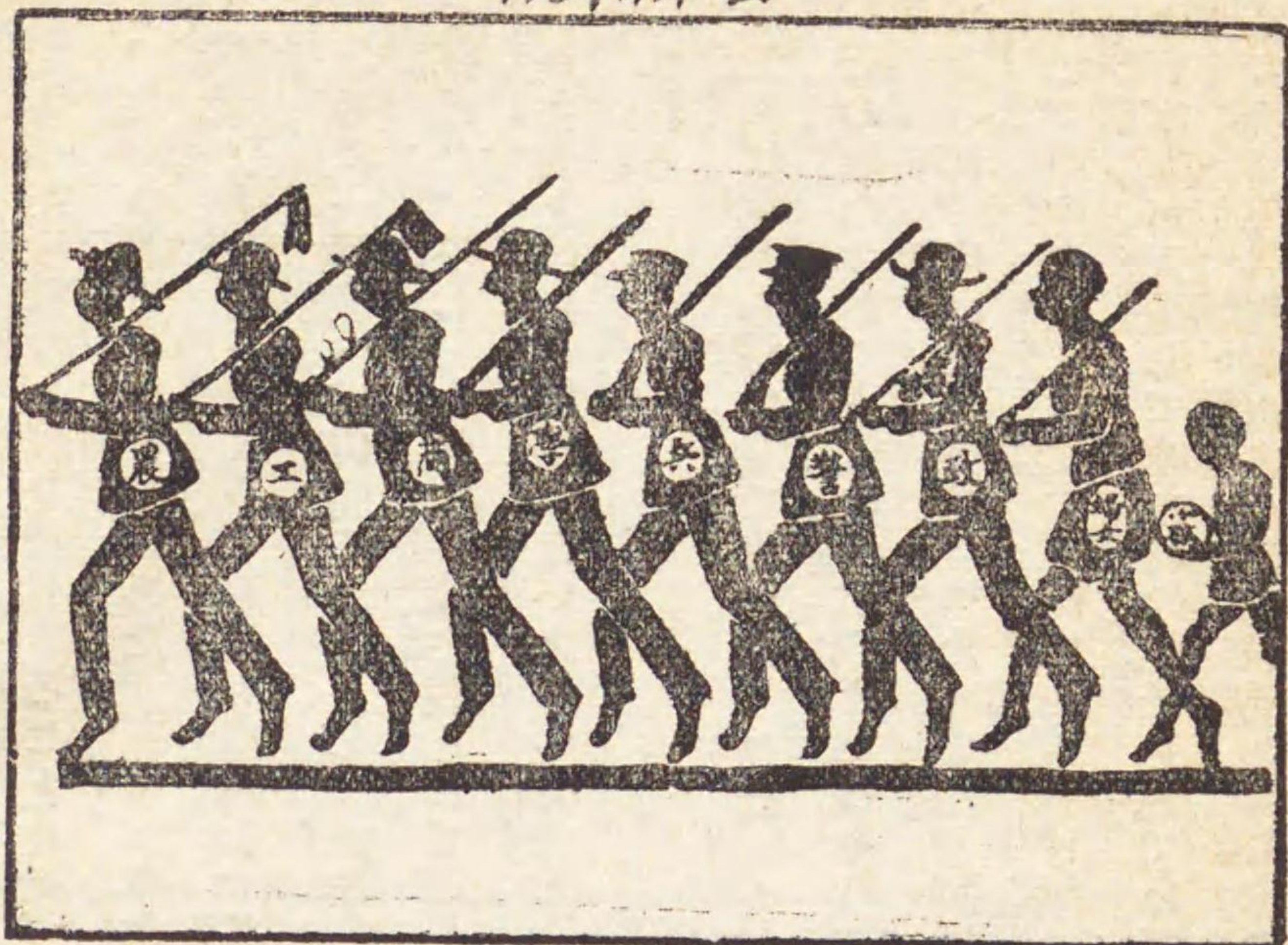
戦場

六〇

司令であつた陳箴はこれを討伐することをせず、寧ろ私慾のために、共匪に武器彈藥を賣つたりして、共匪の跋扈を助長せしめた。王毅が昭和十二年に就任するに及んで、これに大彈壓を加へ、黨員を捕縛し一時に一千人餘も處刑し、共産文書は悉く焼き拂つたことがある。共産黨はそのために一時衰へ、山間に土匪として止まるに過ぎなくなつたが、事變の進展に伴つて、再び頭を擡げた。然し、それは共産主義としてよりは、抗戦抗日運動として勃興したのであつて、寧ろ共産主義とは何等關係がないと云つた方がよい位である。海口抗日會にも共産主義者は居ないと云はれる。

紀元節は朝から深い霧であつた。町は霧を被り、町外れは霧の中にぼろと消えてしまつてゐて、その霧の中から人間の姿が浮き出るやうに現はれ、また消えて行つた。市民は相當に往來をしてゐるが、店はまだ閉め切つたまま殆ど開けてゐない。勝間田さんは、昨朝日本軍が來たと云ふので、市中の商人は朝の五時頃から逃げ始め、軍隊は八時頃から退却を開始したらしい。いよいよ日本軍が入城して來た時の様子を見てゐて、大丈夫だと思ひ、又、引つ返して來た模様だ、と私に語つた。勝間田さんが、以前から知合の支那人に、どうして逃げたのだと聞くと、あんな

去日本列打



に飛行機がぶんぶん飛んでゐるのに、どうして居られるものか、と云つたさうである。私達が霧の中に立つて話をして居ると、すぐ前の家の軒下に十数人の支那人が集まり、何かそこそと話をしてゐるのに私は氣づいた。不安さうな顔を突き合はせ、時々私達を見たり、海南書局を指さしたりし、私達がそちらを見るとぞろぞろと素知らぬ顔になつて遠くへ行つてしまつた。又、向ふの方で團つてしきりに議論をしてゐる様子であつた。私は彼等が海南書局の店員か職工達に違ひないと直観した。案の定、それから一時間ばかり後に、我々の所を訪れて来た二人の支那人は、私が朝軒下の歩道で見た支那

人であつたのである。最初少しおどおどして入つて来た彼等は、それでも我々の質問に對して、色の白い三十位の恰幅のよい方は、明快に答へ、彼等の訪問の趣旨を明らかにした。その男は周容と云ひ、海南書局で帳場をやつてゐたといふのである。つまり、彼等は、自分達は何處に行くところもない、此處で使つて欲しいといふのである。中野伍長と私とは頼君を通譯にしてこの接衝に當つた。私達の質問に對し、周容は主人は或ひは抗日家であつたかも知れない、しかし自分達はそのやうなことに何にも關係はない、私が此處に居れば印刷に必要な職工は歸つて来る、歸つて来なければ私が行けば必ず戻つて来る、職工がどんな思想を持つてゐたか、他人の心は判らない、自分は廣東の者で、そんなに古くから職工を全部知つてゐない、然し、私が呼び返し私が證明する者は使つて貰ひたい、それが抗日分子と解つた時には如何なる處分を受けても差支へない、といふ意味のことを云つた。周容と一緒に來た瘦せぎすの男は料理人で、従來炊事場で働いてゐたものだと言つた。周容はなかなかしつかりしてゐる様子なので、私達は才田大尉にこの由を傳へ、彼等を入れられることにした。それから、至急若干の印刷職工を集めて来るやうにと周容に命じた。私達は周容が職工を探しに出て行くものと思つてゐると、彼は入口の所に坐りこん

だま動かす、表通りばかりを眺めてゐた。私達が、職工の必要は急を要するのだといふと、彼は悠容として、私にここに坐つて居さへすれば、私の顔を見て職工は歸つて来るのです、と云つた。その癖なかなか歸つて来る様子も見えなかつた。私達は至急印刷しなければならぬ傳單がある、職工募集の廣告を書いた。安心して、少し打ちとけて来た快活な青年である周容と、私達は頼君の通譯で話をした。

「日本軍が来たのを何時知つたか」

「昨日の七時か八時頃、海口灣に軍艦が来たといふので、街は皆扉を下してしまいました。それから田舎の方へ逃げたのです。ところが、又、日本軍は海口に入つて来たけれども少しも危害を加へないといふ報が傳はり、飛行機も爆弾を落さないといふので、又、歸り始めました。私達も一旦逃げたけれども、又、引き返して家の中に居つたのです。すると、表の鍵を壊す音が聞え、やがて扉を破り始めたので、びつくりして又裏口から逃げたのです。主人は病氣をして寝てゐましたが、私達よりも先に逃げ、何處に行つたか解りません。この家には主人家族店員職工等を合せて四十人程居ました」

「日本軍に對して海口市民はどんな氣持で居つたか」

「漠然とした恐怖があつたのです。香港から来る大公報等の新聞に依つて、戦争のことはよく知つては居ましたが、それは何か私達の島とは關係のないことで、あつても非常に薄く、とにかくぼんやりした氣持でした。抗日宣傳は随分行はれてゐましたが、それも何か一般民衆とは縁の遠いことのやうに思はれてゐたのです」

「飛行機で傳單が撒かれた筈であるが、それを見たか」

「見ません。そのことは聞いたことはありません。何處か東の方に澤山落ちたといふことです。何が書いてあつたか知りません」

「海南書局と軍隊との關係は」

「連絡がありました。この書局は數人の合辦なのですが、軍隊からは度々將校などもやつて來、海口抗日會といふのとも關係があつて、抗日文書の印刷等もここでやりました。抗日書籍類は殆ど上海から來ましたもので、相當の賣行を見せてゐました」

私と中野伍長とは頼君をつれて、他の書局や印刷局を調べに町に出た。民國日報社、生活印務

局、尙古軒印刷所等に行つてみた。尙古軒印刷所の外は何れも表を閉め切り、誰も居なかつた。尙古軒は小さい石版屋だつたが、職人が澤山居て、五度刷位の印刷ならすぐ出来るといふことであつた。報道部指定の貼紙をし、仕事をやるから、と云ふと、その主人らしい青い顔をした支那人が非常に喜んだ。

周容が豫言した通り、その日には來なかつたが、翌日數名、十三日にも數名來て、結局十人ばかり職工が歸つて來た。周容はこの中には共産分子は居ないと證明した。取り敢へずこれだけ雇ひ入れることにし、給料は幾ら欲しいかと訊ねると、彼等は印刷工場の隅に行つて、しきりに協議をしてゐる様子であつたが、周容がやつて來て毎天一二圓、と紙に書いた。一人一ヶ月六十圓といふのである。すると傍にゐた勝間田さんが、何か大きな聲で云ふと、周容の顔色がさつと變り、何か云つてゐたが、紙の上に鉛筆で、歸つて來た職工の名を連ね、その下に數字を記してゐたが、最後に一五二圓と書いた。勝間田さんは、周容に、お前達はそんな筈棒なことを云つても、お前達が此處で幾ら給金を貰つてゐたかは調査したらすぐに判る、つけこんでそんな無茶を云ふならば憲兵隊に引き渡してしまふぞ、と云つたのである。周容は駭き、職工各人のほんたう

の給金を明細に正直に示したのである。それによると最初の申出は、一ヶ月六十圓、十人で六百圓となつてゐたところ、一ヶ月十人で百五十二圓、一人平均十五圓見當なのである。中野伍長と私は笑ひだしてしまつた。そして、從來貰つてゐた給料の三割増にしてやつた上に、日本軍票で支拂つてやることにしたのである。つまり彼等は、住み込みで食べた上に、六割増になつた譯である。それから、夜業をした場合には増をやることにし、彼等も大いに満足した様子であつた。すぐにさまさまの傳單の印刷に取りかかり、間もなく「海南迅報」を發行するやうになつたが、彼等はよく働いた。周容を取締の格にして監督させたが、この愛嬌のある青年は、その他の仕事にも眞面目に奔走し、極めて快活によく働いた。彼はなかなか酒好きらしく、私達が時折り食事の時に麥酒を抜くと、彼はさしたコップを極めておいしさうに、一息に飲み、まだ後が欲しさうにして居つた。ところが、私達はその後、非常に快活であつた彼が急に何か考へ深さうに、時々沈みこむことがあるのに氣づくやうになつた。立花軍曹は、或日彼を買物に連れて出た時のことを私に話したが、彼は町の人通りの中を何かおどおどして歩き、立花軍曹が買物のために店の主人と話をしながら、ふと振りむくと、眼付の悪い男がひそひそ聲で何か周容の耳元で話しかけて

ゐた、それは恰も脅迫でもしてゐるやうに見えた、といふことである。私は彼が抗日分子から、漢奸として目されてゐるであらう事情を諒解した。然し、私達がそれを訊ねても、決して彼はそんなことがあるとは云はなかつた。数日の後には彼はもと通り元氣になつた。

十七日に海南書局主人の妻と、細君の弟といふのが、やつて來た。我々は以前からその行方を探してゐたのである。従前は如何に抗日運動をやつて居つたにしても、翻然として悔悟し、爾今日本軍と提携して行くといふ決心をしさへすれば、我々は決してそれを卻けるものではない、一旦は敵産として没收する筈であつたが轉向しさへすれば、書局もその儘返上し、且つは、發行することになつた「海南迅報」の經營者に主人をしてやつてもよい、といふのが此方の意向であつたのである。久門少佐と才田大尉は、勝間田さんの通譯で、話をし、今一度右の意向を通じた。すると、粗末な黒い服の細君は、小さい子供を抱いてゐたが、急に泣き顔になり、主人は何處に行つたのか判らない、大きい方の子供も何處へか行方知れずになつてしまつた、私は家のことよりも早く主人や子供の行方が知りたいのです、と云つた。夫人の傍に立つてゐた周容が、突然席を外して、本箱の陰に入つた。彼は涙ぐみ、ハンカチを出して眼を拭いてゐた。又、彼はも

との位置へ歸つて來たが、夫人に自分のハンカチを渡し、夫人はそれで何度も涙をふいた。細君の弟といふ背の高い男が、海南書局に抗日書類が澤山あつたのは別に本屋が抗日家であるといふことにはならないのです。政府や軍隊の命令で、備へなければ喧しかつたので、何處でも止むなく賣つてゐたのです。御意向はよく判つたから、極力主人を探します、と云つた。私達が我々も極力主人や子供を探すやうに手配するからと云ふと、彼等は非常に喜び、何度も頭を下げた。細君は少し着類を持つて行きたいと云ひ、奥から莫菴で包んだ荷物を出して來て、連れて來たもう一人の若い男に擔がせて歸つて行つた。

海口市に入城當日から電燈の點つてゐたことは、我々にとつて何より有難かつたが、この電燈の頼りないことは、夥しいのである。十數個も電球があるのに大して明るくなく、時々うら暗くなつたり、又、ぼろと明るくなつたりする。電燈會社は重油をたいてゐるので、あまり發電機械も上等でない、金がないので原料もいつも二三日分位づつしか買はず、もう明日はたく重油がないから、ひよつとしたら點かんかも知れん、などと、勝間田さんが情ない話をしてゐた。果して、十三日の夕方は一寸點きかけたまま消えてしまつた。我々は閉口して蠟燭を點じて仕事を

した。我々は戦場に赴く時には何をあいても蠟燭は忘れず、船の中で澤山用意して来てゐたのである。暫くすると、金縁眼鏡をかけた三升家小勝のやうな支那人がやつて来て、二つある發電機のうち、一が故障が出来たので、この附近だけ消えてしまつた、明日は間違ひなく點く筈ですから、今晚は御容赦願ひたい、と云つて来た。電燈會社の親爺である。それから彼は坐りこんで色と話しこんだ。重油が切れた譯ではないらしい。重油は百二十圓位かかるといふので、一日にですか、と訊ねると、一ヶ月にですよ、と勝間田さんは云つた。ほんとか、それなら僕が出してもいいよ、と私達は笑つた。電燈會社は色々な話の末、海口を早く回復させるのは、女に觸らぬことと、軍票と支那貨との比率をはつきりし、嚴守して貰ふことです、と云ひ残し、頭を振り振り、電氣の消えた闇の街の中へ歸つて行つた。

五、傳單

私達が用意して来た傳單其の他の荷物は、トラックに積み込まれたまま、上陸當日には上げる

ことが出来なかつた。荷物類の宰領者として立花軍曹が輸送船に残つてゐた。上陸地點の方は全く荷揚げが出来ず、翌日になつて、海口灣の方に廻り、秀英棧橋から陸揚げすることになつたが、これも翌日は乗用車が上つただけで、トラックが上つたのは十二日の午前である。海口港といふのは名ばかりで、殆ど港の恰好をしてゐない。淺瀬のため、汽船は迥かの沖合に碇泊し、艇を以てその間の連絡をやるのであるが、不便此の上もない。

十二日には海軍軍樂隊の市中行進が行はれた。霧の町の中を整然たる行進を以て、唳々と軍樂が鳴りひびき、胸のすくやうな情景であつた。支那人が多く並んで見物してゐた。私達もその中に交つてゐたのであるが、すると、その軍樂隊の後に續行するやうにして、やうやく揚つて来た報道部のトラックが疾走して来たのである。私達はその車に乗り、報道部の前まで歸ると、早速、下した傳單を持つて、ピラ貼りに市中に出掛けた。

人力車を雇ひ、その上に傳單を積んで、博愛馬路に出、報道部から左が中野伍長、右が私の分擔であつた。張り出し二階の柱や、壁や、町角などに、さまざまのポスターや傳單を貼りつけて行つた。私達がこの日に貼つたのは次の數種である。

佈告

日華事變發生以來年、於茲忠勇果敢的帝國陸海空軍將兵、無不百戰百勝、去年攻略廣州及武漢三鎮、已完全掌握全中國之要域。

然而、蔣介石沉迷于奸佞之言、既將數百萬兵將及數百億財產、以供犧牲、而使全國四萬萬民衆、陷於塗炭之苦、尙未醒於抗日容共之惡夢、而遁入內地、更欲繼續並無勝算之抗戰、而企圖全中國之焦土化、真是隣邦帝國深爲遺憾者也。

國民黨元老汪氏精衛、最近提議請國民政府與日本帝國議和、汪氏眼光已洞察大局、更理解帝國之眞意、故汪氏挺身登高一呼以來、各地領袖群倫者、皆一致贊同汪氏主張、陸續脫離國民政府、而天下之大勢可知矣。

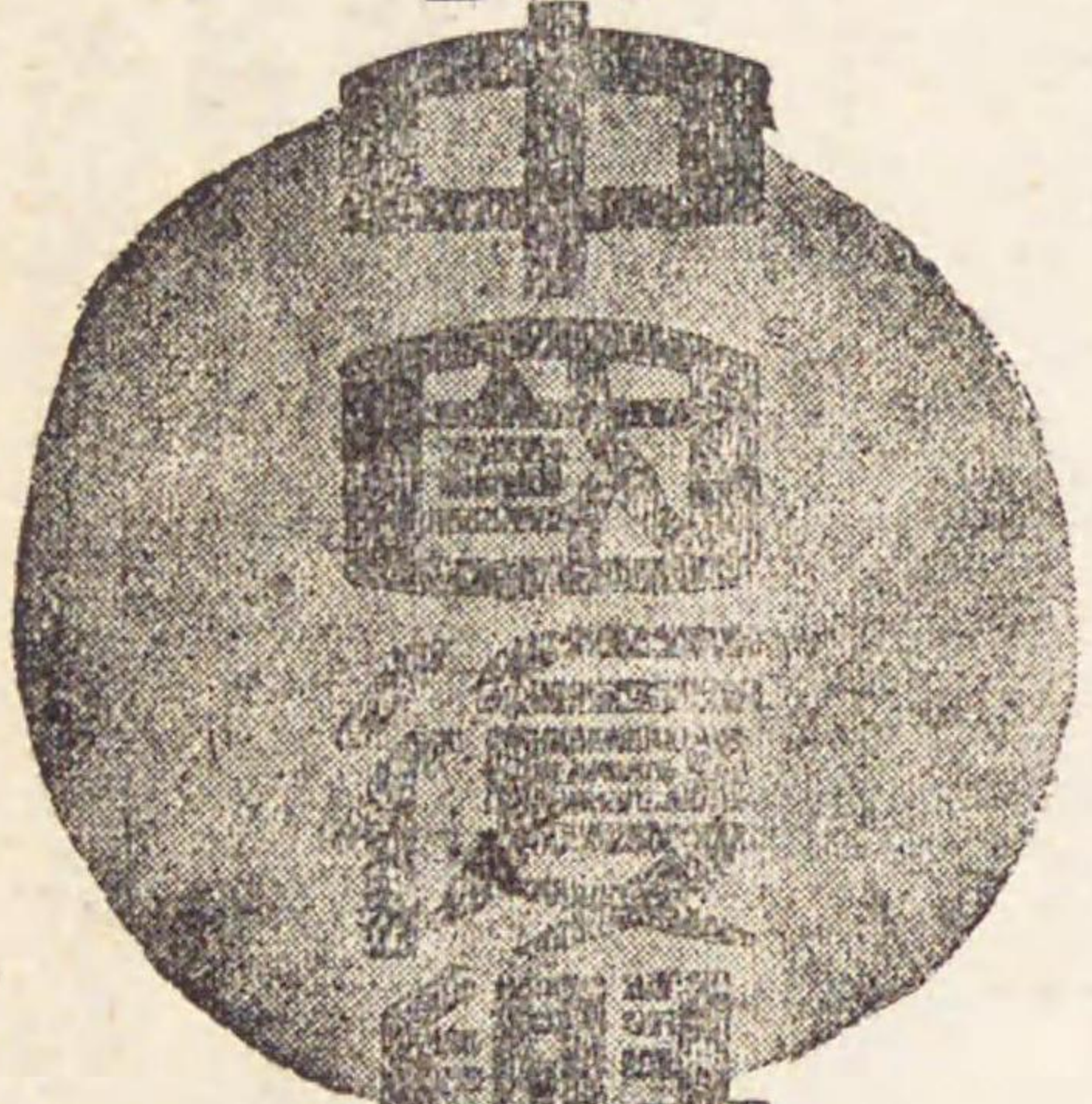
廣東治安維持會成立之後、廣州市新政府已確立、商業亦將恢復昔日之繁榮、各地市鎮鄉村咸希望歸附於廣東治安維持會之治下。

海南島雖屬於廣東省、因與本土交通不便、更爲黨軍掩蔽事實、反面宣傳、島民不能察知兩廣之眞相、對於日軍、各處尙存觀望。

故此我作戰軍、此次在海南島、大舉登陸、而陸海空軍緊密連繫之下、完全控制全島、於日海軍完全佔有勢力之西太平洋上、現在孤立命運之海南島、應倚賴日本之外無別途。

我軍按照帝國政府屢次聲明、不敢敵視中國民衆、所以無辜島民宜安心就業、縱然屬於正規軍或保安隊、悔悟其非、拋棄槍械、隨我做協力者、一律應當保證其生命財產、

建設新 興大東亞



雖然尙有向我軍抵抗加害者、或與敵軍通款者、無論何人、決不寬恕。

日本軍對島民、所要求者、就在使島民從速覺悟過去錯誤、拋棄抗日容共之偏見、信賴正義之日軍、而建設反共親日之樂土。特此佈告。

大日本海南海島派遣陸海軍司令官

「打倒禍國殃民的蔣軍閥」

「剷除蔣宋的閹閥」

「建設新中國復興大東亞」

「親日是中國民衆的要求」

「聯共是黨府自滅的政策」

數種の繪ポスター

私達が貼る端からがやくと支那人が集つて来て読み始めた。私達の手や服は糊だらけになつた。町角の壁などには、所々抗日ポスターが貼られ、青ペンキで大きく抗日文句が書かれてあつた。

全國抗戰力量在蔣委員長領導下集中起來！

陸軍第一五二師政治部製

把一切槍械拿出來・參加民衆抗日自衛團！

保衛家鄉是我門天職！

實現救國的三民主！

誓以保鐵血衛瓊崖！

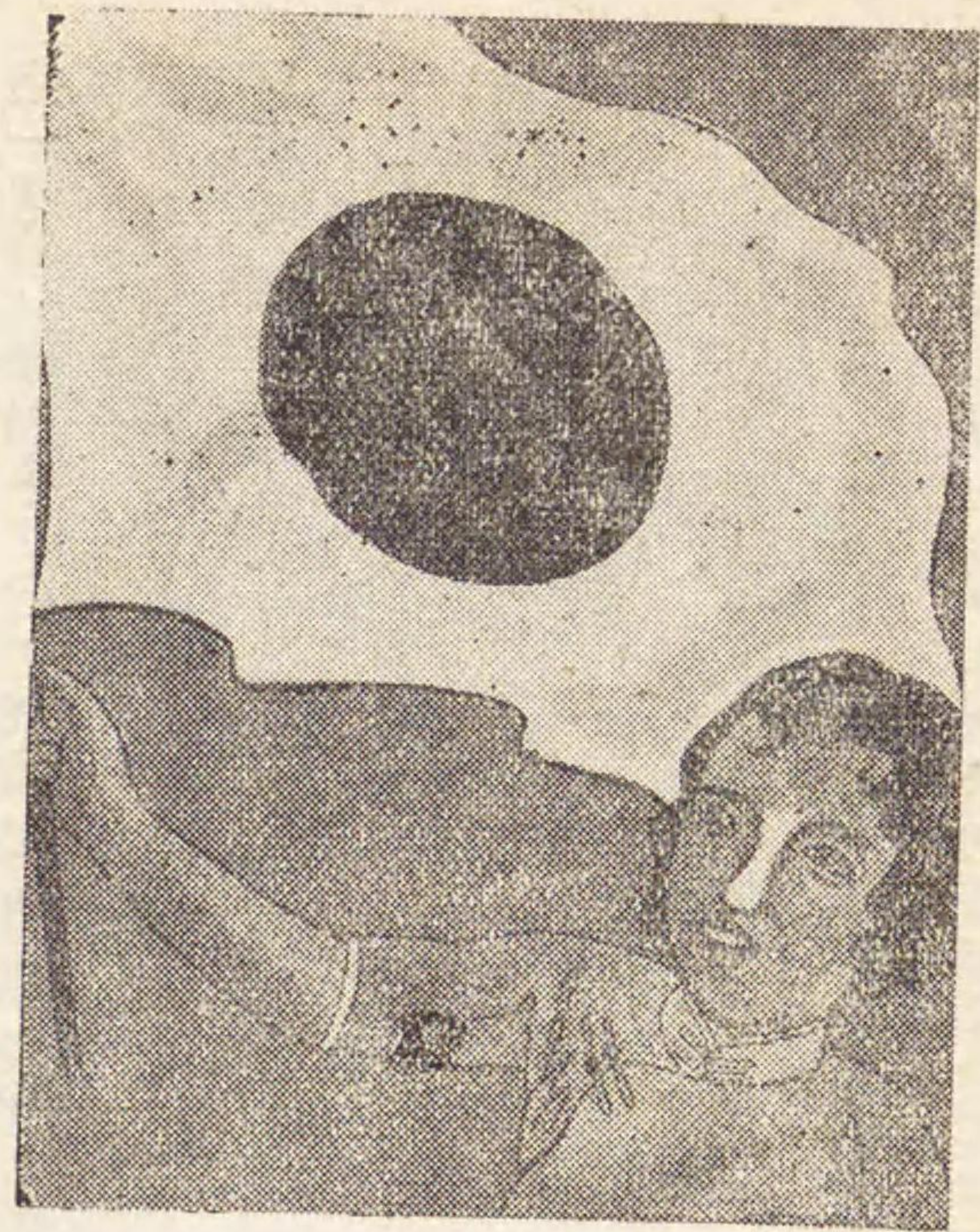
擁護王司令捍衛瓊崖！

反對一切逃避愉安行爲！

瓊山各界舉行自衛宣傳週準備委員會製

この石版刷のポスターには日本軍が支那兵から銃剣で胸板を突き通されて、涙を出してゐる繪が書いてあつた。私達はそれ等の上に我々のポスターを貼りつけて行つた。博愛路から裏通りに入ると、澤山子供が集つて來た。汚い親爺共まで寄つて來て、傳單やポスターをくれと云ひだした。老人がしきりに引つ張つて行くので、何處に連れて行くのかと思ふと、自分の家の壁を指さ

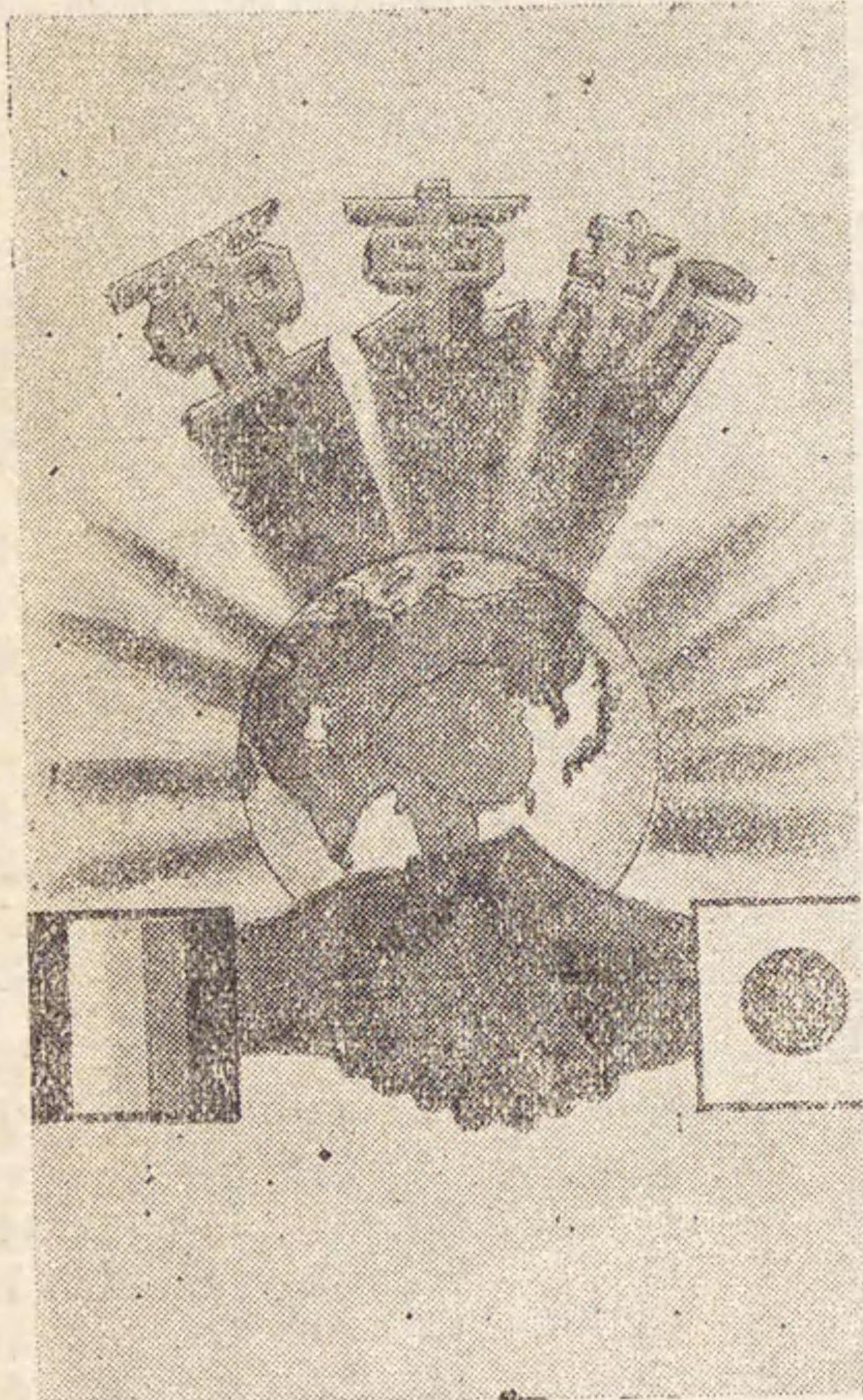
して、そこに貼れといふのである。裏通りは軒並のやうに日章旗が掲げられてあつた。その中に
点々と報道部で渡した布製の旗があり、後は殆ど手製らしかつた。これらの日章旗は、お手本が



あつたせいが一様に手際がよい。私は今までの
占領地域内に掲げられた日の丸を見て、何度も
笑ひだしたことがあつた。それは大きな布の中
に豆粒位の赤印をつけたり、右角や左角に寄せ
つけたり、日の丸が四角だつたり三角だつたり
してゐたからである。中には布に豚の血か何か
をくつつけて作つたやうな旗もあつた。私達が
裏通りを一周し、糊が無くなるまで貼つて歸つ
て来ると、報道部の前には大變な人集りがして
ゐた。傳單を撒いたり、燐寸をやつたり、旗をやつたりしたといふのである。何時までも彼等は
去らず、旗をくれといふ申込者が次から次に出て来た。

旗の申込者は後を絶たず、遂に印刷工場で、五色旗と同時に日章旗を數萬枚印刷した。印刷工
場では用意して来た傳單の外、軍の要求に依るさまざまのものを印刷した。印刷は夜を徹して行
はれ、遅滞なく進捗した。次から次に出来る仕事のために、才田大尉を初め、我々は早朝から、
毎夜深更に到るまで多忙を極めたが、我々の仕事が進捗し、眼に見えて効果を擧げて行くといふ
ことは、たとへやうのない楽しみ
であつたのである。

中野伍長は十八日に飛行機に乗
つた。定安、東山、澄邁等に傳單
撒布するためにである。従來機上
からの傳單撒布は非常に結果的に
は難しいとされてゐる。上海戦線
で敵陣地の上に撒いた傳單が、風
のため、悉く日本軍の陣地に落





民衆！不可譲了鐵路

多くの部落が見え、子供の叫び聲が聞えた。傳單を掴んで力一杯投下すると、團つたまま暫く落ちて行き、途中からぱつと散つて行く、爆弾投下と同じだ、といふやうな話をした。その時に撒いたのは次の傳單である。

- (一) 日軍通告全島官民遵守規條
 拯救脫離苛斂誅求之政府、使日華提携永

ちて来たことがある。戰場では下から射撃を受けるために、そんなに低空飛行が出来ないのである。中野伍長の乗った、河原崎少尉操縦の飛行機は相當に低空飛行をやつたらしい。定安には當時非常に多くの避難民が集合して居ると傳へられてゐた。中野伍長は歸つて来て、非常に成功した、低空すると

- 久、建設和平郷、希海南島民早一日來參加。
- (二) 現在の縣長須出來執行從前之職務、各地方保安隊、須遵守縣長命、如從前討伐共產黨土匪等事、原係爲保衛地方安寧之要務、尤須積極進行。

- (三) 王毅司令要從速來海口訪問日本軍司令官、管理全海南島行政機關。
- (四) 各縣縣長所在地、要從速佈置我日本章旗懸掛、當地衆目共觀之處、使飛機得見其形、至於部落鄉村、各家要置日本章旗懸掛。

- (五) 以上諸件爲日本軍之正當要求、報記者則盡行爆擊。
- (六) 海口・瓊山兩處、治安維持會成立、頗顯復興景象。

私達が用意して来た傳單並びにポスター等は、海口に來てから印刷したものを加へると、數十種に上る。それらは軍の指導に依り、時機に應じて撒布されたものであるが、極めて効果的であつた。二三を摘記する。

告海南島の民衆們
 中國的民衆們！

僑們須知竊據權位的蔣介石、心眼中惟有企圖自身個人的利益、不顧國家、不恤人民、以中國供其孤注一擲、所以他採取焦土政策、欲把全國重要都市、咸化焦土、最近漢口、長沙、亦不免焦土、昔燦爛繁華之地、而今滿目荒涼、民衆欲住則無家、欲食則無糧、無日不在水深火熱中、痛定思痛。

廣州、當初雖有匪徒焚掠、但是得我軍之努力、大部分則免焦土。
民衆們！快從惡夢中醒來！應覺悟抗戰之非、及蔣介石之奸計、共產黨之慘酷、一齊保衛自家的家屋與土地、以免再受累由蔣介石及共產黨之破壞政策、日本軍盡力保護僑們良民。
中國民衆們！覺悟吧！！覺悟吧！！

大日本陸海軍司令官

黨府四面楚歌

因黨府內部動搖、及黨軍迭敗、內則發生反蔣運動、外則國際信用墜落、海外華僑因廣東不戰而失、激起莫大反感、獻金運動停止、反而要求對日和平、直使黨府左右爲難、雖仍大言

抗戰到底、然事實上無能爲力矣！

佈告

日本陸軍	占據本地	日軍所使	軍用手票	的確日本
政府發行	故此永遠	信用頂大	不得跌價	不准折扣
各種價物	可得交換	各樣銀紙	可以兌換	人民要買
米糧等貨	日軍設法	即當交貨	價錢地點	隨時指示
若果人民	對於軍票	造謠誹謗	妨害使用	當依軍律
看做奸細	極力查拿	定豫嚴懲	特此佈告	各宜勿違



繪傳單の中に投降票といふのがある。これの裏には次の文句がある。
手執此票來投誠者、雖是正規軍、也必保障其生命財產
(一) 餓者給與糧食、傷者爲其醫治、貧者給與銀錢

(一) 希望人生的眞正生活者、快來投我吧!! 安居樂業、只可求於我的

(二) 俗語說「邪不敵正」邪都是連戰連敗的、爾要投邪嗎?

(三) 還是正來求安居樂土呢? 要總想念父母妻子兄弟姊妹方對吧?

快來歸我吧!! 爾們所行求的東西、我馬上可以給、請放心來吧!!

日本軍啓

この傳單は今度の戰爭で早速効果を現はしたが、私は上海戦線に於て、同じく敵陣に撒布した投降票が極めて有効であつたことを知つて居る。日本軍が支那兵を捕へてみると、彼等は靴の底や軍服の折目や、その他一寸眼に着かないやうな身體の一部分に、その投降票を小さく折り疊んで入れてゐたのが澤山居た。海南島に於ける軍隊は、正規軍と云ひ條、中央から派遣されたものではなく、殆ど海南島人を強制徴發したものが多いうさうである。彼等は戰意なく、投降して來る者、踵を接して居る。聞くところに依ると、まだ日本軍が行つて居ない奥地附近で、支那軍に依つて傳單が撒かれてゐるさうである。それは色紙に墨で書いたり、騰寫版で刷つたりしたもの

で、抗日文句を並べ、中には日本軍に對して作られたものもあるといふ。それにはやはり、日本兵よ、投降して來い、と云ふやうなものもあるさうである。それらの蠢動は奥地に蟠居してゐた

悲軍行

蔣權亡命在旦夕 盲從抗日無所益
 日軍百萬捲土來 早日奔回故鄉井
 君家父母倚門問 盼望祈神淚暗泣
 骨肉分離兄弟散 閨房妻子慕君歸
 君雖秉節懷報國 奈何頑蔣含毒策
 劉劉良民血脂膏 橫行掠奪人神惡
 汝等無辜累充軍 頸帶鐵鎖足連羣
 狂奔防禦強執槍 苛厲絕食喪人倫
 可憐汝等餓地哀 日軍造福普天涯
 回頭猛醒殺暴蔣 立起維新政府來

て來るものは優待し、決して生命を傷けない、と、云つたやうな意味のものが、日本文で、幾種類も作られた。これ等は殆ど日本兵の眼に止らなかつたが、眼に止つた場合でも、日本の兵隊は

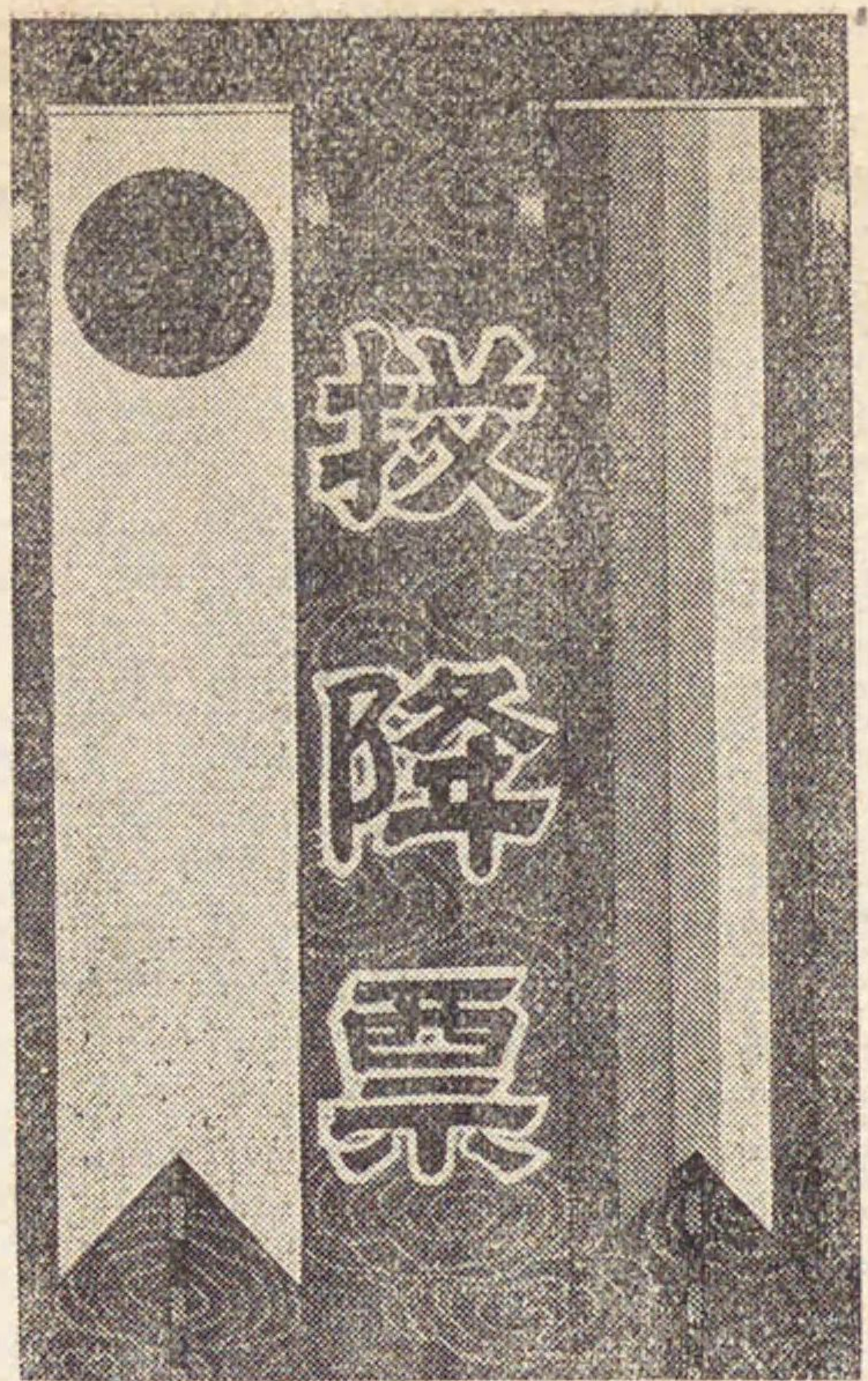
共匪の手に依つて爲されてゐるものと想像される。奥地に遁入した吳道南が、頹勢挽回のため、嘗て彈壓して投獄した共産黨員をことごとく釋放し土民を蒐めて遊撃隊を組織しようとしてゐるさうである。それらに依つて、若干の赤色分子が、何かしてゐるであらうと思はれる。中支戦線に於ては、支那側からの宣傳が大がかりに爲された。それらの中には、直接日本の兵隊に呼びかけるものも多い。尊い生命を無駄に棄ててゐるではないか、我等民衆は手を握らねばならぬ、我等の下に來れ、投降し

笑ひだし、支那側の一生懸命の呼號は、却つて日本の兵隊の反感を買い、祖國愛に燃え立つ日本の兵隊を一層強くする逆効果を現はしたのである。

ある。私は上海に於て、赤都モスコウからの露西亞語の放送を聞いたことがある。私には露語は判らないが、それは張鼓峰事件の直後であつて、私は判らない外國語の中に、屢々、サムライ、といふ言葉の繰り返されるのに奇異の感がした。それはソヴィエトに於ける對日宣傳についての放送であるといふことであつた。つまり、従來、共產黨が唯一の基調とした左翼公式主義に依るところの理論と宣傳方法は、一切、日本に對する限り誤謬である、帝國主義の名を大聲し、

大衆諸君！絶対信賴我的日本軍！
我日本軍歡迎來投降者。並保証其生命與財產。來！來
速向日本國旗之下進來！
我日本軍已佔據的地域內的民衆，信賴我日本的保障，
已陸續歸來了！

或ひは、資本家と軍閥の走狗となる、といふやうな呼びかけは、つまり日本國民をばらばらに分離反させて、内訌を期待するやうな工作は、日本人に關する限り一切無駄である。ソヴィエト並びに支那に於ては、日本と戦端を開けば、必ず國內に動搖を來し、軍隊の中に反戦運動が起り革命が勃發するものと期待した、ところが實際は、事變とともに日本國民は熱烈なる祖國愛に燃え、舉國一致して益々鞏固に國內は緊張しつつある、殊に、日本の兵隊に到つては、封建時代に武士道の精華と云はれたサムライと何等異るところがない。これらのサムライに對して、左翼公式主義的な呼びかけは絶対に意義を爲さない、日本の兵隊はただ殺してしまふより外に、最良の方法はない、といふ意味なのである。それからの放送には、日本の軍人といふ代りに、サムライと云ふ言葉が使用されてゐたといふことである。



ト並びに支那に於ては、日本と戦端を開けば、必ず國內に動搖を來し、軍隊の中に反戦運動が起り革命が勃發するものと期待した、ところが實際は、事變とともに日本國民は熱烈なる祖國愛に燃え、舉國一致して益々鞏固に國內は緊張しつつある、殊に、日本の兵隊に到つては、封建時代に武士道の精華と云はれたサムライと何等異るところがない。これらのサムライに對して、左翼公式主義的な呼びかけは絶対に意義を爲さない、日本の兵隊はただ殺してしまふより外に、最良の方法はない、といふ意味なのである。それからの放送には、日本の軍人といふ代りに、サムライと云ふ言葉が使用されてゐたといふことである。

私達は戦場で時折り、支那側からの日本の兵隊に對する傳單などを見、それを讀むと、をかしく吹き出してしまはないでは居られない。それから、日本の兵隊であつたことが嬉しくなつて來るのである。

六、海南南迅報

私達が輸送船中で、重大な事として考へたのは、漢字新聞の發行といふことであつた。勝間田さんの話では、海口で發行されてゐる民國日報といふ新聞が最も勢力を持つて居り、海南全島に普及されて居つて、それはもとより抗日紙であり、その方でも指導的であつたといふことであつた。民國日報は黨部の機關紙であつたのである。海口に入つてから、民國日報社に行つて見ると、實に汚い家で、印刷機械も一臺しかなく、これが全島に君臨してゐた新聞社とはどうしても見えなかつた。我々としては最初、民國日報を復活させ、民國日報の名に依つて、新しい内容を持つた新聞を刊行することは、民國日報が指導的な抗日紙であつただけに、却つて効果的である

と考へてゐたのである。然しながら、來てみると、どうしてもさう出來ないやうな事情もあつた。その中に、或る日、民國日報社は何者かに依つて掠奪され、屋内には一物をも留めざるまでに、活字等も含んだ一切の道具が持ち去られ、据ゑつけになつてゐた印刷機械は使用に耐えぬまでに破壊されてしまつた。

我々は全然新しい出發をすることにし、印刷職工の募集と同時に、新聞記者の募集をした。すると十三日に國光報の記者をして居つたといふ青年がやつて來た。戦争のために發行されてゐた一切の新聞が停止された結果、新聞記者は一時に失業してしまつた様子である。まだ外にも同僚が居るらしく、彼は敢然として偵察にでも來たやうに見えた。彼は、自分達はいかにも日本軍はまだ恐いけれども、飯が食へないので仕方なしにやつて來た、と正直なことを云つた。才田大尉と共に接衝し、その男が他に編輯主筆をやつて居たのが居るから、連れて來たい、と云つたので、證明書を與へてその男を迎へにやつた。ところが翌朝その主筆をやつてゐたといふ男は居なかつたと云つて、その吳といふ新聞記者は白髯の美しい人品の良い老人を伴つてやつて來た。薄水色の服を纏ひ、象牙のパイプでしきりに煙草を吹かす、端麗なるその老人は、姓名趙心齋、年

齡六十一歳、浙江の生れで、各縣長などを歴任したことがあるといふことである。彼は問題が月給の事に及ぶと、自分は無職で食へないでゐても、法外の廉價に依つては文業を賣らないといふやうな狷介な様子を示した。彼は接衝の最中にそそくさと立ち上り、出て行つてしまつた。然し間もなく二人とも引つ返して来て、兎も角働くことになつたのである。

翌る日になると、許讓臣といふ背の高い男がやつて来た。彼は臨高縣立師範畢業後、會元縣立初級小學校長を五年間やり、其の後、臨高縣黨部幹事をやつたことがあるといふ。許は新聞事業が偉大なる價値を有してゐることを痛感してゐるので、是非とも入社させて貰ひたいと熱心に云つて来た。それから、詩人任澤生がやつて来た。彼はこれまで民國日報社に特約で色々な原稿を賣つてゐたといふ。それから、菊石のモダンボーイ、抗文瑚が現はれた。その外にも澤山やつて来たが、そんなに必要でないので、先づ海南迅報社は、この五人を雇ひ入れることに依つて陣容が成つたのである。才田大尉の指揮の下にさしづめ中野伍長が編輯長格である。民國日報の名を踏襲することをやめて、全然新しい名によつて出發することになり、新聞名がさまざまに評議された。瓊崖新報、海口報、海南日報、瓊州迅報、等多くの名が出たが、當分日刊といふことは事

實上困難なので、融通性のあるやうに、海南迅報がよいといふことになり、決定した。印刷工場は他の印刷物で繁忙だし、新聞發行はなかなか困難のやうに見えたが、中野名編輯長の努力に依つて、駭くべく、この事業は成果を擧げたのである。私は十四日に任務を帯びて、海南島の南端である三亞港の方へ行つたが、十五日の夕刻、海口に歸來して見ると、既にインクの香もあたらしき海南迅報の第一號が發刊されてゐた。それは半片の一見間に合はせであることは見られたが、兎も角、私はその成果に感歎したのである。そればかりではなく、數日の後、半片の創刊號は二號三號にはその倍になり、四號には両面印刷となつて、立派に新聞の形を整へたのである。發刊の辭と海南迅報の題號は中野伍長が筆を揮つたのである。

一枚の新聞が出来上るまでは、まるで騒動であると形容した方がよいであらう。我々は言葉が全く通じない。頼君の通譯では大要の意味しか判らない。我々が掲載したい原稿を日本文で作る。それを直接漢譯する誰も居ない。頼君が通譯して、日本文の意味を傳へ、それを校長先生か吳かが支那文にする。大要の意味は移されてゐるが、まだるこしいことは齒痒ゆいばかりである。又、校長先生か主筆が書いて来た文章を一々眼を通さなくてはならない。意味は判るが、細

部になると、何のこともやら解らない所がある。助動詞などがはつきりしないので、全然反對に解
釋したりすることも時々ある。檢閲の上訂正して書き直させる。どうにか原稿が出来上る。今度
は文撰して組む段になると、ほんとうに新聞に經驗を持つた者がないので、活字の大きさを、段
割や、箱の取り方などが減茶減茶である。ゲラに何度も朱を入れて組み直させる。編輯室と印刷
工場の間にお百度が踏まれる。それからやつと本刷に掛るといふ調子である。ところが上陸以來
の行軍の疲れが出たらしい頼君が神経痛の爲に入院してしまつた。曲りなりに用の足りてゐた通
譯を失つて報道部は全體として非常に困つたが、殊に弱つたのは海南迅報である。仕事はたと
停頓したごとくに見えた。然しながら、恐るべきことには、必要の前にはあらゆる困難が克服され
て行つた。新聞事業の一切が、通じない怪しげな支那語と、手眞似と、眼付きと、筆談とに依つて
行はれた。私は、自分の意向を傳へようとして、齒痒ゆさうに、あらゆる姿態を盡し、踊ること
く手を振り眼をむいてゐる中野編輯長の滑稽なる姿に、なんぢや、獅子舞みたいだな、と冗談を
云つて笑ひながらも、はげしく胸衝たれる思ひであつたのである。頼君が居た時の三倍の混雑と
面倒とが一枚の新聞のために費された。殆ど誰も夜の十二時より早く寝たことは無かつた。これ

らの困難と努力とに依つて、表面的には極めて順調に、隔日に新聞は發行され、町に出されたの
である。十九日に、和文漢譯のために林君が來、通譯として李君が來たので、仕事は大いに進捗
することになつた。海南迅報は軍に於ても極めて好評であり街でも市民達に大いに歡迎された。
任の云ふ所では、海南島隨一の言論機關であつた民國日報は數年前は四千部の發行部數を持つて
ゐたのであるが、最近では次第にその數を減じ、一千部に滿たず、その困難な經營を廣告料等に
依つて僅かに補つてゐたといふことである。香港から來る大公報其の他の新聞が一萬部に達し、
それに壓倒されてゐたのである。海南迅報は第一號は配布をしたが、第二號から每份貳錢といふ
價目をつけ、賣子を出して町に賣らせたが、每號數百部の賣行を見せ、號を透うて増加するばか
りで、將來一萬の部數を豫想することはさして難事ではないと思はれるやうになつたのである。
一室を構へた編輯室の風景は面白い。そこは傳單倉庫なのだが白髯を撫して悠々と煙草を薫ら
す趙心齋が中央に控へて居る。海南迅報の督印人(名義人)はこの縣知事になつてゐる。彼を名
義人とすることを決定した時、老人はにたりと會心の笑を洩した。その横に許は眼鏡をかけて何
時も何か書いたり、讀んだりして居る。彼は校長先生らしく、彼の原稿の文字を植字工が一字間

違へたと云つて、あのやうな職工は變へて貰ひたい、貴方が直接行つて指導して欲しい、とぶんぶんとして編輯長の所へ言つて來たさうである。或る時、急ぎの原稿を校長先生が書いてゐた。編輯長は横で督促してゐた。すると何かそはそはして落ちつかないので、快々的とか何とか云つて催促すると、突然、原稿の上に、我大便、と大書した儘、一散に駆け出して行つた。そんな話を中野伍長は笑ひながら話した。任澤生は一見して藝術家のごとく見える。彼は阿片を嗜むと自分で云つたが、さういふ疲れたやうな不健康な所があつた。然し彼の眼は犀利であつて、彼が観察者であることを示してゐた。海南迅報に文藝欄が出来、詩や小説や劇曲などが載るやうになつて、生彩を加へたのも、彼のためである。それに抗と吳とが加はつて、圓卓を圍み、仕事がないされてゐるのである。

海南迅報はもとより將來は適當なる民間の人物に委管經營さるべきものである。海南書局主人唐品三を物色してゐるけれども、未だに行方が知れない。

報道部は別に同盟電に依つて陣中ニュースを毎日發行した。これには川島軍曹と、白石一等兵、原一等兵の三名が當つた。謄寫版刷りで、各部隊に配布するのである。

七、東洋の南端

私達の乗つた飛行艇は午後一時五分に水を離れた。多くの艦船の浮んだ海と、白つぽい海口の街が次第に下の方に小さくなり、飛行艇はまもなく瓊山の上を過ぎて行つた。十四日早朝、海軍部隊が海南島の南端である三亞、榆林の兩港一帯に敵前上陸を敢行した。我々はその成功を祝ふためと、一層陸海協同作戦を緊密にする連絡のため、三亞港へ向つて行くのである。一行は海軍の桑原少佐、陸軍の久門少佐、高山大尉、各新聞社等である。青い蛇のやうな南渡江を飛行艇は越える。紺碧の海と、さまざまの色で縞模様になつた平野とが、うねうねと曲る銀絲のやうな海岸線に依つてくつきりと區劃されてゐる。我々の乗つた飛行艇が、見下す陸地の上にはつきりと影を落とし、すうと走つて行く。或る時は青壘の上に影を映じる。それは巨大なる鯨か何かのやうに見える。やがて、山岳地帯に入つて來ると、山嶺には鬱蒼と樹木が生ひ茂り、どんな深い山の中にも、插鉢の底みたいに縞模様が見え、田畑があつて、點々と部落がある。部落が散在し

旗艦の甲板には茶褐色のリノリウムが敷きつめられ塵一つなく、私は兵隊靴でその上を歩くのに恐縮したのである。軍靴の底に打つてある武骨な鍔が、リノリウムの上へべつたりと痕をつけると。間もなく、久原少佐、久門少佐、高山大尉と私とは、數階の絶頂にある司令塔に案内された。中央に地圖が擴げられ、長官近藤中將を中心に參謀の人達が居られた。海軍部隊の上陸作戰の経過を聴かされ、必要な會談の後に、そこを辭した。

私達は直ちに上陸をして、陸上で一泊する豫定であつたが、種々の都合に依つて、その日は艦中で一泊、翌朝上陸をすることになつた。艦上から見ると、背後に山を回らした三亞港は、港の入口にも幾つかの島を控へて、天然の良港のやうに見える。現在海南島で一番賑賑を極めてゐる港は海口港だと云ふことは、あきれる外はない。それはただ雷州半島と接し、首府瓊山に近い、などといふ地理的に便宜なためのみであつて、港としては話にならないのである。空から見た清瀾港や榆林港などが港として立派であるにも係らず、地理的に不便なためと、少しく瑕瑾があるために殆ど活用されてゐないと思はれる。瑕瑾といふも、珊瑚礁がある程度らしく、それは築港工事に依つて容易に除き得るものであつて、少しく手入をすれば立派な港となるものが、何等意

を用ひられずして放擲されてゐる始末である。意は用ひられたかも知れないが、海南島では築港などといふことは全く行はれてゐない。海南島の周圍に若干の良港が出現することに依つて海南島全體が急速に發展し、云はば未開の耕地が、臺灣を過かに凌駕する豊饒の地と化することは歴然たるものがある。私がこのやうに柄にもなく、港について感想するのは、私の郷里である北九州に於て嘗ては蘆荻肅々たる一水江に過ぎなかつた洞の海を築港改修することに依り、現在の洞海湾を中心とする北九州が、急速に發達し、現在に於ては日本の心臓部とまで稱せられるに到つた過程を私が見て來たからである。

海南 迅報

蜿蜒と白く續いた海岸と、樹木の茂つた山々と横に連つて鋸の齒のごとく見えるのは悉く椰木林である。私達の上を強烈な太陽が照りつけて來るが、島の北端である海口に比べて、ずつと暑く、きらきらと明るい。海水の色も美しい。潮風に當つてゐると、すぐに皮膚がべたついて來て、舐めてみると鹽辛いのである。ところで、些か残念な話であるが、夕刻に近づくにつれて、我々は空腹で堪らなくなり、

何もなくなつた胃袋がくうくうと鳴り始めたのである。我々は今朝十一時に集合して出發したために誰も晝食を食べてゐないのである。やがて待つ程に食堂に案内されたが大きな皿に山盛りに出された五目ずしを、我々はものも云はずにうち平げた。その夜は海軍の従軍記者と同室で寝た。甲板の上に疊を敷いて、帆布で一劃が仕切つてある。疊などといふものを見ざることは果して何時の頃からであらうか。私は貰つた毛布を敷かず、懐しい疊の上に裸になつて寝轉んだ。さうして思ひがけぬ日本の疊の匂ひに、思ひがけぬ郷愁から逃れることが出来なかつたのである。水平線に眞紅の大きな太陽が没したが、夜になつても、裸でゐるのにむしむしと暑かつた。

翌朝、發動艇で上陸。美しい海岸線にのたりと波が寄せては引く。透き通つた海水である。砂濱の上にやどかりを長くしたやうな貝殻が無數に落ちてゐる。アンペラ張の小屋の密集した部落があつて、土民が點々と見える。陸戦隊が大勢上つて居る。椰子の實を幾つも重さうに擔いで來る兵隊もある。工作隊が砂の上に道を作つたり、棧橋を拵へたりしてゐる。こりや瘴癘の地ぢやないよ、頗る健康な地だよ、三月になつたら海水浴が出来る、と久門少佐が云つた。アンペラの部落を抜けると、三亞港司の町の入口に出た。一寸した町である。自動車で三亞街へ行く。海岸に連つた椰子林と、右手に連る重疊した山脈との間は全くの茫漠たる荒蕪地で、少し海岸寄りに、砂すりの崖亞公路が走つてゐる。山には樹木が豊富である。道路に沿うてずらりと仙人掌が生え、棘の先にくつつけたやうに赤や黄の花が咲いてゐる。龍舌蘭や、パイヤやパイナップル、その他名も知らぬ熱帯植物が我々の周圍を取り巻き、荒野の中に點々と芋畑がある。土民が畑に躡んで此方を見てゐる。地味は相當肥沃と思へるのに、殆ど開墾されず、僅かな耕地があるばかりである。向ふから籠を擔いで來るのがすれ違ふ。平氣な顔である。とぎれとぎれに、砂地の道を陸戦隊の兵隊が行軍して行く。汗に塗れ、銃を肩に、足を引きすつて歩いて行く。三亞街

海南迅報

日九十月二年四十和時 (三第)

論說

海口市教育之情形

本市教育之概況

市民之聲

米穀大輸入對本市農林之影響

中外電訊

米內海相談

維持治安之新況

要來

若石

大日

初十一

は小さな町である。一個小隊ばかりの警備兵が居る。住民が一軒の廟の前に密集して、外國の兵隊を物珍らしさうに眺めて居る。彼等は北方の海南人よりも一層南洋の土人に近い。阜財門を抜けて、一分で横斷出来る三亞街を抜け、再び、荒涼たる原野に出る。原の中に一軒觀音寺といふ廟があつて、壁に、短期小學校、讀書救國といふ字が見られた。私達は無數に飛んでゐる美しい小鳥の群に眼を奪はれた。五色の鳥が我々の疾走して行く道路の上に降り、歩き廻つてゐる。我々の自動車はすぐ眼の前に行くまで逃げない。それが何といふ名の鳥か全く知らないやうなものばかりであつた。この邊の風景は、私達が澄邁灣から上陸して眺めた北方の風光とは又變つてゐる。もつと茫漠とし、荒涼とし、原始の感が深い。何處まで行つても同じ風景である。太陽の光も眩しいほど明るい。我々は陸戰隊の先頭が昨夜の十一時五十八分に占領したといふ崖縣まで行つて見る豫定であつた。榆林の町といふのは、アンペラ張りの家が二三十軒あるきりであるといふので、時間もなしし、崖縣に直行することにしたのである。崖亞公路といふ立札のある荒野の中に、同盟の中村君や、大毎の林君などが居て、私達の自動車にぶら下つた。ところが、前方からやつて來た自動車に乗つてゐた陸戰隊の吉元少佐に遭ひ、崖縣までは相當の距離であるし、途

中八つばかりある橋も皆壊されてゐるし、この先はもつと道が悪く、豫定の十二時半までに引返すなどといふことは到底出来ない、片道だけでも十二時半に到着することは難しいだらう、と云ふことだつたので、私達はそこから引き返すことにした。別の任務を帯びて來た海軍の將校が同乗してゐたので、我々の乗つて來た自動車は萬難を排して崖縣に行くことになり、私達は吉元少佐の自動車に乗せて貰つて歸路についた。車の中で溫顔の吉元少佐は、上陸以來の熱帶の行軍がいかに苦しかつたかを語り、この強烈な太陽の下で兵隊がだれも日射病で倒れた、砂地であるし、歩き難い上に、この通りの荒野で水といふものが全くない、若干の敵が居たけれども、これは問題ではなかつた、敵が狼烟を擧げたので、逆襲して來るかと思つたら、それは敵の退却の合圖だつた、遭遇した敵は殆ど殲滅した。敵よりも水の缺乏に弱つた、水筒に用意して來た水は炎熱の行軍のために忽ち無くなつてしまつた、頑張るだけ頑張つて倒れる兵隊をどうすることも出來なかつた、椰子のあるところ來ると、兵隊は攀ち登つて椰子の實を叩き落し、その汁を吸つて辛うじて喝を凌いだ、崖縣までは相當の強行軍をやつたのである、といふやうな話をした。それから、この附近一帯が種々な方面に於て將來極めて發展の可能性が多く、港は三亞よりも榆林

の方が良いやうだ、と付け加へた。三亞街まで引き返して來ると、警備隊の隊長が、近づいて來て、兵隊が今蠍から指を噛まれました、しつかり括つて止血めをして置きましたが、病院まで乗せて行つて頂けませんか、と云つた。兵隊の指が紫色に膨れてゐた。この附近には、蠍を初め、蜥蜴や、蛇や、百足、などが非常に多いと云ふのである。大毎の林君達は、昨夜砂の上に露營して大きな蟻や蚤に食ひつかれて閉口したさうである。満員の自動車には既に餘席が無かつたが、小隊長がさう云ふと、桑原少佐は、よし、此處に入れ、と云つて、自分は自動車の外にはみ出て、その兵隊を自分が今迄腰かけてゐた座席に坐らせた。私はこの思ひやりのある桑原少佐の何氣ない行爲が、自分のことのやうに嬉しかつたのである。

三亞港司の入口で私達は自動車を降りた。荒野の中に天幕村が作られ、多くの陸戦隊の兵隊が居り、海軍旗が翻々とひるがへつてゐた。廟のやうな建物の壁に、青ペンキで大きく、軍委會委員會政訓處製とあつて「赴國難」の三字だけは解るが後は消え去つて解らない。三亞港司の町の壁にも、所々、陸軍獨九旅六二七團云々、抗日救國十大要、などといふのがあるが、何れも相當以前に書かれたものらしく、殆ど消えさうになつてゐて、明瞭でない。新しいのは、家の扉に白



墨で書かれた、自衛團第一大隊第三中隊第一小隊駐處といふやうな文字ばかりである。市中には疎らに住民があるのみで、殆ど閉め切つてゐる。家の建て方は海口と變らず、甚だしく規模が小さいばかりである。海關や市場がある。少し歩くともう町外れで、アンペラ小屋の部落がこれに續いてゐる。造船場が數ヶ所ある。鹽田が見える。水中に柱を組み立てて小屋が幾つも作つてある。廣東で見た蛋民族の住居に似て居る。アンペラ部落には島民が大抵居る。何處かの山の中に隠れてゐたらしいのが、續々と町へ歸つて來る。私達は砂地に立てられたアンペラ小屋の間を抜けて、海濱に出た。まだ迎への發

動艇が来てゐないので、砂濱に腰を下して、軍艦で用意して貰つて来た辨當を開く。兵隊が何人も水の中に入つて水の中を睨んでゐる。魚を取るのださうである。海岸では道路と棧橋の整備に兵隊が忙しさに働いて居る。日本の田舎で見るとやうなね釣瓶があつて、兵隊が水を汲んでゐる。晝食を終へて少しぶらぶらする。仙人掌や、鋸のやうな葉の長い蘭や、薊の花に囲まれて、小さい廟がある。入るとむつと蒜臭く、恰度、えたいの知れぬものを食べてゐた。眼のざろぎろと鋭い坊主らしいのが、両手を組んで奇妙なお辭儀をした。中央に下げられた眞赤な廣い紙に唯一字大きく「神」と書いてある。小さい色紙作りの福神像と幟が數本立てられてゐる。入口には「泰華三仙宮」とあつて、「樂見神功」「神光普照」「神力扶持」「蔭扶黙佑」等多くの紙軸があり、次の對聯がある。

娘娘日日千秋志

子子孫孫萬年榮

發動艇が來たので乗る。桑原少佐と棧橋で別れた。旗艦に御乗りになつて居られる高松宮殿下が、一時半に御上陸され、御視察遊ばされるのを御案内申し上げるためである。私達の船は宮殿

下の乗られた發動艇と擦れ違つた。船の上から敬禮をする。旗艦に歸ると、我々は直ちに飛行艇に乗り、午後三時離水。操縦は來る時と同じ益山大尉である。來る時は東海岸を廻つたが、今度は崖縣の上に出て五指山を過ぎ、西海岸を廻るのである。崖縣の町には高い建物の上に海軍旗のひるがへるのが眺められ、道路の上に豆粒を撒いたやうに兵隊の姿が認められた。果しもなく椰子林が續く。暫く行くと、海岸に多くの戎克船が見えた。敵兵がそれに乗つて逃げるのが見えると云ひ、機關銃で掃射をした。美しい地上の風景はさながら幻燈の如くである。五指山中に居る蕃族も、豹も、敵も見えず、ただ、きらめく南海の太陽の下に、さまざまの變化をつくした魔法のごとき無数の線と色とがあるのみである。午後五時十分着水。出發の時には何とも思はなかつた海口灣の淺瀬の赤く濁つた水の色が、やりきれないほど汚いものを見るやうな感じであつた。

八、瓊山

海口の町から瓊山までの一里の間が、ことごとく墓地であるのは異様な景觀である。道路の兩

側共、土饅頭の墓原が蜿蜒と續いてゐる。支那では土葬なので、この無数の土饅頭の一つ一つには人間が一人宛埋められてゐるのだと想像すると、一寸凄壯な風景である。

十八日に瓊山治安維持會發會式があるので、私達は才田大尉とともに瓊山に出かけた。私は十三日にも一度来たことがある。それは瓊山攻

陸戰隊天幕生活

略部隊の戦況を聞くため、部隊長に逢ひに瓊海中學校にある部隊本部を訪れたのである。瓊山

にまつ先に入つたのは畑中中隊と山口機關銃隊なのだが、をかしたときには、戦鬪は、その兩隊が瓊山を通り抜けてしまつた頃になつて、背後で始まつたのである。少壯氣鋭なる畑中中尉は、挺身隊たるの任務を帯びて、瓊山に向つたが、夜の中に何處までも續く砂原と、迂餘曲折した道路のため、どの道を行けばよいのか判らなくなり、磁石を出して瓊山の方角を定め、田であらう



が、畠であらうが、山であらうが、川であらうが、無茶苦茶に一直線に瓊山に突進したさうである。瓊山縣城に到着すると、敵は居ないのでどんどん町を通り抜けてしまつた。所が、その後何處かに居た敵が町の中に入りこんで来て、暫くすると到着した本隊と衝突し、激戦が始まつた。敵兵力は保安隊二〇〇、警察隊四〇、遊撃隊二〇〇位の混成軍で相當頑強に抵抗し、勇敢に逆襲に轉じて來たりした奴を、砲三门を揃へて二百發程撃ち込み、これを撃破した。敵は遂に遺棄屍體二〇〇、捕虜三〇を残して潰走した。私達が行軍の途中聞いた砲聲がそれで、森本安藤の二君はこの本隊と行動を共にしてゐたのである。ここには瓊崖守備司令の王毅が居たらしく、何處かへ逃げてしまつた。その時に、小學校では抗日教育をしてゐた跡が歴然としてゐることや、敗殘兵が出没してゐるので掃蕩してゐることや、この電燈會社は五十燭光を二百位點けるだけの電力しか持つて居ず、重なる官衙にあるだけで街には點燈されてゐないことや、住民もぼつぼつ復歸してゐることや、その日に要人が集つて治安維持會の相談をすることになつてゐることやを聞いたが、占領九日目に早くも治安維持會發會式が舉行される運びになつたのである。瓊山は府城の所在地であるといふだけで、町の汚なさはお話にならない。海口市とは比べもの

にならない。ただごみごみと埃つぼく、田舎町である。發會式までには相當の時間があつたので、私は梅本君と二人で蘇公祠を探して行つた。街を歩いてゐて奇妙に思つたのは、どの家の屋根の上にも、正面に壺があつたり、獅子に乗つた童子が弓を引いたり、六角の板を持つた福神が頭張つてゐたりすることである。警備の兵隊が、あの人形の方は魔除けです、壺は福をあれて吸ひ取るといふ仕掛らしいです、と教へてくれた。或る家は慾張つて壺だけ二つ大砲のやうに竝べてあり、或る家には途方もなく大きな壺が載せてあつた。壺の上に魔除けの童子が跨がつて、弓を番へてゐる所もある。私達は尋ねめぐねて、文莊公故里と石柱のある石門を潜つて中に入つた。中はがらんとし、木蔭から斑な小豚やまつ黒な鹿を追ひながら女が出て來たりしたが、さつぱり見當が立たなかつた。すると向ふの道から人品卑しからぬ五十恰好の支那人がやつて來たので、私は持つてゐた田曙嵐の「海南島旅行記」にある寫眞を示し、蘇公祠は何處かといふ意味を通じると、彼は、その本の上に「五公祠傍也往海口路也」と書いたが、ふと思ひだしたやうに、「此處文莊公故邊也吾的先祖」と書いてにつと笑ひ、すたすたと行つてしまつた。私達は人力車を拾つて海口への道を引き返した。町を出て暫く行くと、右手に五公祠道と額の出でゐる石門が

あり、少し坂になつて隧道のやうな並木道を下ると、左手に高樓が聳え、蘇公祠の門の前に出た。古色蒼然とし、閑散であつて誰も居ない。庭には桃、白薔薇、菖蒲、白粉花、合歡、佛桑華、竹その他の花や植物が咲き亂れて居る。芝生の上に、賞心・悅目・美景・良辰と花で書かれた文字があるが、その俗悪にして雅致を壞すことは甚だしい。支那人はすぐにかういふことをする。神龍と銘のある浮粟泉には駭くばかり澄み切つた水を湛へ、鮒のやうな魚が數匹ちつとしてゐる。東坡書院も爛酌亭も、その古びた柱や壁が掩ひ難い流瀆の哀愁を湛へてゐるやうに見える。私は不識にして、深く、蘇東坡と海南島の關係を知らないが、私は杭州に居た時に、美しき西湖と切り離すことの出来ない彼の事蹟を愛し、彼の「水光潑灑正晴好山色空濛雨亦奇」で始まる西湖の幾つかの詩篇を朝夕愛誦したことがある。又、既に白髯の齡にしてこの孤島の土を踏み、彼の詩はここに來て再び新しい情熱を以て光彩を放つたと云はれてゐる。「瓊州府志」卷之四十一「藝文志」には、瓊軾が海南島に來つてものした豪壯なる「颶風賦」を初め、「乳泉賦」「沈香山子賦」「洞酌亭」「五色雀」「息軒」「食檳榔」其の他の多くの詩篇や文章が蒐録されて居る。もとより私に蘇賦の大才なく、文藻の比肩はをかくして笑ふに堪へた話であるが、東坡書院の苔むした石礎に

立つ時には、往年の老詩人の流離の心情が惻々として私の胸に響き傳つて来るやうな気がした。五公祠の方は一層がらんとして「海南第一樓」と大額のある階上も、一向眺望もひらけず、第一樓らしくもない。五つの位牌が正面に安置され、何れ、えらい人達なのであらうが、面倒くさくなつて、私達はそのを出た。後で聞いたのであるが、蘇東坡の冥居の跡である三公祠は、抗日出征軍人遺族授學所になつてゐたといふことであつた。歸りに陳濟棠の揮毫に成る求濟院の看板が出てゐる建物に入つて見ると、枯れ果てた芭蕉畠に囲まれた不潔な家の中に、見るからにぞつとするやうな病人が三人、私達をじろりと見た。癩病患者らしく私達は匆々退却した。治安維持會發會式場まで人力に乗つて来て、軍標で二十錢宛やり、車を棄てた。

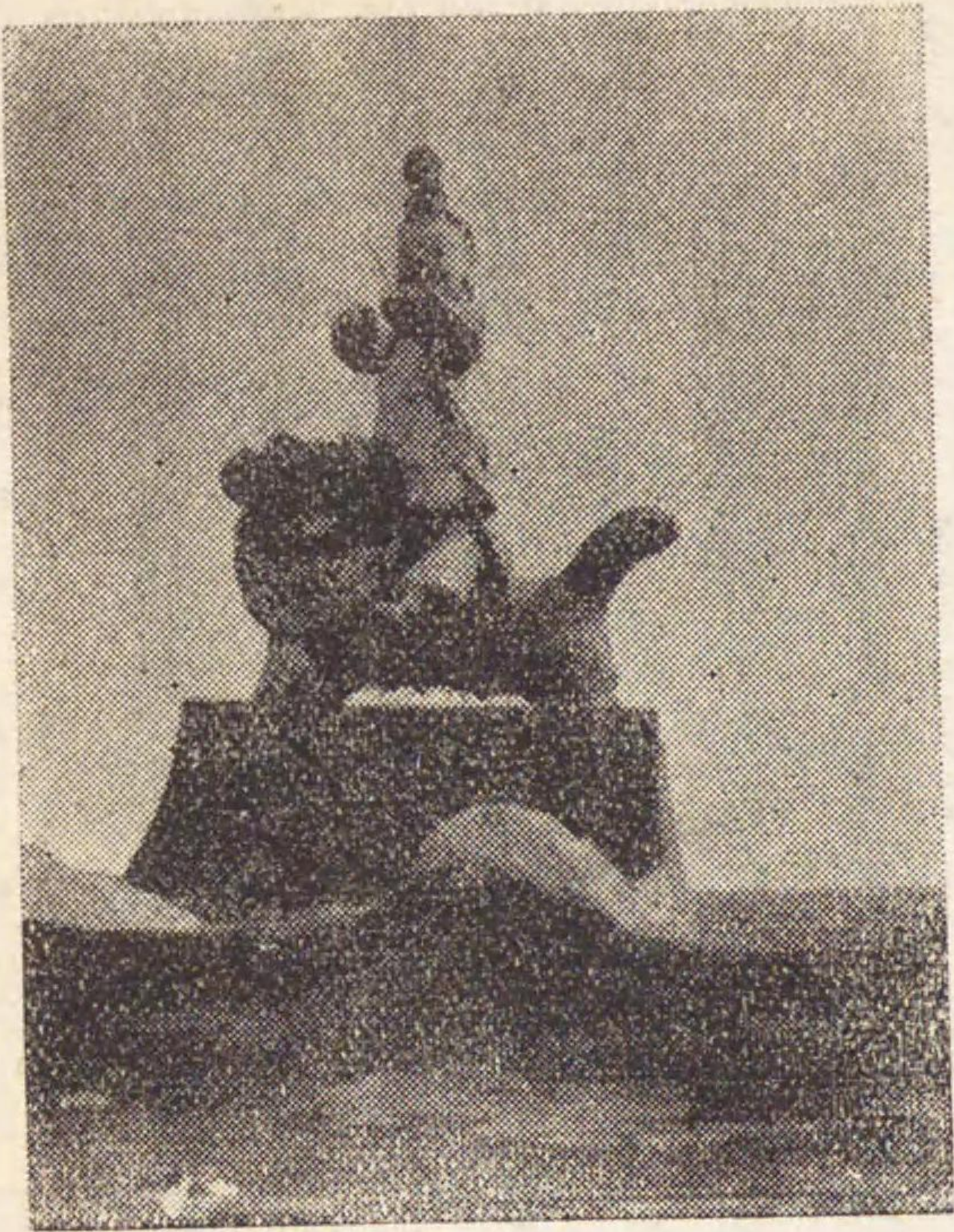
式はまだ始まつてゐなかつたが、縣政府の中は群衆で満員であつた。市女笠を被つた老婆や女子供が大半である。片隅に「大日本瓊山司令官發白米糶恤貧民」と書かれた立札の下に、白米が十俵積み上げてある。表口には、參會者に接待する菓子袋の山がある。これらのものを貰ふために、治安維持會とは何か少しも判らない無智な民衆が雲集してゐるのである。然しながら、このことは治安維持會が無意義であるといふことには決してならないであらう。無智な民衆を新しい

出發へ指導することの困難を我々は幾多の戦場で経験して来た。最初からこれらのことを政治的に理解させようとするの方が間違ひである。常に糊のごとく生活に密着してゐる民衆は、第一に口と胃袋の問題から入つて行くことが正しい。私は東莞といふ所に治安維持會のことで行つたことがあるが、その會長であつた張といふ老人が、片言で云つた日本語の、ナニシロミチハトオイ、と云つた言葉が、不思議に耳にこびりついてゐる。その象徴的に響いた平凡な言葉は、我々が新しい建設の仕事に關與する機會を持つ度に、私の耳に鮮かに浮び上つて来る。ナニシロミチハトオイ。然し、それは是非ともやらなければならぬ仕事である。道は遠い、然しながら道は、常に民衆の生活を基調にして進まなければならぬといふ一本道しかない。貧民に白米を施し、菓子接待するといふことは、非常に卑俗に見えるけれども、極めて教訓的であると私には考へられた。

開會までにはまだ時間があつたので、私は一年間に漂着した儋瓊山の牢獄に監禁されてゐたといふ、八人の臺灣人の漁夫に會つた。案内されて彼等の部屋に入ると、並べられた寢臺に何人かは寝てゐたが、一人が私に椅子をすすめ、その會明權といふ青年はぼつりぼつりと國語で語つ

た。

「私達は澎湖島望安庄の漁師です。昨年舊曆正月の五日に、金祥丸に乗つて初漁に出ました。その時には皆で十人居りました。ここに居る陳里條さんが船長です。ところがどうしたはずみか、機械に故障が起きまして、どうしてもなほりません。何日も海の上を漂うて居りましたが、六日目にこの海岸に流れ着きました。さうしますと、支那兵が現はれ、私達にどんどんと鐵砲を射ちかけました。幸ひ誰にも當りませんでした。五名の支那兵がやつて来て、私達を監獄に入れました。最初少し取り調べをしましたが、それからは何も調べず、監獄の中に入れてられたままでした。三ヶ月ばかり経つてから、何も云はず、この牢屋に移されました。私達は裸で猿股一枚、蒲團を一枚くれ、足は鐵の鎖で繋がれた儘動くことも出来ませんでした。一食半斤づつ一日に二度飯をくれました。そんな状態で皆病氣になりました。何といふ病氣か知りませんが、身體の膨れる病氣でした。許活さんはたうとう病氣のため、牢の中で死にました。私達も皆死ぬるものと覺悟をして居りました。すると、十日の朝に牢屋で大騒ぎが始まりました。私達には何のこともか少しも判りませんでした。この中が急に騒々しくなり、何か叫ぶ聲や、走り廻る音がして



魔除童子

居りましたが、各牢屋に入れられてゐた囚人達が、物凄い叫び聲を擧げて、牢屋を破り始めたのです。どの牢屋もけたたましい音がし、やつと壁を叩き破つた牢屋からは、我先に囚人が飛び出し、何れへか逃げ去つてしまつたのです。私達は何事であらうかと呆然としてこの騒ぎを見てゐたのです。逃げ出して行く囚人達の叫び聲で、戦争が始まつたのだといふことは略想像が着きました。私達は駭きましたが、足は鎖で繋がれて居なくとも、病氣のために動くことも出来なかつたのです。それに、どうせ死ぬのだと思ひ、一時は駭きましたが、どうでもなれといふやうな、ぼんやりした氣持でじつとして居りました。すると、何時頃だつた判りませんが靴音が聞え、牢の中から、誰かが、何か云ひ、お前達はどうして逃げないのだ、と云ふ聲が聞えました。私

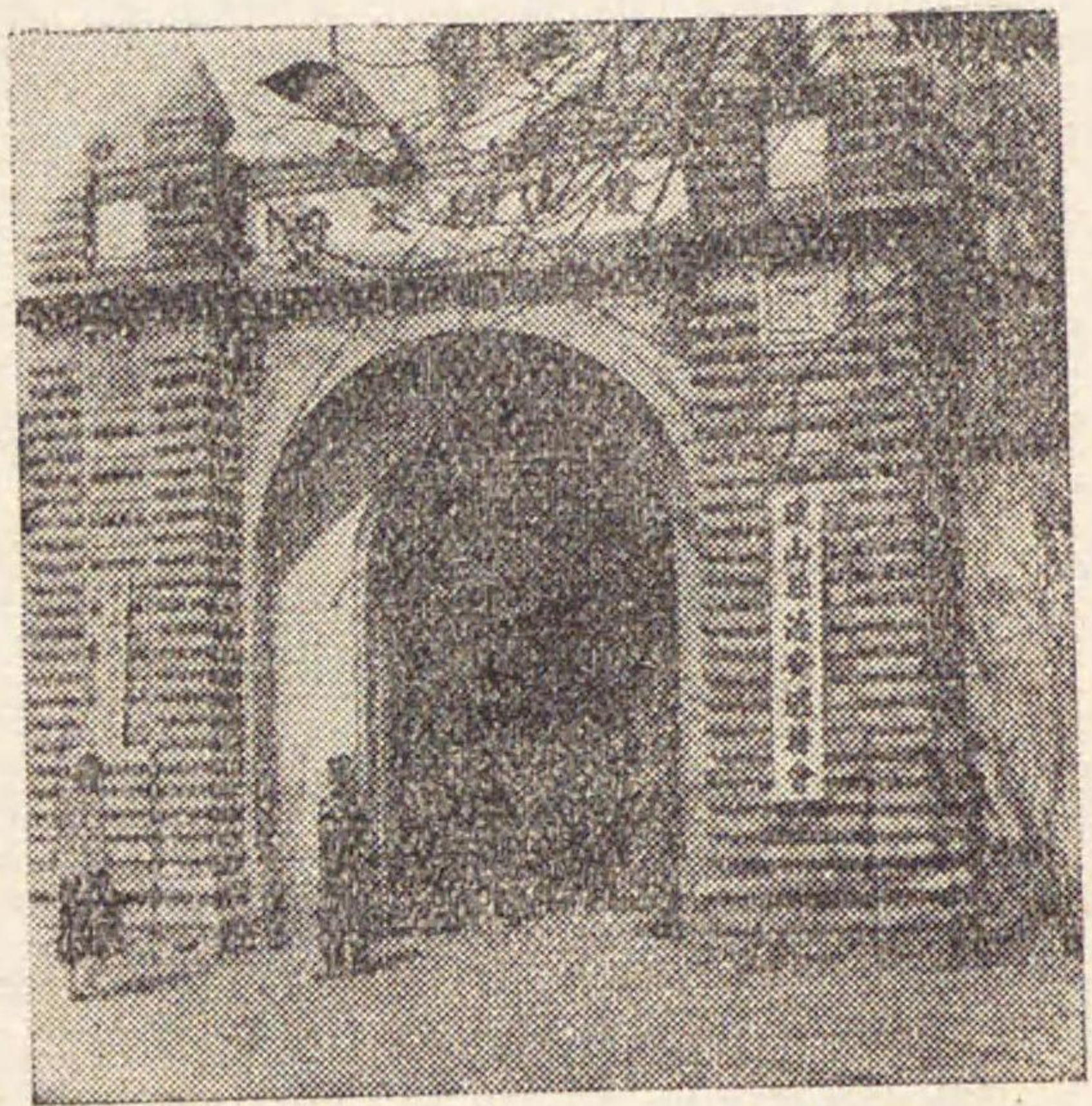
は病氣なので動けないのです、と答へましたが、さう自分で云つた後で、飛び上るほどびつくりした。私に問ひかけた聲が、私は答へてしまつた後で日本語だと氣づいたので。私達の頭は長い間の監禁でどうかなくなつてゐたと見えます。私は牢の檻に身體を近づけて外の人影を凝視しました。私はそれが日本の兵隊さんであることを知りました。私は眼がくらくらとし、檻にしがみついて、日本人です、日本人です、日本人です、と、自分で何度叫んだか覺えない位叫びました。さうして私達は日本の兵隊さんから助け出されたのです。私達はもう牢の中で命を棄てるものと諦めて居ました。故郷でも死んだものと定めてゐたことせう。すぐに電報を打つて頂きましたが、まだ返事は参りません。もう二ヶ月皇軍の來るのが遅かつたら、私達はみんな病氣で死んで居りましたせう。私達は九人居りましたのですが、陳和山君は何處に行つたか判らなくなり、今は八人です」

會明權君は口を噤んだ。彼は十九歳だと云つたが、そんなに若く見え、そこに居た人達も皆三十歳前後と云ふことだつたが、不思議な老け方をして居た。會君は青ぶくれのやうに腫れ、恰度畸形な發達をした子供のやうに、歩く姿が、くねくねと今にも折れさうに見え、それは眼を反

けたいほど痛々しい姿であつた。私はこの八人の漁師達の嘗めた苦惱のほどが思ひやられ、臉が熱くなつて來たのである。

私は彼等が繋がれてゐたといふ牢獄へ行つて見た。この縣政府の一角に警察隊の建物があり、その奥に看守所と額の出でゐる數棟の白壁の牢獄があつた。彼等の入れられて居たのは拾號室で、六疊位の廣さがあり、調度の類は何も無かつた。並んでゐる牢屋のどの壁も、檻木も、ことごとく破壊され、一人抜ける位の穴がどれにも開いてゐた。そこから囚人が脱走したのである。私はむつと鼻を衝く臭氣の満ちてゐる散亂した獄内に入つてみた。何者が入れられてゐたのか、知る由もなかつたが、牢の中には、さまざまの紙片が棄てられ、壁には、色々な字が書きつけてあつた。晝や地圖なども貼りつけてあつた。囚人等が無聊なる儘に書き留

府政縣山瓊



めたものであらう。六號室に、第四期抗戦展開圖時事圖解といふ極めて手の混んだ支那全圖が描かれてゐたが、この地圖は、海南書局にあつた雑誌「世界知識」第八卷第九期の中にあつたものと同じで、差入れされた雑誌から丁寧な複製したものと思はれる。奇妙なさまさまの繪や、詩が澤山あつた。壁で英語を勉強した跡もあつた。壁の詩篇、

未知那時妹對問！

明朝家出牢門閉

觸家衿懷亂倒亂

離別離妹含悲淚！

他死我活結死存
民族英雄現只出
至今家人應興奮
辛亥革命史蹟存

天氣已經大秋涼
戰士遠穿單軍裝
早晨夜晚風露重
不久更會下飛霜

書簡のひとつ。

黃時和仁兄。迎請安好爲慰、弟因命生不辰、被人嫌疑押案、被押瓊山縣看守所、到今氣已三月、尙未提案說明、日甚迂日、枉屈難堪。弟前日復上一函、諒必早已收閱。至弟所遭之事其內容、現蒙備有辦法？望爾請課前探看弟得之相量。但弟案係屬被誣、並無證據。仁兄如來與之設法、使弟此事或得其當、望早日可即了解、免致押久獄中、狂遭敵機轟炸、枉死奚益、倘不能來者、請復示知爲祝、專此奉懇。十月初六日

これは、悪い星の下に生れたと啣つ男が、自分の冤罪を友に訴へた手紙だが、この牢獄には、何のことも判らずに投獄されてゐたものが随分あつたといふことである。甚しきは、若い娘を數人投獄し、それらには美食を興へ、夜になると一人宛引き出しに来て數時間後には又牢に返してゐたと云ふ。

午後二時に會堂で瓊山治安維持會發會式が始まつた。會場は市民に依つて埋められて居るが、會堂の周圍は女子供に依つて取り巻かれてゐる。式は嚴肅に進行した。正面には日章旗と五色旗とが打つ違ひに飾られてあつた。瓊山警備司令官、海軍代表、帝國領事、其の他の祝辭、會長韓仁豐の答辭、來賓祝辭等があり、賑やかな拍手の中に會は終つた。會長韓仁豐氏は文昌縣の人、五十八歳、民國二年瓊山縣師範學校卒業、瓊山縣商會長をしたことがあり、現在布商を營んでゐる人である。數臺の飛行機が上空を旋回し、宙返りなどをしきりにやるので、支那人達は目を欬て、驚歎するやうな叫び聲を發して、これに見入つた。會が終つて、施米と菓子接待が始まると、忽ちその邊は修羅場と化してしまつた。大變な騒ぎである。然し、私はその騒動と笑顔を浮べて歸つて行く貧民達の姿を眺め、極めて明るい氣持になることが出来たのであつた。

私達は自動車で歸る窓から、田植がなされてゐるのを見た。まるで日本の六月である。その方法も一見日本の農村でなされてゐるのと殆ど變らない。この邊は二毛作であるが、その技術を少しく改善することに依つて容易に三毛作にすることが出来ると、私の知つてゐる農村の兵隊が何人も私に言つたことがある。私達が疾走して歸る道々には、梅本君ではないが、春の七草も秋の七草も一緒に咲き亂れ、一本の樹は枯れて葉を散らしてゐるかと思ふと他の一本はやうやく芽を吹き出し、池の上には一面に小さな白い水藻の花が咲いてゐた。

九、R.R. CUTBERT その他

カスバート氏は愛蘭生れである。油ぎつた顔をてらてら光らせ六十七歳とは思へぬほど矍鑠として居る。海關の數軒左側の奥まつた家に支那人の夫人と既に三十二年間海口に棲んで居る。私は或る日、川島軍曹とこの英國人を訪問した。家も部屋も少しも洋風なところは無く、調度の類もすべて支那風であつた。私達が下から案内を乞ふと、二階から、彼は私達をさし招き、來來、

と云つた。上品な奥さんは終始寄り添ふごとく夫君の後に立ち、時々我々の會話に口を挿んだ。既に古い昔のことで、はつきりと記憶がないらしく、夫君が頭を捻り始めると、夫人が後からそれを補足した。我々の對談によつて、カスバート氏は大凡次のやうな話をした。

「自分は一九〇四年海南島に、郵便局長兼英國領事館の書記としてやつて來た。然し二十年ほど前から、香港のバタフライード・スピア汽船會社（青煙突船）の監督となつてゐたが、現在では退職し、年金を貰つてゐる。自分が來た頃には外國人が六十人程居たが、次第に減り、現在は四十人居るか居ないかである。島にも自分が來てから色々の變化があつた。清朝が覆され共和國となり世界大戰に遭つた。支那政權は絶えず動搖して居て、海口でも前後四回の暴動があり、ものすさまじい掠奪が行はれた。自分のところには被害はなかつた。來たら射つてやらうと銃をかまへてゐたがやつて來なかつた。官吏は専ら搾取を事とし、或ひは收賄を當然なりとし、海南島の經濟的開發といふやうな事は全然着手されてゐない。世界大戰が起り、支那の參戰宣言で、獨逸領事館は閉鎖された。領事は公文書を持ち去り、官舎は傭人に委せきりにしてあつたので、現在荒れるままになつてゐる。英領事館は一九二六年に閉鎖された。その直接の動機は、ソヴヰ

エート・ロシアから共產分子が入りこんで來て民衆を煽動し、英國商品のボイコットをやつたりしたためである。佛領事館のみが現在残つてゐるが、四五年前に佛商人は悉く引き揚げてしまひ、今ではカトリック教會があるのみで、領事館の必要は認められない。日本軍が今度やつて來たといふことは、海南島の發展のためには大いに歓迎すべきことと思ふ。海南島の開發には何よりも投資と開放が必要であるのに、從來、投資といふ事は殆ど行はれなかつた。それは出來なかつたのである。不斷の政權の動搖の爲に、不安で、投資が行はれなかつた。中に投資をするものがあつて少し調子がよいと、すぐに重税を課する。これでは發展の仕様がなない。支那政權の下では進歩は望めない。海南島は豊富な資源を多く有してゐるのに、何等、さういふ状態で手が着けられてゐない。山地には多くの鑛物が埋藏されて居り、自分も銀鑛と鉛の權利を持つてゐる。何よりの急務は港灣の修築と鐵道の敷設である。日本軍に依つて海南島が面目を一新することを疑はない。日本軍がやつて來るといふことは六ヶ月も前から豫期してゐた。然しどうも、飛行機といふのは感心しない。びくびくはしないが、爆音が聞え、頭の上によつて來ると、思はず首をすくめる。一町位先に落ちた爆彈のために、自分の家の壁が壊れてしまつた。と、彼はその個所に

私達を導いて示した。支那政權で最も癩に觸つたのは、ウイスキーに高い税金をかけることだ。香港で一瓶二弗五十仙しかないものが、ここに来ると、四弗の税金が課せられて、筥棒に高いものになる。碌に飲めやしない。日本はこの點を考慮し、關稅を低くし、自分達にウイスキーが鱈腹飲めるやうな樂土にして貰ひたいものだ」

別の日に私達は、米國旗の 翻つて居る福音病院の門を潜つた。院長ナタニエル・ベルコビツ博士は極めて温厚な人である。博士は一九一五年海南島に來たつてより二十三年間、瘴癘の地と云はれる海南島の諸病と闘ひ、毎日二三百の患者の診療に従事し、一ケ年の收容患者は四千人を下らないと云はれる。博士は本年四十九歳とのことであるが、四人の子供は本國に歸つてそれぞれ教育を受けてゐるさうである。院長は膽石病に就ての權威であり、マラリヤの病原解明とともに、この膽石病の研究を一生の仕事としてゐると云ふ。今後の衛生に關する參考として、私達が、海南島に於ける諸種の風土病に關して質問をしたのに對して、博士は最も多きものから、順序に、我々に説明してくれた。

一、マラリヤ熱

A、テルシヤン 全島に普遍的であつて、屢々熱を發し、腹痛を起すことがある。

B、アステヴォ・アウタムナル 山岳地帯に特有であつて、土地の人間は免疫性になつてゐるが、外來の者、例へば支那商人が山地を訪れた當初にはよくこの病氣に罹る。この種のマラリヤに罹ると、頭に來て往々死ぬことがあり、極めて悪性である。

マラリヤ熱の原因は蚊の媒介に依るのであるから、蚊帳の使用の確實と、キニイネを服用することによつて豫防することが出来る。

二、鉤頭蟲病

海南島農夫に特有なもの。一種の寄生蟲。農夫が跣足で歩くために、土に居る細菌が足の細胞から侵入し、脚部から胃腸迄上つて來て、患者を非常に衰弱させる。

三、ペスト

定安の近傍に最も多い。四年前に猖獗を極めたことがある。豫防法は野鼠及び家鼠を殺すことと、豫防注射をなすこと。

(定安に行つた部隊の兵隊が、外の部落では見なかつたのに、定安では、壁や扉の到る所、鼠

を取れ、といふやうなことが書いてあつた、をかしいのは、抗日傳單に日本軍と野鼠とは是我等の最大敵、などと云ふ文句のあつたことだ、と話してゐた。

四、コレラ

コレラは海南島の風土病ではなく、島外から入つて来るものである。シヤム、バンコックで流行し始めると、三四週間遅れて、必ず、海南島に流行し始める。五月から十月迄が多い。バンコック附近から輸入されて来る果物が原因する。西瓜やパイナップルなどを支那の商人は切つた儘、覆もせず板の上に並べてゐる。蠅がたかる。蠅が傳播を助ける。一昨年は海口だけでも二千人の罹病者があつたが、昨年は一人も無かつた。

五、癩病

全島には約二千人の患者が居ると思はれる。百五十人程は秀英棧橋附近にある福音病院分院に收容されてゐる。患者を一個所に集めることが最も良いと思ふが彼等は隠して集らず、現在では散在して居る。

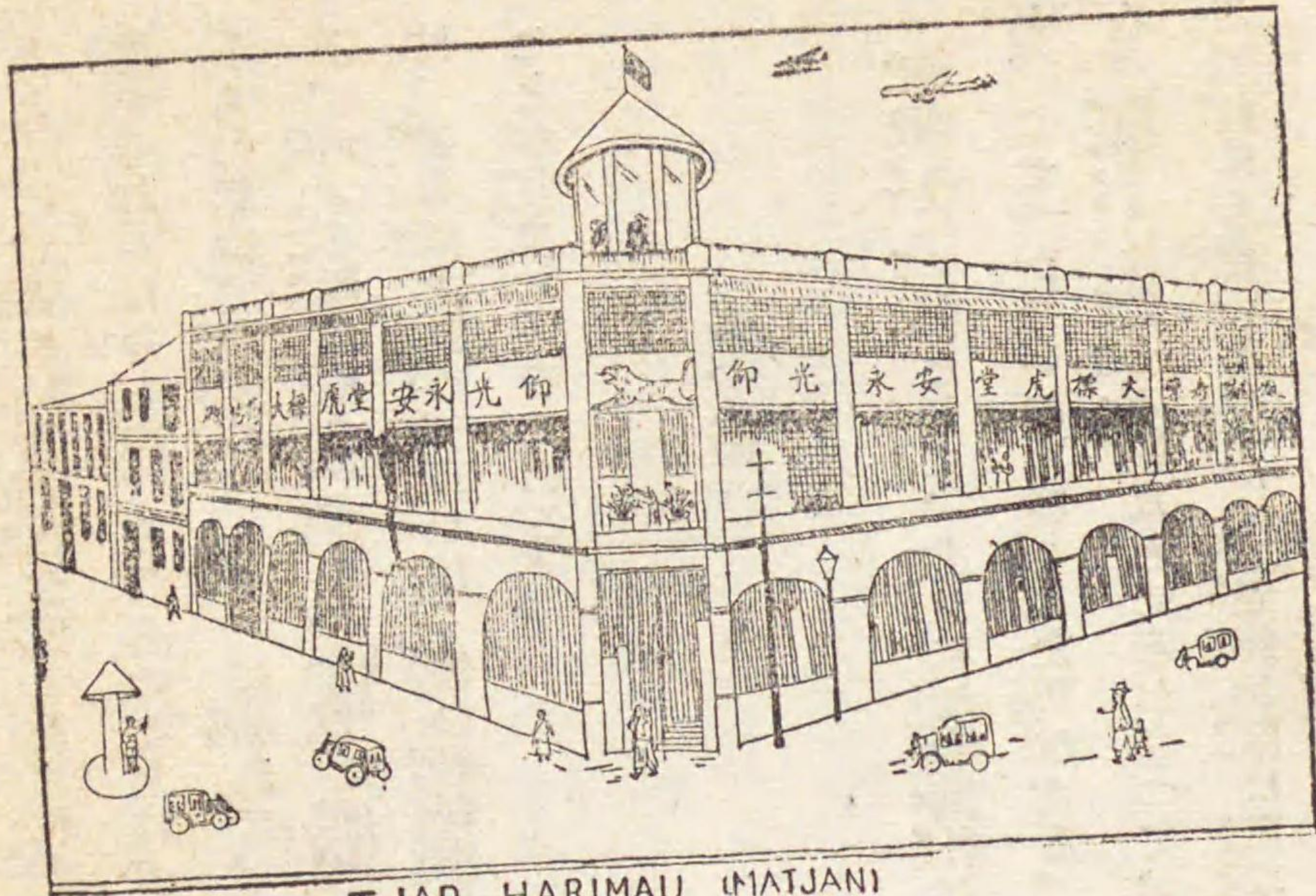
六、痘瘡

七、赤痢

八、膽石病

この病は東部に文昌に多い。水質に原因すると思はれるが研究中である。私達は非常に参考になつたことの禮を述べ、福音病院を辭した。院長は私達を玄關まで見送り、戦争のために一時は避難民が押し寄せて來たが、皆歸した、その後に来る者も、日本軍は良民は保護するからと説明して歸すことにして居る、病院内では、日本軍に使用される苦力が一日四十錢貰つてゐるといふので非常に評判が良い、と云ふやうなことを付け加へた。

私達は海南島に來る以前には何等實際の事情が判らず、色々と問題視されるこの孤島は、種々の外國權益に依つて埋められて居ると想像してゐたのである。ところが實際、海南島に來て見ると、殆ど外國權益として見るべきものの、あまりに少いことに意外の感にうたれたのである。海南島は地理的に見る時には、非常に重要な位置に位して居る。英國は直接香港との關係を控てゐる。米國は英佛等がこれを占領すると、忽ちヒリップピン島に瘤が出来るので、一九一六年には支那政府との間に、鐵道は米國資本に依るといふやうな契約をしたこともある。佛國は英米等にや



TJAP HARIMAU (MATJANI)
 繪たい描の人囚

序の下にある現状を親しく見るに及んで非常に安心した。早速この由を本國政府に傳へ、安心せしめるやうにする、と、満足して歸つた。

私は、然し、海南島に於ける外國人の病院や學校や教會等を見て、一つの感慨がある。私達は支那の到るところで、人跡稀なと思はれる奥地にすらも、外國人の教會があり、病院があることに感いたことがある。私は「東莞行」といふ文章の中で、東莞の町外れにある普濟病院のことを書き、十七年間癩患者とともにある獨逸人院長、オットオ・フック氏に胸うたれたことを書いた。私はこれらの外國人の行爲の中に、日本人の深い教訓を読み取らなければならぬと思ふ。經濟的進出

られると、安南に忽ち牽制を受けるので、一八九八年に他國に割讓するなといふやうな條約を結んだ。さういふものは既に古文に類するけれども、支那にとつても海防の重要な門戸を扼して居り日英米佛の植民地の中間に介在してゐる海南島が如何に各國から注目されてゐたかは、地圖を開けば直ちに判る。さういふ意味で、我々は遠方から眺めてゐる時には、既に抜け目のない諸外國に依つて、種々の權益が植ゑつけられてゐるに違ひないといふ感じを受け、又、そのやうに書かれたものを讀んだ記憶もあるが、實際來て見れば、そのあまりの少さに一驚したのである。それはさういふ政治的掛聲の下に、島自身は、全く打ち棄てておかれたごとくである。海南島は全く未耕の處女地である。唯外國人の病院や學校、教會があるばかりで、投資としては、僅かに米國スタンダード・ソコニー石油會社が、鐵道のない全島の自動車を一手に買客としてゐる位のものに過ぎない。

米國驅逐艦アルデン號が十四日の午後、海口灣に、入港して來た。驅逐隊司令ジョン・スタップラー大佐及び艦長マイルス中佐は上陸して來て、日本軍司令官と會見した。さうして、我が居留民初め第三國人が如何なる状態であるか懸念してやつて來たのであるが、日本軍の整然たる秩

とともに、人格的な進出が廣くなされなければならぬ。骨を埋めるつもりで、このやうな仕事が進められねばならぬ。それらのことは、或る意味では、経済的な權益よりも、より一層尊い權益かも知れぬ。戦争のどさくさに紛れて、一儲けしようなどと、眼の色を變へて、戦地にやつて来る、我々兵隊に取つて最も不愉快な連中よりも、我々兵隊が生命を賭して戦ひ取つた戦場に、私は、聴診器を携へ、或ひは一冊の教科書を小脇にして、名利を顧みない文化の使者が訪れて来る事が望ましいのである。

十、街

海南人は全體として、非常に温順素朴だと云はれる。離れ島の長閑さといふか、應揚さといふか、こせつかないのんびりした所がある。私が廣東から来て、すぐに感じたのはこのことである。廣東人は狷介不羈なところがあつて、眼光も鋭く、うかうか油斷が出来ないぞといふ氣になる。前にも書いたやうに、私達兵隊は戦場に於て、戦火の中に士民が逃げずに止まり、占領當日

に商賣が行はれ、占領後幾ばくもなくして、常態に復活して行くなどといふことは、最初の經驗であつて、それは多分に海南人の島嶼的性格に基因してゐるやうに思はれる。然しそれはただ性質を以てばかりも云へないものであらう。海南島に於ける政治的過程をも含めて解釋しなければんとうではあるまい。この絶えず動揺してゐた不安定な政治の下にあつて、それは宛も支那全土に於ける民衆の性格が長期に互る動亂の歴史に依つて、次第に根強く抜き難いものに培はれて来たやうに、海南島に於ても同じことが起つたであらう。私は入城當日に市場に於て、我々の軍票が何の疑問もなく通用したことを思ひだす。それは私には意外に思はれたが、その後、私はそのことの意義を知ることによつて、私が、あの時に、一體この連中は少し足りないのではあるまいかなどと、冗談にでも考へたことの不明を愧ぢる。海口市民は常に行はれる政變の下にあつて、從來、ただ強權の壓迫の下に、唯々として隷屬させられて来たのである。無論、今や、その桎梏から、彼等を解放することが、我々の使命になつたのであるが、私はその故に海口市民の表面的な従順さを、社會的にも解釋することなくしては眞實ではないと考へたのだが、にも係らず、私は、掩ひ難い海南人本來の素朴さに接し、外貌も甚だしく日本人と似てゐる、この孤島の

住民に對して、限りない親愛を感じずには居られないのである。

私達は占領の翌日に、興北馬路にある中華西菜店といふ西洋料理屋に上つた。その日は、市中にある印刷局書店等の調査に出たのであるが、歩き廻つてゐる中に腹が減つて來たので、そこに入つた。すると、頭の禿げ上つた親爺がにこにこして迎へ、アルアル、ビールアル、洋食デキル、と云つたので、私達はびつくりした。私達は明り窓のついた高い天井のある露臺風な階上に上つて若干の料理を注文した。私達は出されたメニューを見なければ、何がどれなのか少しも判らない。親爺の説明に依つてやうやく明らかになつた。

洋葱牛肉扒ビフテキ

吉列猪排トンカツ

會肉丸ミンチボール

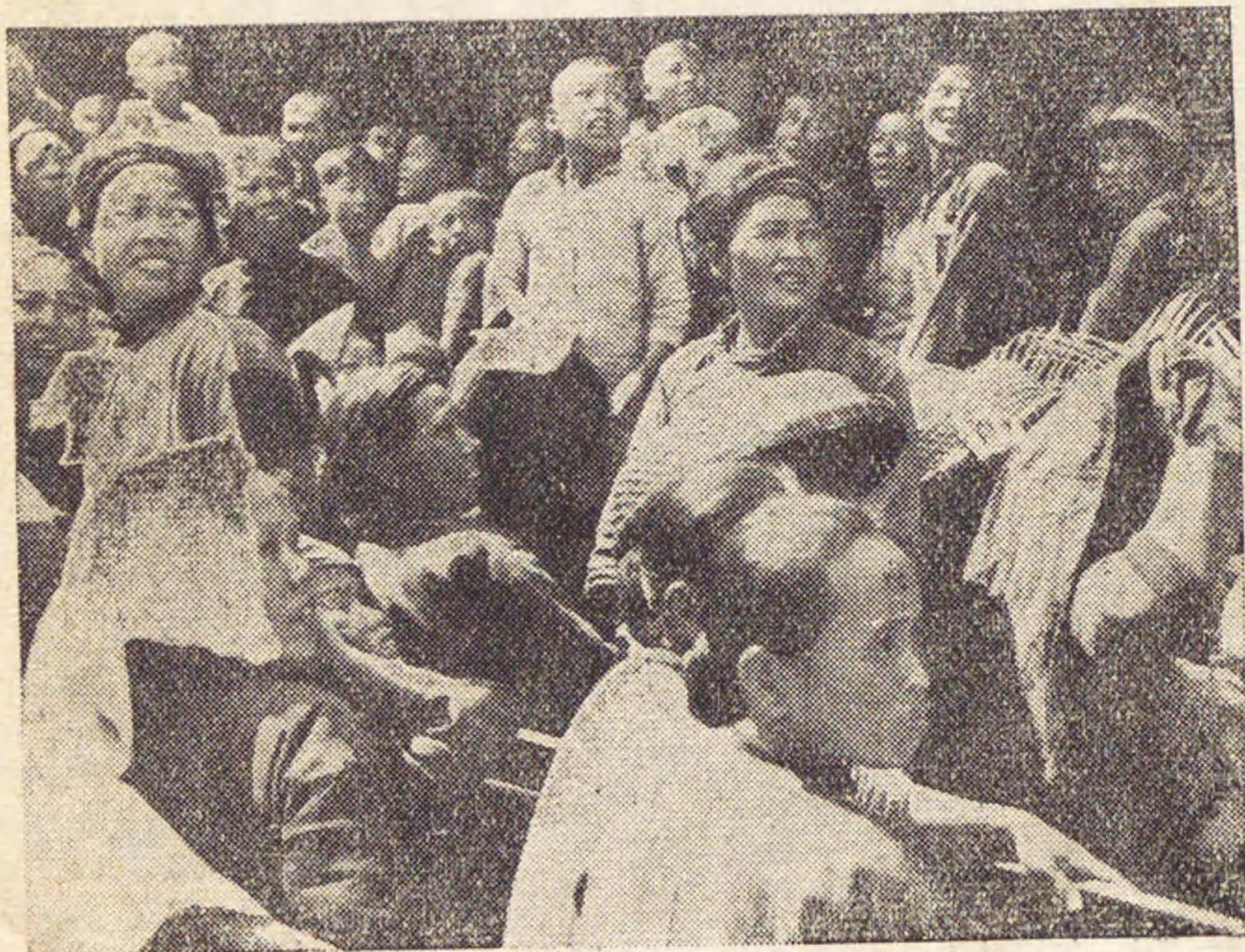
火腿煎蛋ハムエツグス

炸西鶏チキンカツ

鶏肉碌結チキンコロツケ

といふ譯である。私達は架啡を飲んだ。ぶんと匂ひがするが、よいコーヒーである。これは海南島で出來るコーヒーである。我々の過ぎて來た支那各地には、どの町にも茶館があつて、茶を飲むことの好きな支那人が大勢で晝間から茶を飲んでゐた。どの町にも素晴らしい大きな茶舗があつた。海口の茶館では、茶の外に架啡を飲ませる。コーヒーの出來る國へ來て、その土地で出來たコーヒーを飲むといふことは、何かはるばるとした旅愁のやうなものがあつた。片言の日本語を喋舌る主人がやつて來た。彼はしきりに我々に愛嬌を振りまき、ヨコハマ、オホサカ、ナガサ

飛 行 機 に 駐 民



キ、居ツタコトアル、などと云つた。この陳信義といふ親爺は、獨逸に十四年間居たといふ。彼は獨逸の軍艦のコックをやつてゐたが青島戦争の折に、膠州灣閉塞のために彼の乗つてゐた軍艦が自ら爆沈した。それ以來、陸に上つて伯林に居たのださうである。彼はしきりに日本はよいとお世辭を云つた。計算書を持つて來させると、私達はその安いのに駭いた。私達は四五人で腹のくちくなるほど平らげ、どうしても十二三圓は拂はなければならぬと思つてゐると、それには五圓九十三錢と書かれてあつた。平均洋食一枚二十錢で、それは日本の西洋料理店で食べさせるやうな紙のごときものではなく、ピフテキなどは、たつぷりと厚味のある大きな肉で、内地ではどうしても五六十錢は取られる代物である。その後も中野伍長などと數度行つたが、私達は大抵、鶏肉湯、洋葱牛扒、吉列猪排、それにコーヒを飲むと腹一杯になる。健啖おそるべき中野伍長ですら、それでも澤山だといふのである。それで、幾ら拂へばよいかといへば、軍票で四拾八錢でよいのである。その日も私達は五圓九十三錢といふ計算書を見て、これは安いと感歎したが、さて支拂をする段になつて、一問題持ち上つた。それは貨幣の換算率についてである。私達は日本軍票と支那貨との比率を理解させるのに、大いに骨を折つた。まだ入城した翌日で、午

後からはすぐに、このことに關する佈告のポスターや傳單を市中に配布したが、その時にまだ徹底してゐなかつた。私達が市中に配布した佈告といふのは次のごときものである。

佈告

關於大日本帝國軍用手票、中國紙幣交換比率、大日本帝國軍隊及國民所要求軍用手票、與中國紙幣交換比率、於昭和十四年二月十日以後、決定如左。爾等須嚴遵比率勿違。若發見故意變更交換比率、或從中操縱軍用手票價值者、嚴重處罰、此佈。

比率如左

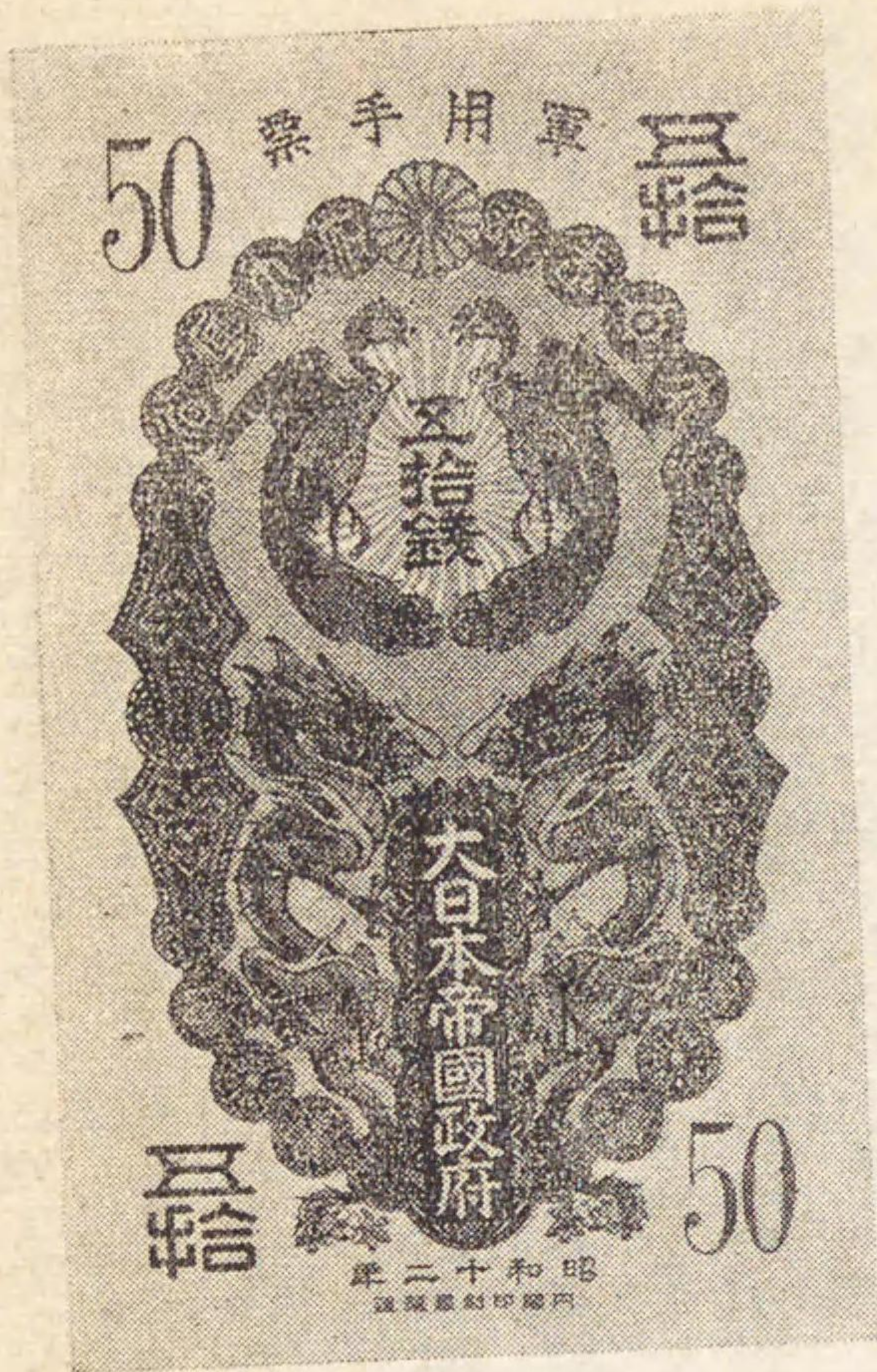
- 軍用手票壹百圓即換法幣壹百三拾元
- 軍用手票壹百圓借換毫幣壹百八十元

海南島派遣陸海軍司令官

軍用手票即ち軍票は日本の紙幣と同價のものである。日本金壹百圓は支那法幣の壹百三拾元に該當する譯である。支那法幣といふのは、中央銀行、中國銀行、交通銀行、等にて發行されたものであつて、支那貨の基準を爲すものである。毫幣といふのは、地方銀行に於て發行されたもの

で、甚しく價值が落ちる。それらの紙幣の價值は常に變動して居つて何時使用に耐へなくなるか判らない。私は前の上海事變の折に、前日釣銭に貰つた紙幣が翌日は駄目だと云はれたことが數度ある。香港弗と日本圓との爲替相場と、支那法幣との關係、廣東に於ては、クリーク一つ隔てた沙面と廣東市内との爲替關係。それ等のものは甚だしく複雑であつて、我々には解り兼ねることがある。海口の市場で使用されてゐた海口市商會發行の輔幣代用券といふのは、法幣と同價値のものであつて、毫幣と云ふべきものではないらしい。所謂法幣である大洋であつて、海口では小洋はないのである。入城當初はなかなか行かなかつたが、この換算率は數日ならずして、極めて順調に、實施せられるやうになつた。さて、我々が色々説明してゐると、面倒くさくなつたらしい陳信義は、なんぼでもよい、どうでもいいやうにして下さい、と云ひだした。私達はやうやく計算を終へ、チップを置いてそこを出た。出る時に親爺は階段の下まで送つて来て、今日はまだ材料が揃はない、明日から何でも出来る、明日また来て下さい、と、しきりに愛嬌を振りまいて云つたが、あきれたことには、後で聞くと、この陳信義は、海南書局の唐品三とともに、海口に於ける抗日三巨頭の一人であつたといふのである。

茶館も相當に繁昌してゐる。友記茶室で數回お茶を飲み、菓子を食べた。新式飽點一個十錢、色々な菓子を澤山皿に盛つて来る白い湯氣の立ちのぼる蒸籠の中に熱い饅頭を入れたのを持つて来る。自分の好きなものだけを食べれば、残つたものは差し引いて勘定する。コーヒー一杯八錢である。支那料理店も、長安酒家、富南酒家、等を初め、次々に店を開いた。海南料理は殆ど廣東料理と變らず、味があつさりしてゐて、少しまづい。海蟹の料理は珍らしくおいしかつた。それ等の價も亦安い。市中の店も悉く商賣を始めた。海産物屋、椰子細工屋、靴屋、布商等が多い。少史馬路は通りが殆ど軒並に靴屋、皮革屋である。下駄も賣つてゐる。この下駄はよいものである。海南書



の下駄はよいものである。海南書

局の壁には蘇東坡が下駄を履いた繪があつた。一種の突っかけだが、鋪道の上をからんからんとよい音を立てる。夜など、静かな時に、表でからからと下駄の音がすると、はつとすることがある。この下駄の音の中には、しんみりとした郷愁がある。故郷の町の夜更けを思ひ出さずには居られない。

街には多くの店が並び、露店も出てゐる。甘蔗賣りや、飴賣りが居る。金槌をかんと叩いて飴屋は客寄せをしてゐる。飲食店では、何としても得體の知れないやうなものを、大勢で集つて食べて居る。蜜柑も多い。酒屋も多い。糯米から作る甘い酒が多く、私達の口には合はない。中支にある老酒が無い。りんりんと鈴を振りながら、人力車が行きかひする。曳いてゐる車子よりはすつと汚い支那人が乗り、ふんぞりかへつてゐる。街を通つて行くと、繁華な大通りの路傍に、各所に井戸がある。跣足の女達が釣瓶で汲んでゐる。海口は水が美しく、非常に豊富である。我々の海南書局でも、毎日數十人の賄をし、風呂も沸し、ふんだんに水を使ふのだけども、滾々としてポンプ井戸から毎日水が湧き出でる。但し、少し鑛分があると思はれるのは、長い間その水で使つてゐるとタオルが赤くなつて來るのである。支那人は平氣で生で飲んでゐ

る。水を汲みに來てゐる女や、街を歩いてゐる女は、悉く金の耳環を嵌めてゐる。耳環は色々な形があり、青い翡翠をつけてあるものもある。若い娘は、やつてゐないやうだ。老婆には、纏足をした者が多く、よちよちと歩いてゐる。私は、靴下を脱いだ纏足の老婆を見たが、露出しなければ些か典雅と呼べるべきも、素足で見ると、醜く皺が寄り、ひねくれ、嫌悪の情が湧き起るのみである。女が大きな一尺餘の竹竿を擔いでしきりに通る。大きな荷物をそれで擔いで行く。殆ど彼女等は市女笠を被つてゐる。靜御前のやうには見えないがこの市女笠の風情はよい。子供の實に多いといふことが珍らしいもののやうに眼につく。よちよちと歩き出したばかり位の赤ん坊が一人で街で遊んでゐる。子供といふものは何處も同じである。私は支那に來て、支那の子供のませてゐるのに駭いた。それは然し、支那民族が負はされて來た流離と貧窮の運命に依つて作り上げられた性格だと思ひ、そのませてゐる様子が痛ましかつた。彼等は幼にして獨立し、非常に自主的で、何時動亂の中に、一人で投げ出されても自活して行けるやうな生活力を持つてゐる。竝んだ店などに子供が居て、大人と立派に取引をする。買ふ人も少しも馬鹿にした様子がない。十歳前後の少年がすばりすばりと煙草を吹かし、日本では親が眼も離せない位の子供が、どんどん何

處までも遊びに行き、博奕に耽る。

私は支那に来て、支那の何處にも殆ど郷土玩具らしいものがないのに駭いた。私達が見たのは、上流の家庭等に僅かにあつたものでそれ等も單に、セルロイドや、ブリキや、木製の新しい玩具に過ぎなく、駭くべくよき玩具の豊富な故國のことに思ひ到り、私は今更のごとく、日本の子供として生れ育つたことの幸福をしみじみと味はつたのであつた。そのやうな情操の泉に恵まれなかつた支那の子供が、銅幣を持てば、何はおいでも直ちに博奕を始める風景を、痛ましい思ひで度々眺めたことがある。ところが、私は海口の町を歩いて、到る所にある玩具店に眼を瞠つた。私にはその事は非常に珍らしく、駭きに値したのである。さうして、私は海南人の性格が、本來、溫順素朴にして、人情味に富むといふことの原因を、これらの玩具の中に見たと思つたのである。それは或ひは私の嬉しさのあまりの考へ過ぎに過ぎないかも知れぬ。それから私は、それらの玩具が、極めて日本郷土玩具に類似してゐることを見、ふと、海口の子供達が、街上で戯れてゐる色々な遊びが、亦、甚だ日本の子供に似てゐることに氣づいたのである。私達の限りなく懐しい少年時代の思ひ出が海南島の路傍にあつた。金輪をぐるぐると廻して走る支那の少年、

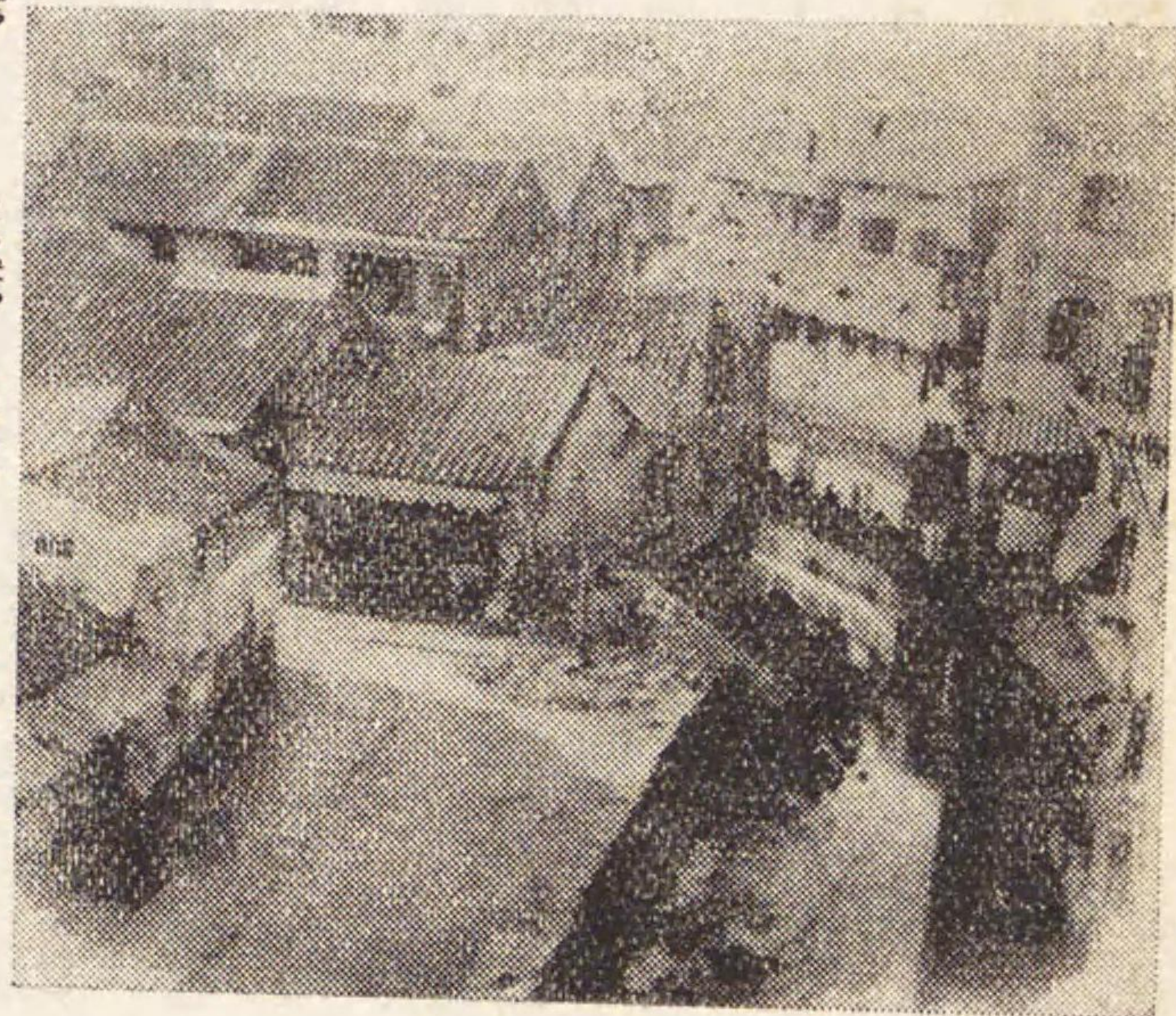
おはじきをする女の子、輪取りや、石蹴りをする子供、鞞に乗る子供、それらはことごとく私達の幼き日の姿である。玩具屋には、でんでん太鼓を初め、土焼の鳩笛、人形、紙張子のおきあがり、廻轉して鳴かせる蟬や蟹、蝶々、豪傑や、福神の土焼、鯛を釣る漁師と舟、等その他さまざまなものがあつた。ある町角ではおしんこ細工を作つてゐた。戦争に來た兵隊が、玩具でもないが、私にはこれらの感傷が、戦争であるが故に一層、尊まれてならなかつたのである。

又、海口の街が、私の經て來た支那のあらゆる街々と異つたところは、小盗兒市場のないことである。戦火の町は何處でも、先づ泥棒市から復興しはじめた。私は杭州を初め、何處でも大繁昌を極めてゐる泥棒市を見て來た。海南島に來る直前には、廣東慶福路のすばらしい賊街市の殷盛を見て來た。ここにはそれがない。その代り、賭博場は、道傍にすらりと開帳した。廣東のやうに未だ、營盛大利、公平貿易、現錢單片、などと麗々しく看板は掲げないが、竝んだ賭博場は何れも千客萬來である。警察局の前であらうが何であらうが遠慮しない。大部分は澳門で行はれてゐる四個博奕といふ奴である。その他數種類ある。子供ばかりが集つてやつてゐるのは、蝦だの蛙だの蟹だの魚だのの繪のある風變りなものである。朝から夜半に到るまで、賭博場は繁昌し

て居る。

夕刻に到つては、私は、あまりよろしくない地域に足を踏み入れる。私達が入城の當日に見た市場の横の通りは、日本人の立入禁止区域になつてゐる。私はそこを視察する。この附近は歡樂街であるとも、貧民街である。ものの腐つた臭ひを放つ泥溝を越えると、ここにも異様な臭氣が漂ひ、さまざまの上等でない飲食店が右側に竝んでゐる。その附近には土焼の窯が多く、瓶や七輪や壺がたくさん竝べられてゐる。ここにも多くの玩具店があり、おしん

よ上樓家酒安長



こ細工屋がある。左手にすらりと私娼窟が軒を竝べ、化粧をした斷髪の女達が、薄汚い家の中から、艶冶な流眇を送る。女に觸られるとふるひのつく私は、早々にして逃げ出す。之は海口唯一の娼窟で彼女等は全部たいへんな病氣を持つてゐるといふことである。支那人の男達がしきりに



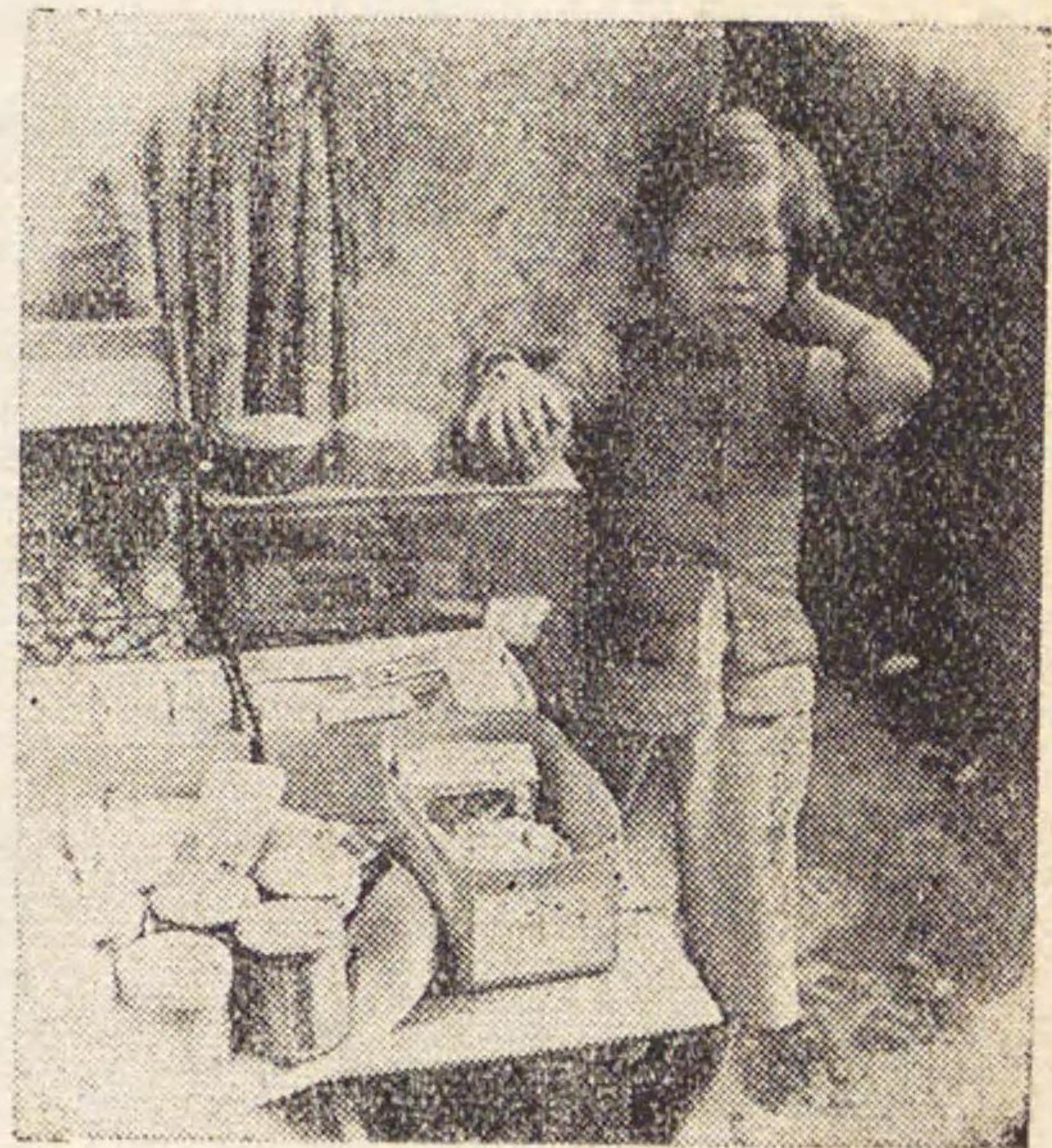
店食飲の路街

出入りし、何か女達とべたべたと話し合つたり、猥褻な身振りをして、けたたましく笑つたりしてゐる。戦火の未だ収らぬ戦場で、支那人が博奕と情慾の世界に惑溺してゐる姿は、何時もの事ながら、私に支那の持つ運命の、必然的に避け難い悲劇について考へさせる。私娼窟の間に挿まれて、一軒の阿片窟がある。暗いランプの明りの中に、ごろごろと何人も轉がつてゐる姿が薄黒く見え、青ざめた足の裏が幾つも居きたなく投げ出されてゐる。尺八のやうな煙管のまん中にある穴に、阿片を丸めて針のごときものでさし入れ、じゆうと音を立てて彼等は吸ひこむ。そのやにのやうな薬を丸める手つきにも又、何か恍惚の一片があるのであらうか。彼等はさも氣取つた手つきでくるりくるりと揉む。阿片の陶酔するごとき魔法はいかなものであるか知らないが、その眺めはただ徒ら

に醜く、嘔吐を催したくなる程である。私はそこを出て、再び、泥溝に掛けられた橋を渡り、爽快な舗道を踏んだ。

或る夜、私は長安酒家で、盲目の彈琴師の歌曲を聞いたことがある。どちらも二十四五歳と思はれる二人の盲目は、男の方は胡弓を弾き、女の方は揚琴を叩いた。扇形になつた揚琴の箱にかけられた赤い紐を、女は手探りで静かに解き、自分の前に琴を据ゑると、細い竹で作られた二本の撥を両手に持つて、琴を叩き始めた。張り渡された十四本の絲から、繊細な高い音色が奏でられた。盲目の女は正面にちつと面を据ゑ、手を動かすのであるが、二本の撥は駭くべく正確に多くの絲を次から次に叩き、よい音色が湧くやうに出た。男と女とは音楽に合せて、交互に歌を唄つた。何かもの悲しい眺めである。最初に弾じたのは「紅顏白骨」の歌、次は「失戀」の歌。二人の盲目の音樂師（二人は夫婦なのであらうか）は、次々に色

小 さ き 商 人



色な歌を唄つた。私達には歌詞は全く判らない。彼等の持つてゐた手帳には「妹妹我愛爾」「愛花情果」「駙馬艷史」「楊貴妃醉酒」「遊子悲杖」などといふ歌曲の題が列記されてあるが、悉く情歌であるらしい。海南書局で編纂發行した「海南土歌増集」といふのがあるが、これに蒐められてゐる數十篇の民歌は、風景の歌でなくは殆ど情歌ばかりである。土語が多く混り、私達には何のことやら判らないところが多いが、その大意は判る。「情人分別歌」「夜更自歎歌」「夫婦別離歌」「女人繡花歌」などは、情緒纏綿として甚だよきものである。（この「海南土歌増集」の巻頭に、「國難十嘆」といふのがあり、「一嘆敵人黑心肝・強佔我中華江山！ 前占東省擊上海・現又佔熱河榆關」で始まる抗日歌である。抗日歌が土歌でもあるまいが、周容に聞くとともに依ると、如何なる印刷物にも、この調子で、抗日的な頁を挿まなければ、出版を許可しなかつたさうである。）

私は一日つれづれなるまま、たはむれて、これらの幾つかの民歌を日本の言葉になほしてみたことがある。兵隊として戰場に來り、「夫婦別離歌」などに現をぬかすことは、武士にあるまじき振舞である、お叱りを受けるであらうか。

妻送夫

送人送到半路分

愈送愈遠心愈悶

坐在路邊捻草尾

看風吹土填足痕

夫和

剛只相逢即相分

愁內添愁悶加悶

懶歸日看我足跡

我去看唯個足痕

つまのうたへる

きみをおくりてここにきぬ

おくればうれひまさりけり

ろべんのくさにたたずみて

きみのあのとのかきゆをみぬ

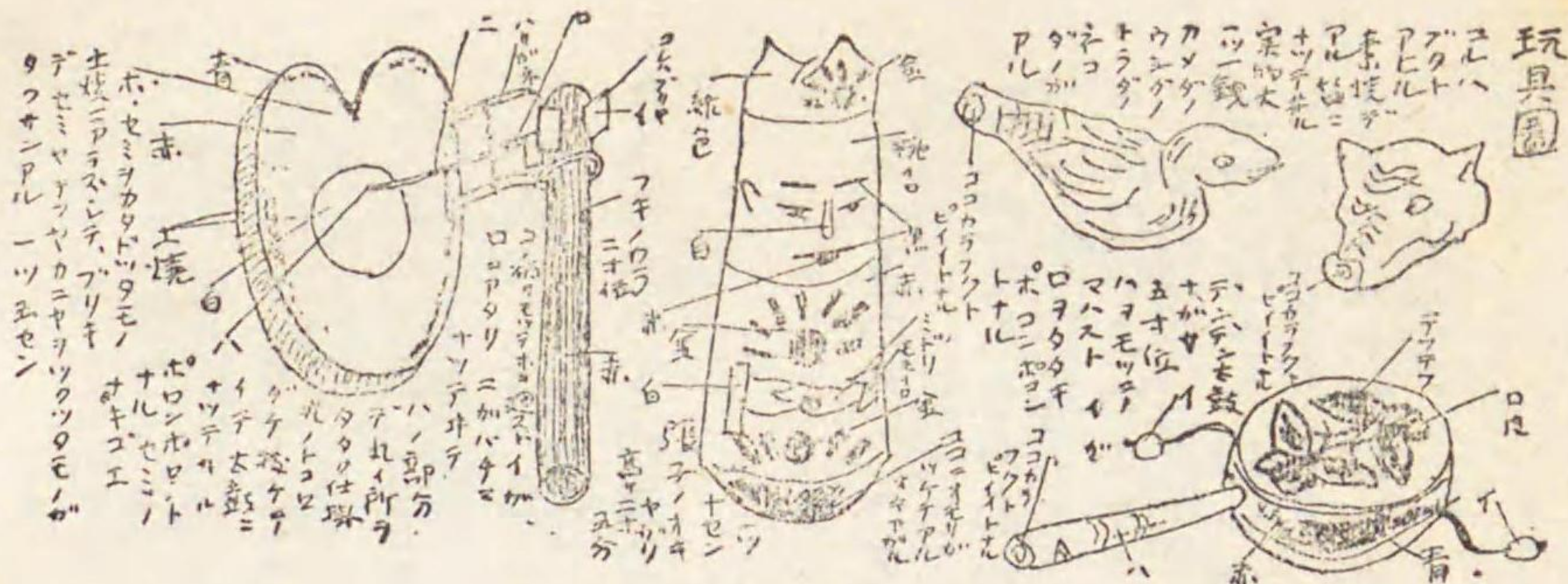
おつとのうたへる

あへばたちまちわかるてふ

うれひいよいよきえがたし

かへらばきみにいへあるも

さりなばわれはいかにせむ



夜が更けて、しんとすると、静寂のもとに、下駄の音がからんころんと、妙にかん高く谿して聞えて来る。又、次第に遠ざかり、消えてゆく。

やがてかそやかに鈴を振りながら、按摩が流して来る。何人も盲目の按摩が鈴を鳴らしながら、杖をいいて通り過ぎる。私はどうしても此處が日本をはるばる離れた南方の島であるとは思へなくなつて来る。何處からか、ふつと、おい、今日は肩がこつた、あの按摩を呼んでくれ、と、父の聲が聞えて来さうな氣がしてならなくなるのである。

十一、治安維持會

私は勝間田さんと一緒に毛鏡澄氏に會つた。海口市治安維持會の委員長となるべき人である。眼鏡をかけ長身の毛鏡澄氏は物腰柔く極めて

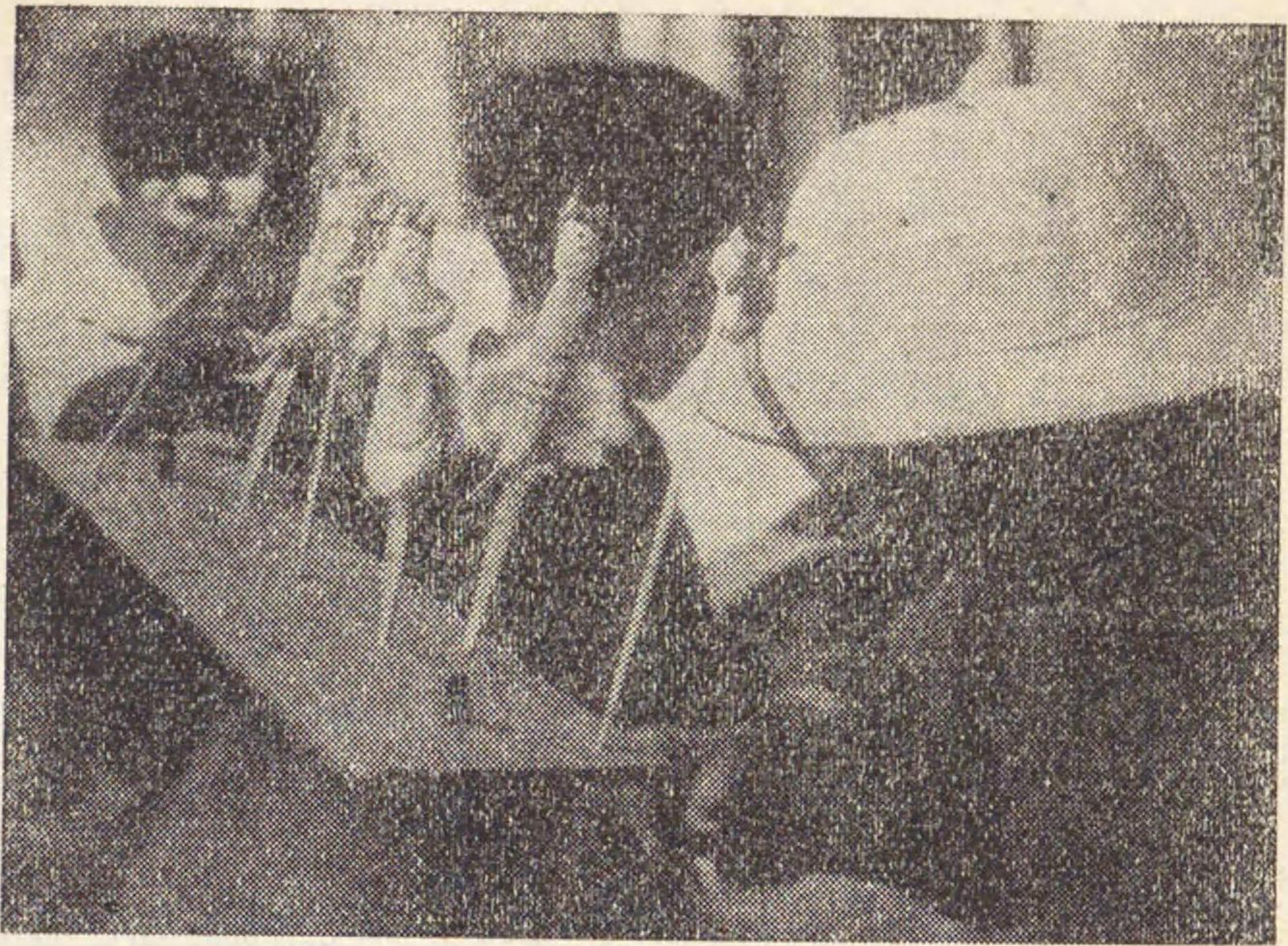
温厚の人のやうであつた。政治家といふよりは、明快なる事務家の如く見えた。氏は、もともと商人なのであり、海口市治安維持會の性質上、氏のごとき人物こそまことに適任であると思はれた。一體治安維持會結成に就ては、勝間田さんが極めて苦勞したらしい。勝間田さんは在任當時よりの知己が多く、その點で非常に有利であつた譯だが、入城當時には市有力者といふのは殆ど店を閉め切つて避難してゐたのに、代表者を集めるのに骨が折れたといふことである。然しながら、軍並びに、勝間田さんの直接の努力に依つて、入城翌日には、既に海口市二百四店から代表者を出席せしめ、選舉法に依つて委員二拾名を選出、治安維持會準備會の成立を見たのである。私は、故國を出でて、たつた一人の日本人でもが、邊境の地に骨を埋むる覺悟でその民族の中に永住してゐるといふことが、如何に偉大なことであるかをつくづくと感ずる。私は杭州に入城した時に、拱宸橋日本租界にたつた一人三十四年間を頑張り通した長崎の薬屋さん西川乙次郎氏があつたことを思ひだす。戦火の未だ収まなかつた杭州の一角が、一旦止むなく内地に引き揚げてゐた西川氏の歸還することに依つて、見る間に現狀に回復した現象を私は見た。近所の支那人達は西川さんが歸つて来てくれたのだから、もう大丈夫だ、と云つて涙を流して喜んだといふこと

である。私は同じやうなことを海口に来て勝間田さんの場合に見た。無論、勝間田さん一家のみが、この功績を負ふといふ意味ではない。然も、勝間田氏一家に依つて、受けた便宜といふものは大したものであり、勝間田さんが、建設復興の一つの推進力となつたことは、掩ひ難く、決して誇張した云ひ方ではないと思ふ。私は一つの諭警として云ふのであるが、例へば、米國が日本のやうな立場に立ち到り、海南島に上陸することがあつたと假定した場合に、福音病院院長ナタニエル・ヴェルコビツ氏の演ずる役割は小さくないであらう。或ひは、福音病院の役割と云ふべきかも知れぬ。私が、前にも、外國人が骨を埋むる覺悟を以て、如何なる山間邊陲の地にも、教會を立て、病院を經營し、學校を設立してゐるといふやうなことは、極めて教訓的であると云つたのは、これに通ずるものである。無論、そのやうなことが、戰爭を豫想して成さるべきでは絶對になく、巧利的意義よりは、寧ろ、純粹に人格的意義を以て行はれるのであるけれども、そのことは全然戰爭を度外視して、民族の平和的交流として、積極的になされるならば、その効果の偉大さは知るべきである。私は勝間田さんの顔を見る度に、このやうな感慨の起るのを常とする。準備委員會が出来ると、十八日に、これを土臺にして、三百七十三店より主人を出席させ、

一名が十名に投票するところの複式選舉方法に依つて再び二十名の委員を選出、十九日に選出された二十名の委員で互選をして、委員長一名、副委員長二名を決定したのである。毛鏡澄氏は委員長に推薦され、二十二日に盛大に成立大會を舉行することになつたのである。当日は爆竹を炮く外、市中行進、旗行列、さまざまの花車、獅子舞ひ、芝居等が行はれることになつた。又、別に、市民の無料治療、白米施與等も行はれる筈である。無料治療所は永久に設置される計畫であり、白米は、軍に依つて、非常に廉價に毎日市民に賣つてやることになつた。海口市に於ては治安維持會と同時に、種々のことが極めて順調に行つた。海關も何等の問題なく、接收が行はれた。海關長米國人ゴード・スミス氏は極めて好意的に日本軍の申入を受け入れた。海口市の從來の内外貿易總額は千

町に遊ぶ子





町 の 玩 具 店

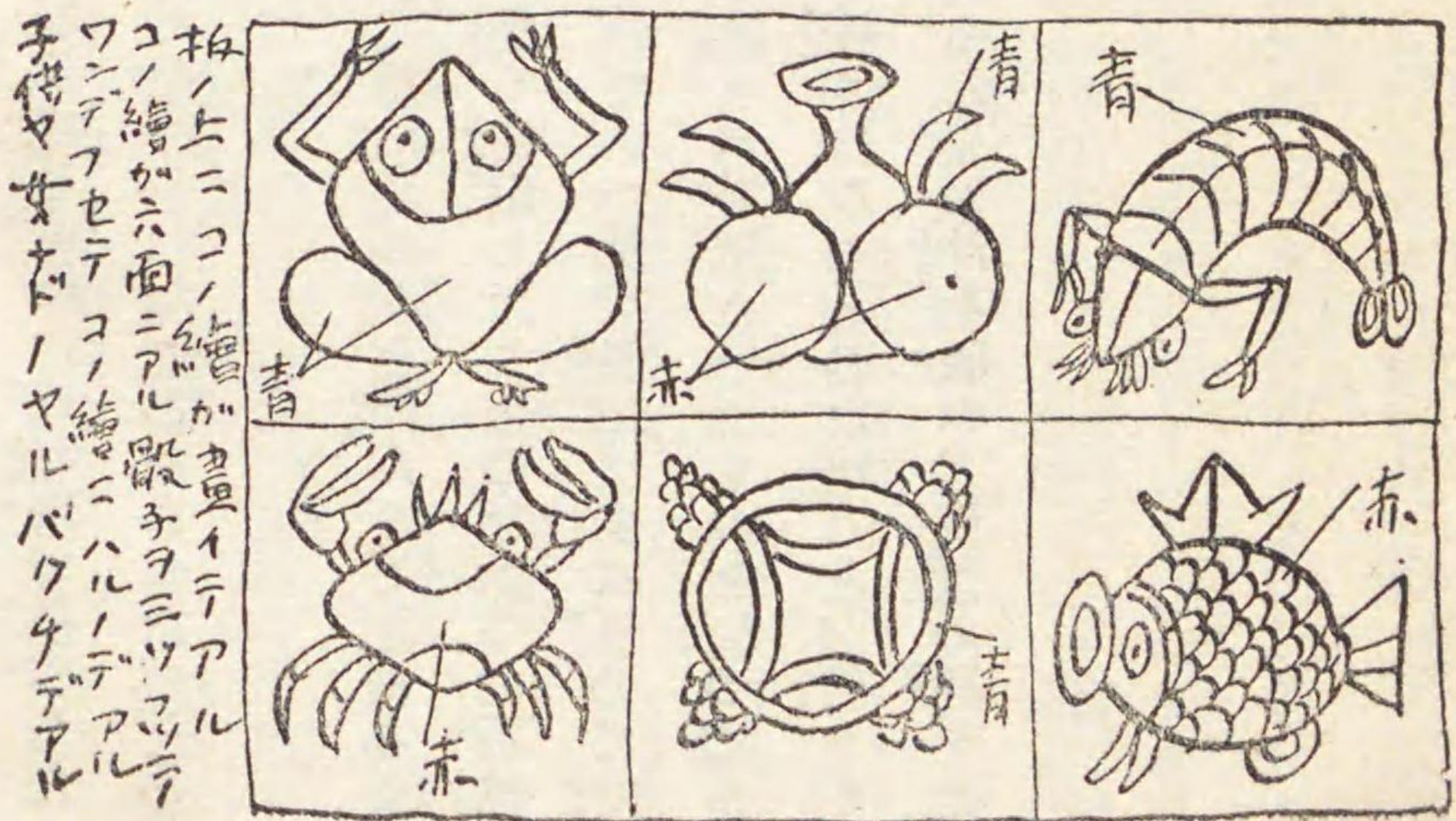
四百萬元、そのうち外國貿易六百萬元、海關收入は八十萬元から百萬元程度であつたといふ。十五日から憲兵隊に設置した民衆相談所はなかなか評判が良かった。相談所では一般民衆の保護に任じ、種々な證明書を交附したが、開設当日には、未明から民衆が殺到して来る始末で、十五、十六の両日で既に、良民家屋證九六三、良民證六二、通行證明證二八一を、發行した。日本國旗と並べて、良民家屋證を貼つて置くと、不逞支那人が侵入せず、良民證は一時避難した家族を迎へに行くため、又は、市内の復興を見越し、正月用品を近在から買ひ集めるために大いに希望者多く、通行證明書は、人力車

夫、軍占領地域内の帆船に依る運送業者が最も多かつたのである。變り種は、飛行機で撒布した砲の投降票を持つて、民衆相談所へ、のこのこと支那兵がやつて來たりしたことであつた。その外、大工、土工、人夫等の雇入れや、就職の世話などもしてやつた。或る一夜、勝間田さんを交へ、中野伍長と私は、毛鏡澄氏と支那料理の卓を圍んだことがあるが、この謙讓な委員長は、お世辭ではないと改めて斷りをし、全く安定したことのないなかつた苛酷な支那政權の下にあつて、我々海口市民の不安と苦惱も長いものであつた、私達は今は極めて明るい氣持になつてゐる、私達には一つの希望が出來たからだ、我々が希望といふものを失つてからどれ位になるであらう、私は再び海南島が、この希望から見放されることのないことが望ましい、と、述懐することく語つた。私達は、鱧の鰭をつつき、家鴨の足の汁を吸ひ、海蟹の卵をかじつてその夜は、したたかに豹狸の酒を干したのである。

入城以來、私達は煩忙な仕事に追はれてゐるうちに、ふと、街上の飾り物屋の店頭を見て、支那の正月が数日の後に迫つてゐることに氣づいた。十九日が元旦に當る。これは私達の取り上ぐべき好題目であつた。私達は來るべき正月を大的に祝はしむることこそ、復興に拍車をかけ、爾後の宣撫に大なる効果あるものと考へた。周容達に聞いてみると、どういふものか、從來の正月には長い間、お上から爆竹をたたくことを絶対に禁止されてゐたさうである。私達は才田大尉と計り、我々の印刷工場は、急據數萬枚の次の傳單を印刷したのである。

可喜之新春

海口市民、因在昔時蔣軍黨羽盤踞之時、禁止燃放炮竹、自日本大軍入境之後、秩序井然、地方安靖如常、日昨



會員某氏、與日軍當局會見時、曾以舊曆新年、能否燃放炮竹爲問、而當局以在此新年與諸君握手言欣、殊爲欣樂、已許其照常燃放炮竹、以資助興、想瓊島民衆、得此許可、新年當有一番熱鬧、點綴太平景象矣。

海口市治安維持會籌備委員會

この傳單は早速市中に撒布せられた。海南迅報にも大きく記事を書いた。私達は市民が戦火の中で、果して正月が如何にして迎へられるであらうかと、甚だしく不安な状態にあつたことを知つてゐた。私はこの傳單の結果が歴然と街頭に現はれるのを見た。街頭は忽ち、正月用品を賣る店が並び、春聯の廣告が爲された。支那の家屋には、門口に極めて縁起のよい文句や、詩句の書かれた赤紙が貼りつけてある。これは正月毎に新しく貼り變へて、一家の幸福を壽ぐのである。その春聯の詩句は私の中支で見えて來たものと大差ない。さまざまの繪、福神像、掛軸などが並べられた。それらの繪は甚だ原始的で、色彩は甚だ幻想的である。線香香木の類が賣られる。正月には此處では先祖詣りがなされるといふ。爆竹屋が繁昌してゐる。蜜柑屋、菓子屋も客が多い。新年にはさまざまの菓子を描へて、年始の客を接待するといふ。蓮子糖、蜜棗糖、椰絲糖、金橘

糖、冬瓜糖、香片糖、馬蹄糖、などといふやうな、さまざまの色をした美しい菓子が硝子瓶の中に入れてられ、並べられてゐる。

印刷工場の職工や、海南迅報社が、正月は休ませてくれるであらうかと云ひだした。海口では正月は三日間は必ず休み、十五日までは何にもしないといふのである。我々の仕事は山のごとく聞き、徹夜してでも連日印刷を続行したいところであつたが、我々は遂に彼等を休業させることに決心したのである。このことは直ちに我々の仕事に影響し、隔日発行の海南迅報の豫定を狂はせ、緒に就きかけた仕事を停頓させることであり、いろいろと意見もあつたけれども、宣撫といふ大局的見地から、殆ど決心を以て、休ませることに決定したのである。彼等は非常に喜んだ。同じ意味で、彼等に正月の準備をするやうにと云つて、俸給の全額を、前日に、つまり彼等の大晦日に支拂つてやつた。

海口には郵政局がある。海外華僑から、年々海南島に送金される金額は八百萬圓に達してゐたさうである。日本軍入城當時、直ちに郵政局は閉鎖されたが、その當時、既に送金の保管は十萬圓に達してゐた。軍では、この金を正月に間に合はさせるため、十八日に郵政局を再開せしめ、

市民へ拂ひ戻しをさせた。既に諦めてゐた市民の喜びは非常なものであつたことは云ふまでもない。(日本野戦郵便局は、十六日閉局の豫定であつたが、少し延び十八日に閉局され、兵隊の郵便物の取扱ひを開始した。場所は帝國領事館や部隊本部のある中山馬路である。)

私は梅本君と二人で、大晦日の夜の街に出てみた。星のきらめき落ちるやうな生暖い夜である。入城當時は夕刻以後支那人の通行を絶対禁止してゐた。數日ならずして、十二時迄時間を延長した。十二時といふのは日本時間であるから、海口時間の十一時迄である。暗くなつたり、明るくなつたり、消えたりする頼りない電燈のせいか、何處でも石油燈が用意されて居た。瓦斯のごとく煌々と明るい。青物市場や、酒屋や、爆竹屋、線香屋、菓子屋が並び、雑沓してゐる路邊に、ずらりと、賭博場が開帳し、まつ黒に人集りがし、繁昌して居る。煌々たる石油燈の下で、彼等は博奕に熱中し、私達が覗くと、へらへらと笑ふ。私はこの雑沓の中を悠々と煙草を熏らしながら、歩いてゐる白髯の趙心翁の姿を見た。彼は何をしてゐるのか、同じ所を何度も往復してた。晝間からさうであつたやうに、あかあかと石油燈をつけて、最も繁昌してゐるのは、理髮店と靴屋とであつた。床屋は何屋も満員で、中には子供が何人もきれいに頭を刈つてゐた。微笑ま

しく嬉しい風景である。私は床屋と靴屋との多いのに駭き、海口の町はことごとく床屋と靴屋とで埋められてゐるのではないかと疑つたほどであつた。頭をさつぱりと刈り、新しい靴を履いて、新年を迎へようといふ譯であらう。歩いて行く街々の閉め切つた家の中から、どの家からも、かちかちといふ音が聞え、しきりに博突が行はれてゐるやうであつた。(正月の夜歩いた時その通りで、一層にぎやかに行はれてゐる様子であつた。)

私達は五層樓の裏通りに行つてみた。ここも大變な賑はひである。やはり賭博場が最も殷盛を極めてゐる。太鼓が鳴つてゐるので行つてみると私達が入城當日にすさまじい掠奪の演ぜられてゐた公安局の中である。日本の祇園の打太鼓のやうな調子で叩き、鉦を鳴らしてゐる。大勢子供や大人がわいわいと云つてゐるが、中から出て來た一人の薄汚い親爺が、圓陣を作つたまん中で始めた藝當に私達は眼を瞠つた。素手で彼は立ちはだかり、うむと掛聲をして、身體中に力を入れた。筋肉が膨れ、力の溢れた胸がぶるぶると震へた。彼は腕を振り、足をつつぱり、或ひは曲げ、拳を握り、振り廻し、突き上げ、打ち下し、鉦太鼓に合わせて縦横に暴れ出したのである。それは一種の拳法のごとく見えた。やがて終ると彼は汗だくになつて息をふうふうとついてゐた。



術 槍

見物人は一齊に拍手した。支那の石井漢だな、と私達は笑つた。その次には一間餘の棒を持つた二人の男の子が現はれて、壯烈な突き合が始まつた。調子よく槍を打つつけ、はあ、やあ、と掛聲をかけた。先刻の拳法と云ひ、槍術と云ひ、私は、この島國の住民が、お祭の時にやるこの勇壯なる武技に感謝し、この海南島傳來の古武術に熱中する尙武の民族に非常なる親愛の情を覺えた。

私達は、然し、遂にこの夜は殆ど一睡もすることの出来ないやうな悲運に際會したのである。私達がやうやくまどろみかけた頃から、街では最早、すさまじい爆竹の音がとどろき始めた。爆竹は彼方此方で一晩中鳴り響き、私達の眠りを度々妨げた。朝になると、誰も彼も、昨夜は

寝られなかつたと見えて、眠さうな顔を見合はせた。爆竹は一日中鳴り、街はえんえんたる煙に包まれ、硝煙の香が街中に立ちこめた。爆竹の音は恰度機關銃を亂射してゐるのに似てゐて、まるで市街戦みたいである。爆竹のまつ赤な滓が街上に散亂し、時ならぬ紅葉を散らしたやうであつた。支那の正月は灼けつくやうに暑かつた。街は悉く店を閉め切つて休んでゐる。線香を持つた連中が幾組も通る。先祖詣りに行くのであらう。街を歩く支那人は何れもこざつぱりしたものを纏ひ、子供は綺麗な着物と靴をはいてゐる。私は一臺の人力車に何人もの子供が乗つて行くのを見た。きれいに着飾つた子供が、女の子は女の子ばかり、男の子は男の子ばかり、多いのは七八人も一つの車に乗つて、街を走つてゐるのである。そんな車が次々に通る。子供が正月に揃つて車で街を廻るのはこの土地の習慣らしく、子供の唯一の楽しみなのださうである。何臺もそんな車を通り、車ひきもここに笑ひながら曳いてゆく。ひよつこり町角を曲つて、五六人の男の子ばかりが圍つて出て来た。見てゐると、角に立つて、人力車の來るのを物色してゐる様子である。やがて人力車がやつて来た。交渉が始まる。一番大きな十二三位のが、幾らで乗せるか、とか、それは高いとか、この子は小さいからただでよいだらう、とかいふやうなことを云つてゐる。

らしく、しきりに大人の車ひきと折衝をする。やがて交渉が成立し、皆一つの車に乗つて走り出す。

飛行機が爆音を立てて何臺も飛んで來る。我々の印刷工場で作つた青赤白の「恭賀新禧」の傳單を撒く。雪のやうに散亂して街に落ちて來る。海南人が飛行機に驚くことは大變なものである。皆立ち止つて振り仰ぎ、宙返りをすると、一々、あ、あ、と吃驚したやうに叫び聲を立てる。

街には爆竹とともに、太鼓や鉦が鳴り響き、獅子舞が街中を練り廻つた。正月はまるでお祭である。群衆は手に手に日章旗を持つてゐる。各辻々で、昨夜私達が見た武術が演ぜられた。私達が見たものの外、三叉の槍をはげしく使つたり、一人が兩手に青龍刀を握つて切りかか

町の月正



の手の爪はどれも五分位宛伸び出してゐた。易者は書き列ねた。

今年巳多歳三拾三歳丁未年

此相水木之形・三停平勻・上得天庭飽滿・下得水・星方圓・兩耳有珠・生衣祿豐足・可鼻惜孔
太露・一生財來不聚・少年一得一失・未盡善也・仰視日月・日角低陷・判備先喪父・後喪母・
兄弟多中無縁・二枝要力・妻要破對・首妻折枕・子息他日實結二枝送程・遲者爲佳・三拾四
歳・行眉運・漸入佳境・三拾五歳・至四十才・大振家聲・四十一才・災厄未免・四十二・四十
三・求謀順遂・百發百中・萬無一失・四十四・四十五・險阻災難・斯不免也・四十六・四十
七・浮雲盡散・先明俊偉・名利生香・四十八・平穩・四十九・財帛耗散・五十一至五十六・謹
守・不可貧謀・六十・凶中化吉・六十一・四月犯火災・判備壽元六十九止

私は若干の謝禮金を置いてそこを出た。私の運命は歴然となり私は六十九歳までは生きることが出来るので、今日中に敗殘兵の手に掛つて、海口の露と消えることは絶対にないと、大いに安心をしたのである。

十三、密

はるばると、海を渡り、海南島に、客が私を訪れて來た。日本から來た手紙が届いたのである。その多くの客の中に、可愛い小さい客の姿があつた。

オイチヤン、オゲンキデスカ。シナモサブイデスカ。シヨウホウジマチノ、フミタロウモ、ヒデキチヤンモ、ミエコチヤンモ、ミエコノカアチヤンモ、ゲンキデス。シゲコネエチヤンハ目ガワルイノデ、ナニモサレマセン。シヤウカイセキハ、ワルイデスネ。ソシテナカナアヤマリマセンネ。ハヤクアヤマラシテ下サイ。

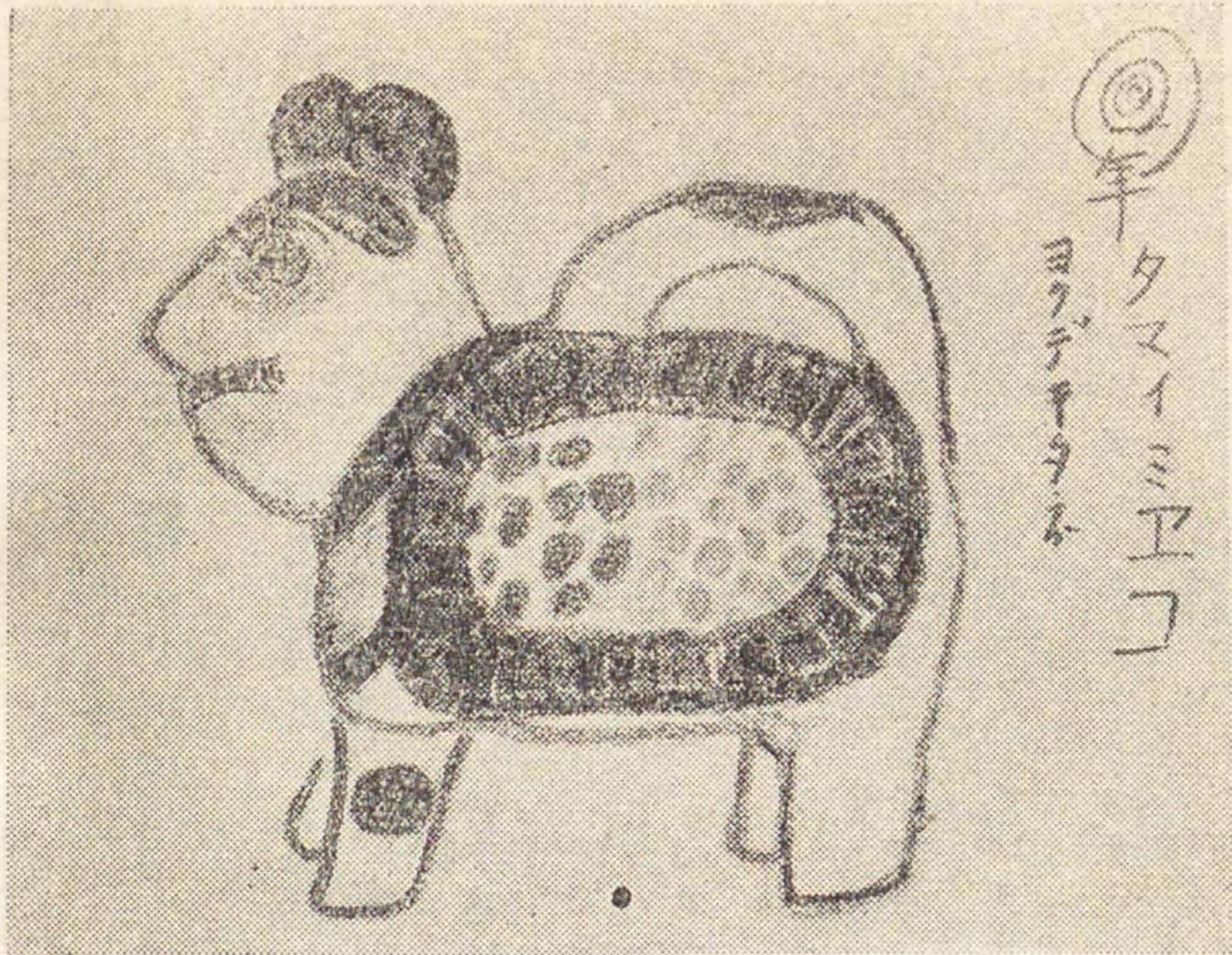
ケフハ、ミエコチヤントカアチヤンヲセメテ、サイホウバコヲカツテモライマシタ。オイチヤン、ハヤクガイセンシテカヘリナサイ。

中村トモ子ヨリ

おぢちゃん元氣でお正月をむかへておめでたう。茂輝も十になりました。今年は一生涯けんめい
にべんきやうして、大きくなつたら、おぢちゃんのやうに、りつばな兵隊さんになります。

おぢちゃんへ。

◎年々タマイミエコ
ヨウテキヲネ



この二人とも、私が出征する頃には、まだかた言を云ひ、全く文字などは知らなかつたのである。それがもうこんなに立派な手紙を書き、戦場にある私へ便りしてくれるのである。中村トモ子といふのは私の二番目の妹の子、前田茂輝といふのは、私のすぐ下の妹の二番目の子である。又、私は秋田先生から手紙を貰つた。秋田先生は私の二番目の娘の子を預つて薫陶してゐてくれる郷里の小學校の訓導である。私はまだ會つたことはない。秋田氏はやはり私と同じ小倉中學校の出身で、私の先輩であるらしい。秋田先生は私に丁寧な手紙をくれ、その中に、最近の私の娘の成績品を同封して送つてくれたので

前田茂輝

ある。それは、犬の玩具を描いた圖畫と「日月山川」と書かれた書方と、面を柿色の紙で張つた手工とであつた。私が出征の折には、まだ學校に上つて居なかつた美繪子が、もうこんなに成長したかと思ひ、私は、共子にしる、茂輝にしる、美繪子にしる、その大きくなつた姿が、さまざまに想像されるのである。私はこれからの手紙や成績品を手にとつて、ちつと見てゐると、不覺にも、臉が熱くなつて來るのを禁ずることが出來ないのである。

追 補

海口市、瓊山の復活、及び、近郷の治安回復が着々と進められて行くためには、もとより前線に於ける戦闘部隊の言語に盡せぬ勞苦が、背景をなしてゐるのである。海口を中心として、文昌、定安、澄邁、清瀾へと、部隊は、熱帯の酷熱と闘ひ、椰子の實に渴を癒しつつ、進出して止まない。南方に於ては、海軍部隊が、より一層の炎熱の中で、三亞榆林を中心にして、戦果を擴大しつつある。それらの尊い苦難を楯として、新海南の建設の事業は進められて居る。私達は報

道部としてその大なる事業の一部を分擔した。久門少佐、才田大尉を初め、報道部員は殆ど早朝から深更に到るまで、何かと用事があつた。輸送船の中で、しきりに碁を鬪はした中野伍長とは上陸直前には、海南島に上つたら、大いに決戦に見えよう、などと話し合つてゐたが、上陸以來、一度も烏鷺を戦はず時間を持たなかつた。我々は、然し、そのやうに忙しく、いろいろと苦勞があつたにも係らず、我々の任務が楽しくてならなかつたのである。

私は最後に一人の臺灣人の僧侶を書き加へて、この報告書の筆を擱く。私はまだその僧侶に直接會つてゐないが、その僧侶の話は、非常に私の胸を衝つた。彼は三年前、佛敎を弘めるために海南島にやつて來た。ところがその頃は、排日の空氣甚だしく、日本人は絶対に入島させないといふことで、上陸を拒否された。然しながら彼は、自分は佛に仕へる身であるからと、頭を地につけばかりに懇願し、やつとこのことで許可された。海口市の外れにあつた一軒の古寺に彼は住みこんだ。その寺は全くの破れ寺であつて、見るからに荒廢し、近郊では、そこには魍魎魍魎が跋扈してゐると取り沙汰し、随分久しい間誰も棲まず、打ち棄てられてゐたといふのである。彼はそこに入り、一人でこつこつとその化物寺の修理をした。彼が今に化物に食ひ殺されるであら

うと期待してゐた近郊の人々は、僧侶が何時までも食はれないのみならず、見るも無慚に腐朽して居つた堂宇が次第に面目を一新し、やがてその僧侶が、寺の裏に畑を作り、田を作り、農耕を始めたことに駭いたのである。最初僧侶が托鉢に廻つてもなかなか興へようとしなかつた人々は、次第に驚異の眼を以て彼を見るやうになり、後に進んで施與をするやうになつたのみならず、大工は來て寺の修築を手傳ひ、石工は來て、倒れた石門を起し、石を刻んだりした。そのやうにして彼が口ではなく、身を以て得た信仰は非常に強いものになり、彼はその近郊の人々から生佛と稱せられるやうになつたのである。日本軍がその近郊に進軍した時に、休憩してゐる兵隊のところへ、お疲れでせう、お茶上りませんか、と日本語で話しかけて來た僧侶が、彼であつた。彼はあまり流暢には日本語を喋舌らなかつたが、日本人としての矜持を持ち、日本軍の來たのを非常に喜んで海南島が臺灣に比べ、非常に地味が肥えてゐることや、深山の多い臺灣に比して、平野に恵まれた海南島の耕地の非常に有望なことや、それには第一に灌漑用水の便を計らなければならぬ、といふやうなことを熱心に話したといふことである。さうして、彼が居つたために、この近郊の農村では軍隊と住民との關係が極めて順調に行つたといふことであつた。

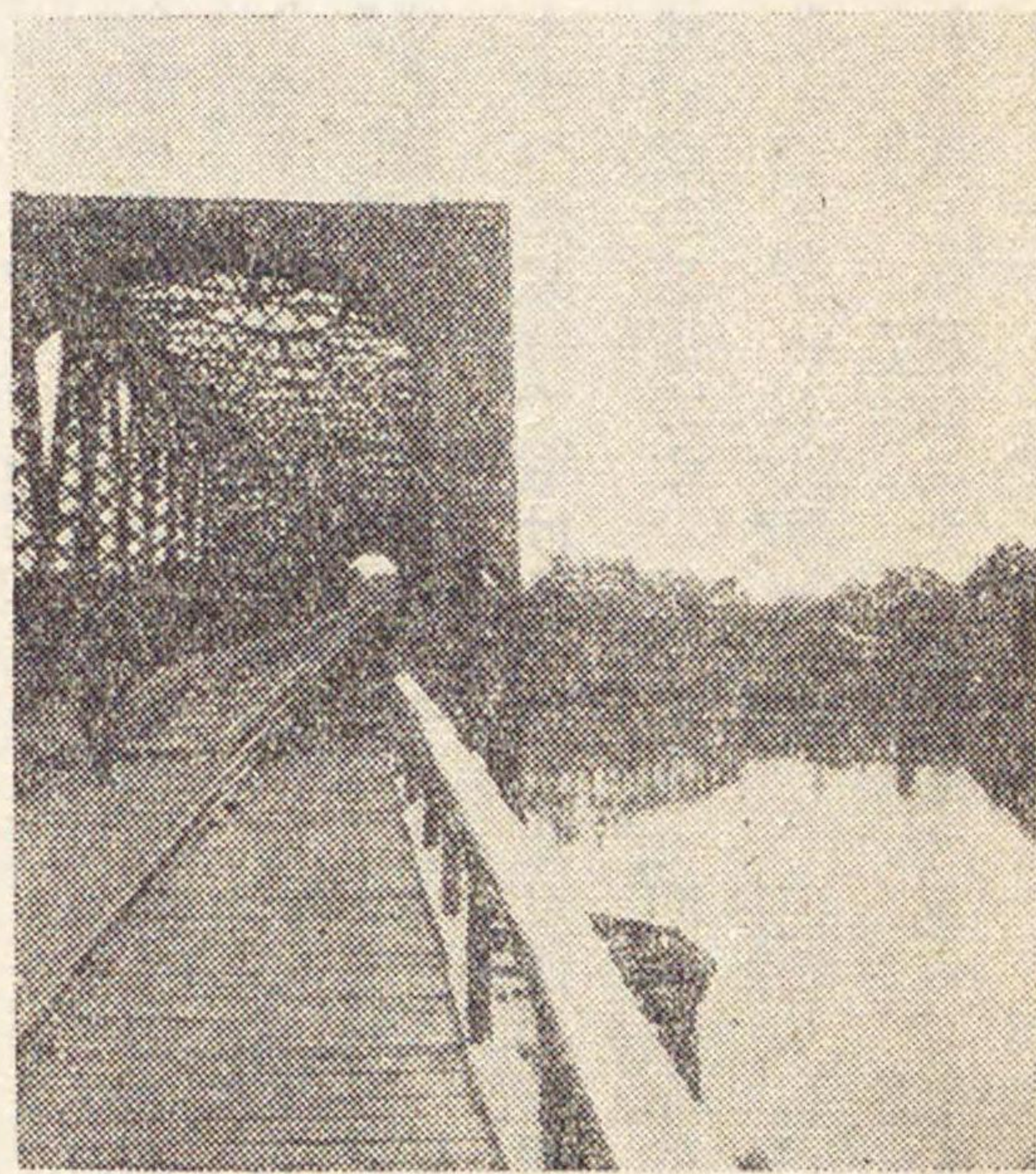
東
莞
行

(御無沙汰がはりに)

一、汽車

私達は汽車に乗つて東莞に行くことになりました。汽車に乗つて、といふことが戦場ではどんなに魅惑的で、嬉しいものであるか、貴方がたには判りますまい。私はまるで初めて汽車に乗る子供のやうに、それはそはとしてゐたものです。戦火の爲に廢墟となつた街々、荒寥たる山野、泥濘の道、さうしたもののなかを、銃剣を握つて、云はば上ずつた氣持で駆け巡つてゐた私達兵隊には、凄惨な死闘に依つて醸し出されるものは、直接には破壊の感情です。近代科學文明の頂點に依つて造り出された最新兵器に依つて、我々の住んでゐる、さういふ世界を破壊し、逆戻りし、廢墟と化すといふ一つの哀愁であります。もとよりそれは新しい建設のための破壊であり、新しい誕生のための犠牲であるといふことは充分承知しながら、眼前に展開されるすさまじい破滅の

面貌に兵隊はちよつと悲しくもなつた譯です。私達は落莫たる戦場で、ふと見出した鐵道線路に、何か愕然とした氣持になり、一切が崩壊の中に置かれた風景の中に、その幾何學的美しさを持つて、長々と走つてゐる線路が、まことに此の世のものならぬもののやうな氣持に、瞬時捕はれたことがあります。こんなになつ直ぐなものは初めて見たといふやうな馬鹿々々しい駭きと同時に、それは、一切が破壊され、逆行しつゝあるといふ情感の中に、ここに



このやうなものが昔の儘に残つてゐた、といふ喜びと、又には、我々の世界は如何なる酷烈なる破壊の運動の中にあつても、決して亡びるものではなく、新しい道を拓くものだといふ、希望の象徴のやうにも感じられたのでせう。ともかく、我々が戦場で鐵道線路を見出すといふことは非常に懐かしいものを見出したやうに嬉しかつたものです。然しながら、それは唯蜿蜒と靜かに列な

つて其處にあるだけであつて、尙も限りない哀感を漲らせて居たのです。そこで、私達がこの打ち忘れられた軌道の上を、動く汽車が通る、といふことに對して、限りない喜びを感じ、まして、その汽車に乗る、といふことが、胸のわくわくするやうな嬉しさであるといふことを判つて貰へるでせうか。何しろ、今日は汽車に乗れるといふことで、何か朝早くから眼が醒め、氣味の悪いことには、にやにやとひとりで唇をほぐして居つたものです。やがて時間が来て、廣東郊外の石牌停車場に行き、汽車の到着を待つてゐる中に、遠くで、汽笛の音が聞え、遙かの線路の果にむくむくと煙が見えて來た時には、おかしいことには、私は胸が痛くなり、涙が出さうになつたのです。やがて「廣九」のマークの入つた巨大な機關車は、兵隊の感傷を笑ふごとく、けたたましい音響を立てて、赭土の丘に急拵へされた石牌停車場の材木のフォームに入つて來ました。私達が乗り込むと間もなく列車は動き出しました。一行は野原大尉、中西中尉、當番の森一等兵、椎野一等兵、私の五人です。私達は一等車に収まりましたが、座席の中央には卓があり、廣軌なので中は廣く、他には殆ど客が無いので悠々たるものでした。おまけに、山田部隊長が乗つて居て、我々の前には山のごと

くバナナが出されました。野原大尉は山田部隊長としきりに話を初めてゐます。私達は又、子供のごとく、窓外に過ぎ去る風景を珍らしいもののやうに眺めてゐました。我々の両側に走り去る風景は、嘗て我々の戦場であつた所です。壮烈な戦闘が行はれ、多くの戦友が瘞れた所です。やうやく高くなつて来た太陽にあかあかと照らし出された山々はもとより、稲田、蜜柑畑、丘陵、土堤、バナナ畑等には、何れも堅固なトーチカや、掩蔽壕、機關銃陣地等が見られます。然し、今は強烈な十二月の太陽を浴びて、それらの敵陣地には日本の兵隊の姿が見られ、日本の旗がひるがへつて居ます。稲田には刈入れをする農民の姿があり、美しい蜜柑畑には手入をしてゐる支那人が見られます。それから、支那の軍人や、要人等が乗つて、抗日の経策を談しながら、九龍との間を盛に往來したであらう列車の中に、ふんぞり返つて、日本の兵隊が乗つてゐます。ひよつとしたら私が坐つてゐる座席には、嘗ての日、余漢謀氏が悠々と煙草を薫らしながら、腰を据ゑてゐたのかも知れません。或ひは、蔣介石氏が、また或ひは、宋美齡氏が腰を下したことが無かつたとは云へません。私達はさういふことを冗談のごとく話しながら、この喜劇に似た一齣から、やはり東洋の運命について切實に思ひを致さずには居られなかつたのであります。今日は我

我の軍隊が廣東に突入をしてから、四十七日目なのです。私達は大東亞建設などといふ大きな問題に就ては、その分ならざるを知るものですが、その大事業はそれらの根本方策に沿ふところの、あらゆる小さな問題を解決することに依つて達成せられなければならぬといふことは自明の理であり、我々が直接關與し得る範圍内に於て、地味な仕事を着實に完成して行くことこそが、直ちに、日本が運命を賭して遂行した困難なる事業を建設に近づかせる重要な道だと思つて居るのであります。さういふ眼に見えぬ無数の仕事に質實になされなければならぬし、否現在着着と行はれつつあり、私達が今汽車に乗つて東莞に行くのも、さういふ一つの仕事のためなのです。

白耶士灣に上陸した時にもさうであつたやうに、廣東に入城してからも、すつと綿々と夏が続いて居ます。十二月六日といふのに、全く眞夏の暑さです。列車は南崗、石厦の驛を過ぎ、日本の山野に似た風景の中を走ります。南崗驛では警備隊の兵隊達がフォームに並び、散髪をして居ました。みんなもの恐しいやうな髭を蓄へ、頭はチャンギリに短くしてゐますが、髭は誰もそのままだに残してゐるやうです。バナナをやらうかと云つて持つて来てくれました。私達は煙草やキヤ

ラメルなどをやりました。沿線に點々とある部落には、どこにも圖抜けて高い頑丈な石造りの家屋が珍らしく眺められました。その恰好から云つても、波の上に現はれた海坊主のやうに突立つて居ます。あれは質屋なのだ、部落民の庶民金庫であつて、農民は自分の家に現在不必要な品物を置くことはせず、殆ど金庫に預けてしまふ、夏になると冬物はすつかり入質し、冬が来るとそれを出して夏物を入れる、萬事この調子である、それは此の附近には極めて盜賊が多いのが原因である、と中西中尉が私に話しました。中西中尉は今部隊本部に居ますが、それまでは部隊に居て此の一帶の警備に當つてゐたことがあるのでなかなか詳しいのです。この附近の農民は割合に義理堅い、食べる米が無いと云つて貰ひに来るので、稻を刈つたらよいではないかといふと、地主が逃げてまだ歸つて来てゐないから、無斷で刈ることは出来ないといふ。さういふ話も中西中尉はしました。橋梁のあるところには必ず日本の兵隊が警備してゐます。歩哨の居る附近には粗末な警備隊の小屋があります。私達が列車の窓からバナナをやらうと云ふと、いらんぞう、と云ふ。バナナはいらんから煙草をくれと云ふ、バナナならこちらからやるぞう、と云つて笑ふのです。この一帶にはとてもバナナが多いらしいのです。これは石龍に着いてから聞いたのです。

が、廣東から来る兵隊は割合にバナナを食べたことがないので、汽車に乗ると驛々で警備隊からバナナを貰ふのを喜ぶのです。ところがしまひにはたうとうバナナに食傷し、次の驛が見え出すと、車の上から先に、バナナはいらんぞう、と叫んで来るといふのです。やがて私達の列車は石灘に到着しました。鐵橋が落されてゐるので、そこまですか汽車は行かないのです。

二、石灘

石灘の町は實にごちやごちやと家の團つたせせこましい町です。石磴の狭い道路がその間をくねくねと曲つて通じて居ます。驛々には牧野部隊から馬を出して迎へに出て居てくれました。殆ど住民の姿は見うけられませんでした。私達は迷宮のやうな石灘の町を抜け、美しい川に架けられてゐる軍橋を渡りました。非常に清冽な流れで、馬が何頭も膝まで浸り、咽喉を鳴らして水を飲んで居ました。方々で兵隊が米や野菜を洗つて居ます。その橋を渡ると、對岸は玄州といふ部落で、寺廟らしい警備隊本部に入りました。入るとすぐ左側に部隊長の部屋があつて、駭くべき

粗末なものです。雨が降つたらとても居れないだらうと思はれる位です。一隅に遺骨が奉安してありました。先づ私達は遺骨に敬禮をし、線香を立てました。箱を包んだ白い布は常に私達にまぶしいやうな悲しみと怒りとを誘ひます。

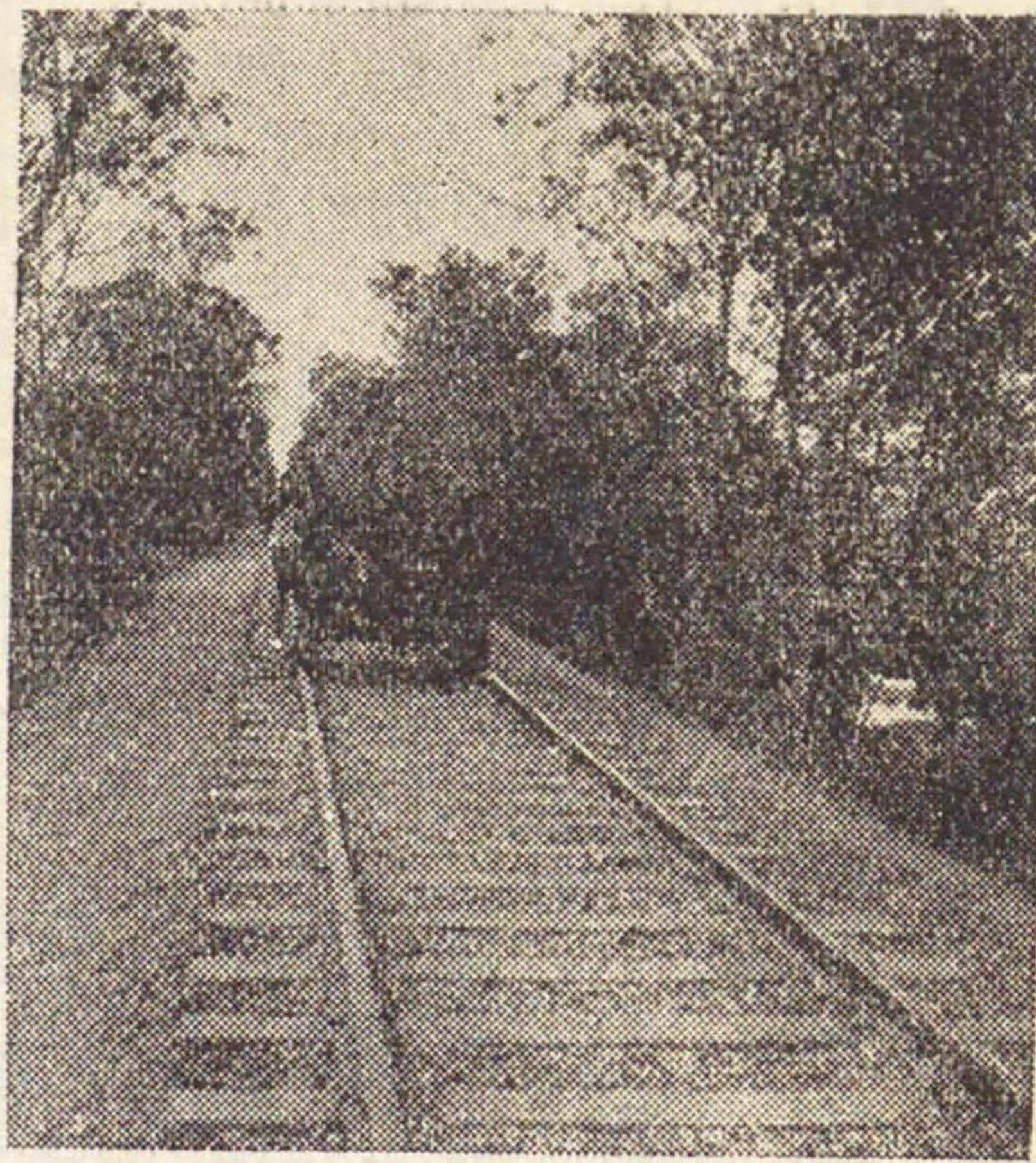
私達は晝食を御馳走になりましたが、眞赤な小蝦の皿に一驚したものです。恐らく最大の珍味を集めての献立と思はれましたが、失禮ながら、石灘最高の料理は、極めて貧弱であつたといふべきでせう。それは無論止むを得ないことであつて、手に入らぬ材料をよくこれまでに集められたと感謝し、その困難に同情したのです。何處でも警備隊の兵糧はさういふ状態であつたのです。我々は味のことを云つて居るではありません。それはたいへんおいしくはあつたのですが、石灘最高の献立を通じて、兵隊達の想像を越えた缺乏と不自由さが思ひやられたのです。ただ、この小蝦には驚きました。我々が全く最近廣東に於てすら口にしなければなかつたものです。否、廣東であるが故に口にすることが出来なかつたといふべきでせう。これは前の川でいくらでも獲れるのです、兵隊が毎日網をひろげて掬つて居ます、と、笑ひながら、黒田中尉が話しました。私達は牧野部隊長初め各隊長から、石灘を中心とする警備状態や、治安恢復の模様などを大略

知ることを得ました。周囲にはまだ敗残兵や土匪などが出沒してゐる困難なる警戒配備の中で、部隊長自身に依つて成されて居る宣撫工作と其の成果とは充分に我々を駭かすものがありました。牧野部隊の以前に石灘警備隊であつた部隊が既に其の工作を進めてゐたのですが、討伐後交替して其の事業を繼續し、極めて好結果を収めてゐるといふのです。石灘はもとより、附近部落各村には次々に治安維持會が出来、討伐直前の數字ではあるけれども、良民證を與へたもの、麻車三八〇〇、上羅岡五六三、陸村一二六、大和村五〇、白石嶺二九四、上岡三六（今日村長が二〇貫ひに來た）塘頭八四、等々である、それは有體に言へば復業が目的であつて、政治的な意義は二の次になつてゐるけれども、それは止むを得ぬところであつて、各所にある小學校の教師等が非常に働いてゐるので、逐次根本的にその成果が擧りつつある、それらの教師中には英語を喋舌る者が多いので大變便利である、最初農民が鶏を十羽ばかり提げて日章旗を借用に來た、どうするかと思ふと、借りて行つた旗を稻田の中に立てて刈入れをして居る、この頃では自分達で作つた日の丸の旗を立てて仕事をして居る、この附近の農民は日章旗など見たこともないといふのが殆どで、日本などといふ國を知らないのが大半である。廣東は革命と抗日の本場と云はれるけれ

ども、案外さういふものが農民には侵透して居ない、結局はさういふ美名の下に苛斂誅求されてゐたので、日本軍が経済的に援助して行くことに依つて、治安の恢復が目覺ましいものと思はれる。増城方面に敵が居るので、それから突つかれるらしく、下羅岡にはまだ判然とした形のもので出来て居ない、上羅岡は非常に好意を寄せて居るので近く治安維持會が出来ると思ふ。——さういふ話を私達は聞かされたのです。昨日は銃剣を提げて勇猛に戦闘した部隊自身が、今日は其の破壊の土の上に立つて、それを整理し、困難なる状態の中で、新しい道を求め進んでゐるといふことは充分に駭くべきことと私達には思はれました。

大堀部隊長は曾て私の部隊長であつた人です。私は大堀部隊長の指揮下にあつて終期機動演習に参加したことがあります。廣東攻略作戦では右迂廻隊となつた竹下部隊は、炎熱の下を、山中で言語に絶する難行軍をし、各所で敵部隊に遭遇をして激戦を交へつつ、非常なる苦難の中に多くの犠牲者を出しました。私の幾人かの戦友もその時に瘞れました。大堀部隊は遂に悉く小隊長を失つてしまつたさうです。殊に黃草嶺の戦闘は筆舌に盡し難いものであつたらしく、牧野部隊長初め、口々に其の折のことを話しました。私は部隊の本部と俱に一路本道上を進撃したので

すが、十九日に五子洞で、野原大尉と俱に敵大部隊の包围を受けて非常に苦戦したことがありますが、それは石龍方面から増援にやつて來た一五三師で、廣東軍中最も精銳だと云はれるもので、一五一師の殘兵と合し、福田墟東方高地の五子洞で、私達はまるで袋の鼠にされたのです。機關銃と迫撃砲の下で我々は既に覺悟をしてゐましたが、やがて到着した歩兵部隊に依つてこれを撃破し、敵は雪崩を打つて北方へ退却した。その敵と宛も黃草嶺の附近で竹下部隊とが衝突をした譯なのです。社下の附近で、少數の敵を撃破して峠に出た、ひよつと下を見ると前方の谷間に何か眞白に見えた、雙眼鏡で見ると敵兵である、見ると狭い道を一列側面縱隊になつて蜿蜒と續いて行く、高い所から思ふさまに銃火を浴せてやつた、敵は潰亂した、ところが其の附近の山には悉く堅固な陣地があつた、やがて激戦が展開された、敵はなかなか勇敢であつた、上衣を脱いで陣地から身體を乗り出して手榴彈を投げて來る、笑ひながら投げて居る、これにはあきれて腹が立つた、機關銃で射つと引つこむ、隙間を見ては又頭を擧げて手榴彈を投げる、敵が手榴彈を澤山持つてゐたには駭いた。さういふ話を、大堀部隊長はその時の光景を思ひ描くやうに、ぼつりぼつりと話しました。最後に皆は、それだけの苦勞をしてやつと廣東に近づいたと思



つたら、入城も出来ないで、こんな田舎に來たのは如何にも残念だと云ひ、せめて廣東料理でも鱈腹食つてやらうと思つてゐたのに、と、各々髭面を撫しながら笑ひました。私達は暇を告げ、灰のやうに埃の立つ道を石灘の驛に出ました。

三、トロッコと兵隊

石灘からは我々はまことに世にも古風なる旅を始めたのです。私達の旅行のために驛にはトロッコが一臺用意されてありました。手押し車です。豊川伍長外三名の兵隊が我々の護衛並びに機關となつて乗車してくれました。一間にも足りないトロッコはこれだけ乗れば超満員です。送つてくれた清水中尉に別れを告げ、やがて我々の車は、ぎい、かりかり、ごろごろ、といふやうな音を立てて、動き出しました。手で押すと、齒車が噛み合つて、前進するのです。石龍

までかうして押して行けば一時間半か二時間位かかるといふのです。水上げ唧筒を押すやうに二人の兵隊が交互に仕掛を押へます。歩く方がよつほど早い位の速度で、トロッコは楊柳の並木の續いた單線の廣九鐵道の上を走ります。何とも悠長至極なものであります。私達は機械を押す兵隊が氣の毒なので時々代ります。陽はかんかん照りつけるし、私は忽ち汗に塗れます。森一等兵も時々機關になります。二人で汗みづくになり、ふうふう息を切らして押すと、ごりごり鳴りながら、トロッコは軌道の上をのろのろと行きます。少し坂道になると、とんと動かなくなつてしまひ、仕方がなしに何人か降りて押して行きます。最早この附近は敵襲の心配があまりないので、先づ暢氣なる旅といふべきでせう。兵隊はぎいこぎいこと機械を廻しながら、暖いお正月ですなと、と話し出します。今度で二度目の支那での正月です、去年は寒かつたですが、今年は夏のやうな正月でせう、雪なんぞ降つたことはないといひますし、十二月一杯も廣東は暑いと云ひます、たうとう足かけ三年支那で暮すことになりました、去年は糯米が少しあつたので餅を搗きました、此處ではまだ早いので探して居りません、氣を注げては居ますが、バナナはいやになるほどありますが、糯米が無い模様です、此處に居る兵隊は昨年正月をした時には二人減つてゐま

した、今度はまた四人減りました。淡水で一人やられ、黄草嶺で三人やられました、小隊長もやられました、一年も戦場に居ると、やはり色々周囲は變つて行くものです、生死を共にして来た戦友が居なくなることは、自分の親や兄弟が死ぬよりも淋しいものです。——私は駭きました。のろいトロッコの速度と調子を合わせるやうに、ゆつくりした口調で話をした。豊川伍長の眼に、次第にきらきらと光るものがあらはれ、それはやがてたらたらと頬を伝ひ始めたからです。豊川隊長の話はことごとく私自身の経験したものであり、もとよりその感懐は同じでありましたが、私には、止度なく流れ落ちる涙を拭はうともせず、何か自分に言ひ聞かせるやうな口調で話し、ひややかな微笑さへ含み、ごんごんと、しきりに機械を押し居る豊川伍長が、極めて複雑な心の影を投げて居るごとくに見られました。私は私の炯眼を吹聴すべきでせうか。それはさうすべきではないでせう。これは我々兵隊が一年以上も戦場にある間に、極めて屢々繰り返された悲劇であり、それは戦場にあつては、ありふれた事柄です。ただ私はその話の間に、次第に速度を減じて来たトロッコの上に居るに堪えず、地上に降り立つて歩き始めましたが、恰度同じやうに降りて居たもう一人の兵隊に私は秘かに訊ねました。あなたの隊長殿は戦地にあ

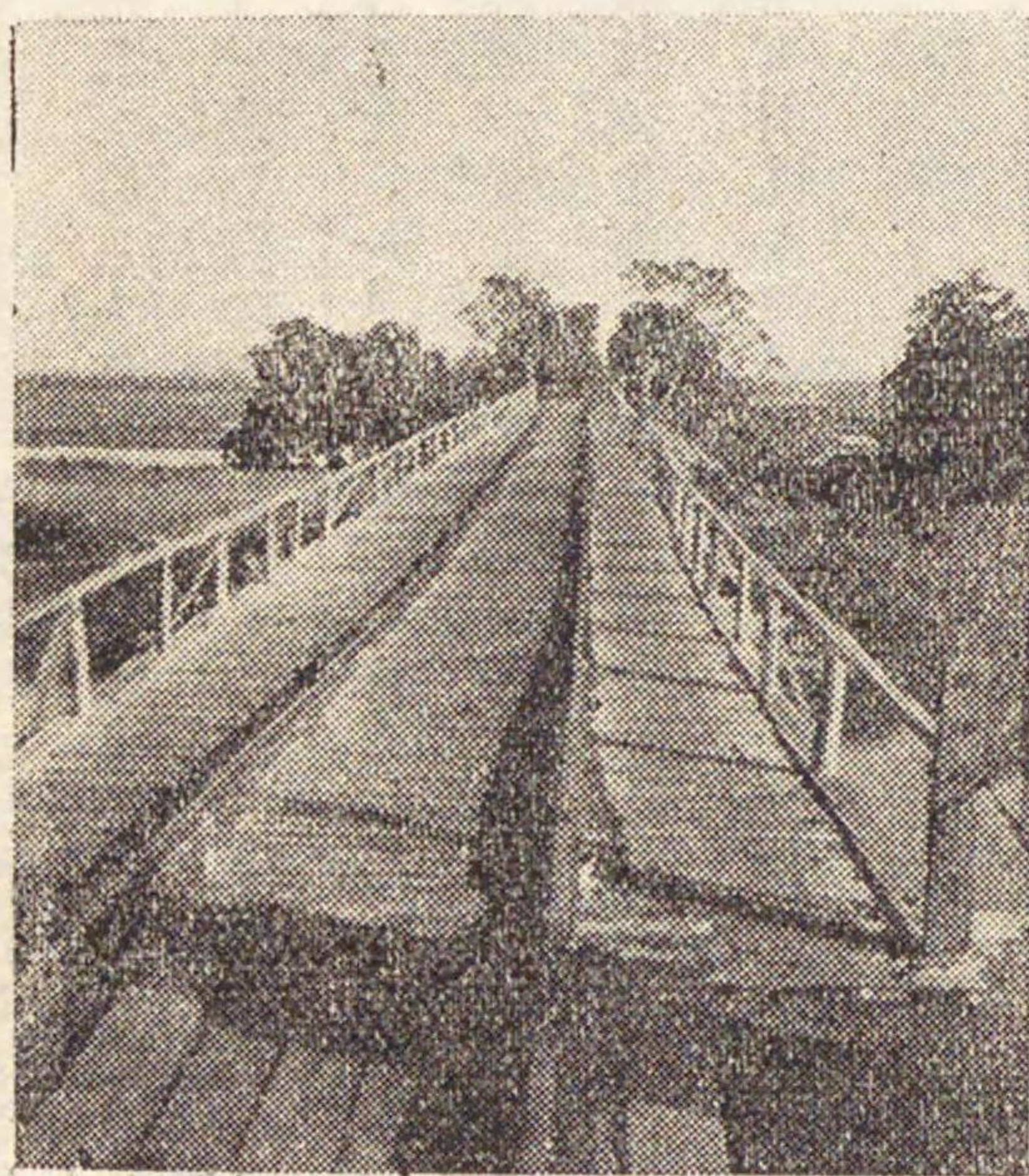
る間に、お父さんか兄弟かの誰かを亡くしたのではないかと。するとその兵隊は駭いたやうに私の顔を眺め、豊川隊長はそのどちらも此の八月に失つたのです、と低い聲で答へました。それは本人には直接故郷から知らせて来たのではないけれども、その隠してゐた事はすぐに班長に判つた、それ以来少し怒りつぼくなつた、然しよい班長です、と兵隊は云ひました。なほ、その兵隊は續けました。私も姉が亡くなりました、姉は永い間寝てゐたのだし、私の出征前に既に難しいと云はれてゐたので、別に駭きはしませんでしたが、それも實に變な方面から私に判つたのです、未だに私の家内から来る手紙には、皆達者である、姉も少しはよい方だ、などと云つて來ます、私達は無論故郷からの便りが一番待ち遠しく、また嬉しいのですが、どうも信用は出來ないのです、尤も、私達も故郷に手紙をやる時には、病氣で寝てゐても、元氣で戦つてゐる、などと書いてはやりませけれど、そのまた嘘ばかりの手紙が、嬉しいものです。——話を聞きながら、そのやうな戦場での最も平凡な事柄が、事新しいもののやうに私の胸にふれ、私は胸の痛む思ひで、なほもトロッコの機械を押し居る豊川伍長の後姿を私は見やりました。石瀝壙の驛から私達は新しい機關を雇ひ入れました。警備隊の兵隊からそこで働いてゐた支那

人を二人借用したのです。私達のトロッコは急に速度を増しました。二人の支那青年には軍票で二拾錢宛與へました。苦力は喜んで、跣足になり、軌道の上に乗つて、どんどんトロッコを押して走り出しました。苦力は蒸氣のやうにしゆつしゆつと手漕をかみすてながら勢よく走ります。沿線は廣々とした稲田で、日章旗を立て、農民がしきりに刈り入れをして居ます。長い竿の先に鎌をつけ、横に振つて刈り倒す。それをすぐに其の場で糶を落す。この附近は三毛作と云ひます。我々のトロッコが行くと手を振つたりします。我々の車は以前とは比較にならぬほど速力を増しましたが、尙、機械を押して行きます。佛蘭西革命の時にはナポレオンがやはりかうしてトロッコで行つたんだよ、と、私の同行者をからかふつもりで、私が言ひますと、さぞはがゆかつたでせうね、と豊川伍長が云つたので、私ははつとし、詰らぬことを云つたと思ひました。

四拾錢の機關のおかげで、私達のトロッコが速度を加へたので、面倒なことになりました。私達は前を行くトロッコに追いついてしまつたのです。私達の前を自動車を積んだトロッコが大勢の兵隊に押され、極めてのろのろと進んでゐました。軌道は單線です。これが汽車だつたらどうにも前の車の後からどうしてもくつついて行かなければならない所でしたが、そこがトロッコの

ありがたさです。トロッコから降り、自動車を押し居た兵隊も手傳つて、やつこらさとトロッコを抱へて線路から外し、自動車の乗つて居るトロッコの前に出て、また軌道の上に乗せたのです。又しても、軌道の上を走る苦力に後押しをさせ、我々のトロッコは迂り出します。すると今度は向ふから兵隊が三人で押したトロッコがやつて來ました。向ふから來た兵隊は我々のトロッコが行かない中に、臺と車輪とを別々に軌道から外してしまつて、我々を通してくれました。その兵隊は我々の護衛の兵隊を知つてゐるらしく、汗を拭きながら聲をかけ、石灘まで糧秣を取りに行くのだと云ひました。こんな風にして其の後も幾つかのトロッコに出會ひましたが、單線軌道の上で我々の交通整理は譯もなく順調に行つたのです。我々は又、沿線を續々と歸る土民が、籠を擔いで、過ぎて行くのを、度々追々抜きま

昭 和 橋

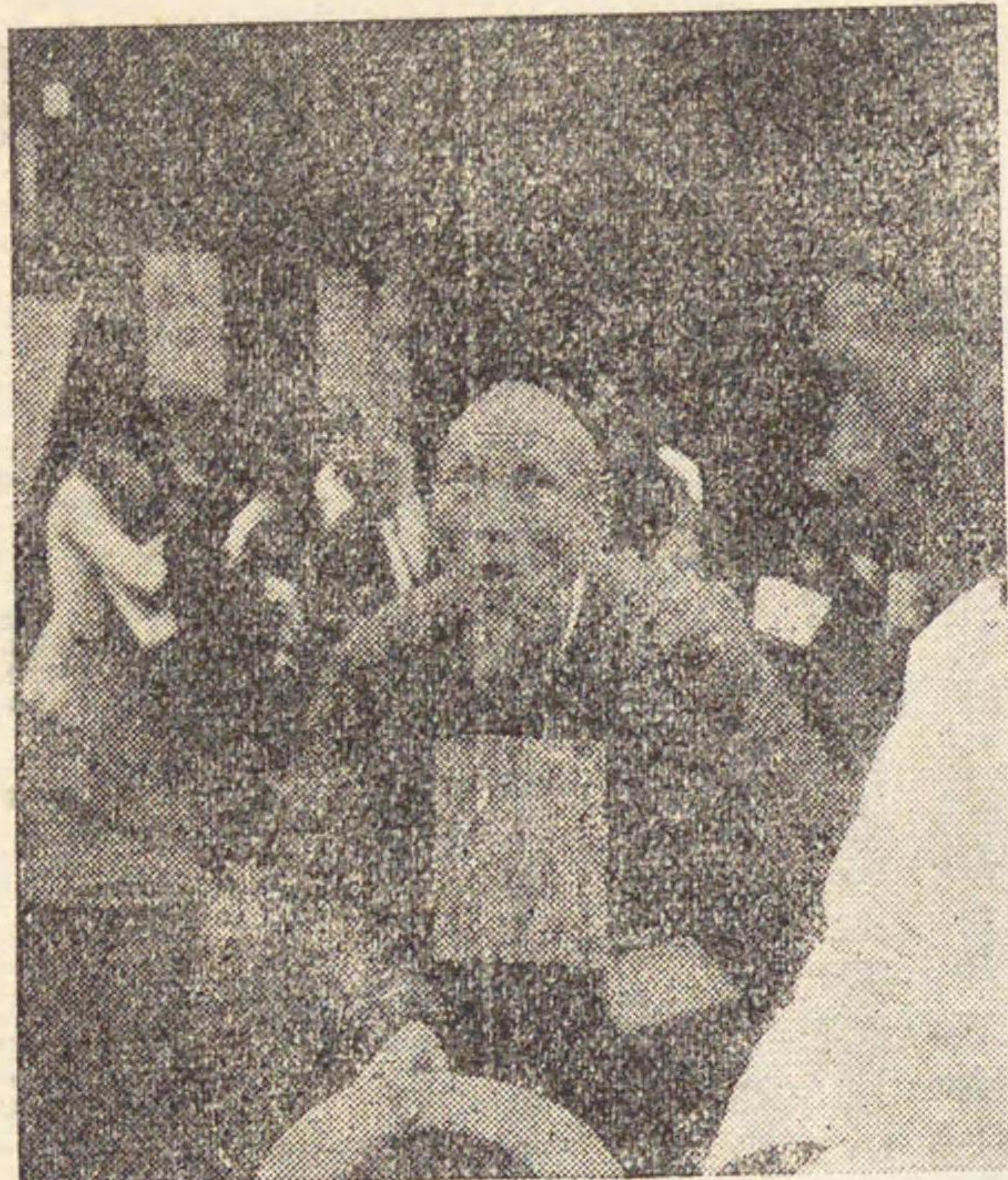


した。やがてやつとの思ひで、楊柳の並木越に石龍の街が見え始め、昭和橋といふ鐵橋にさし掛りました。その鐵橋は手前の方が爆破されて河中に没してゐる上に、實に綿密に丸太で橋脚を組み立てて、手前の方だけは木橋で修理されたものです。高田隊の架橋したもので、通過規定の立札が立つて居ます。破壊された橋梁の石の上に腰を下して、一人の兵隊がしきりに毛糸の編み物をして居ました。蓬々と髭を生やしたその兵隊は、私達が前を通ると立ち上つて敬禮をし、私達が過ぎると、なほも編み物をせつせと續けました。彼は何を編んでゐるのか。それを確かめることも面白いことですが、それを確かめないのも、また非常に床しいことに思はれました。

四、石 龍

何といふきれいな町だらうといふのが、石龍の第一印象です。それは決して街自身が立派であるのでもなく、大厦高樓が見事なのでもなく、爆撃のために破壊されたと思はれる廢墟のごとき石龍の町が、實に清潔であつたのです。コンクリートの鋪道の上には全く葉屑一つ落ちて居な

い。我々はそこへ煙草の吸殻を棄ててよいのか、唾を吐きすてることは愚か、泥のついた兵隊靴で歩いてよいのかとさへ思つた位です。私達は非常にすつきりした氣持になり、ああ石龍はうまきいつてゐると、さういふ茫漠とした明るさがすぐに湧いて來たのです。暫く行くと、數人の支那人苦力が實に町噺に街路を箒で掃いて居りました。別に大した塵もないところを幾度も幾度も横に撫でてゐるのです。町の家にはまだ殆ど支那人の姿は見られず、所々に跛や盲目の乞食が蹲つて居りました。私が廣東に來て最もあきれたのは、なんと不具者の多いことだらうといふことでした。それは廣東だけではなく、石灘でも、此處でもさう



食 乞

でした。何故こんなにも不具者や病人が多いか私には判りません。中支では街角や壁などで眼を敵たしむる廣告は殆ど煙草の

廣告ばかりでしたが、廣東に來てから、我々の注意を惹く廣告は、癩病と皮膚病の藥の廣告です。癩癩瘡癩の妙藥の看板です。私達は廣東に就て考察をし、新廣東の建設に就て方策を講ずる時には、この嫌らしきものを徒に忌避しては、我々はその工作の重要な部分を既に失ふのではないかといふ感を深くしました。その點では外國人が病院などを建設し、この救護に當つてゐるといふことは深い教訓を與へるものと思ひます。さういふ仕事で最も重要な仕事として、我々の手に依つても成されなければならぬと思ひます。それについて、一寸別のことのやうであるが、私達兵隊が最も苦々しく思ふ現象は、この事變のどさくさに紛れこんで一儲けしようといふ輩です。そのためには大陸進出といふ素晴らしい隠れ蓑があります。彼等は一箇の貪慾のために占領後の町に現はれる。怪しげな商賣を、不愉快なる方法で始める。固より必要なものを我々は拒否しない。然しながら、斯る連中が狐のごとき表情をしながら、遂にお互が共喰ひをする迄にも只專自己の蓄財に没頭する姿は、淺ましく腹立たしい。その最も甚だしき現象を上海で見ました。それらは既に充分識者をして聲登せしめたやうです。然しながらそのことに對する我々兵隊の憤懣は又自ら別なものがあります。我々が尊い生命を賭けて奪取した土地を、何のために

さういふ連中に蹂躪されなければならぬかといふことです。我々は泣きたくなるのです。廣東に於てさへ既にその徴候が現れかけました。——これは、とんだところで憤慨を始めてしまつて恐縮です。私は今石龍の町を歩いて行きながら、醜怪なる多くの不具者や病者の姿を眺め、先ほどの感懐を抱くとともに、何よりも成されなければならぬ仕事よりも先に、さういふ人達が溢れることがふと悲しかつたのです。同胞を誹謗し、罵詈雑言することを何で私が好みます。正しく健康なる建設のために、極く少數のさういふ同胞（それこそは同胞の名を汚すものでありませう）が整理されなければならぬと思ふだけなのです。

私達は廊下のごとき鋪道を歩いて〇〇部隊本部に着きました。そこでの用件をすませ、私と中西中尉とは、野原大尉に別れて、竹下部隊本部を訪れました。途中の街の家々には兵隊が澤山居ました。それらの兵隊は最近我々の部隊の増加兵としてやつて來たものです。新しい軍服に新しい軍靴をはいて、私達を通ると極めて活潑に我々に向つて敬禮をします。ぼろぼろの軍服を着、破れ靴を穿いた我々は兄貴のやうな氣持になつて答禮をします。竹下部隊本部は狭い露路を入つた奥にあつて、酒店の跡らしい家でした。露路の入口で恰度出て來る竹下部隊長に會ひました。

頗る元氣のやうで、〇〇本部の方へ一人で行かれました。

其の夜はすつかり本部の藤津伍長の世話になりました。藤津伍長はやはり若松出身で、よく一緒に球などを撞いて遊んだ友人です。用件は早くすんだので、露臺に出て本部の人達や、遊びに来た鶴村中尉等と色々な話をして時を過しました。歩けば一足毎に家中ががたがた鳴るやうながさつな家です。無論何處に行くところもない。すぐその川の向ふにはお客が居るよ、と云ひます。お客といふのは敵のことです。今日お客が少しやつて来たが、お土産を持たせて歸した、と云ひます。少し損害を興へたのを、感心に戦死者を擔いで逃げたと云ふのです。鶴村中尉の當番がぜんざいを作つて持つて来てくれたのはたいへん御馳走でした。石龍も糧秣が缺乏し、殆ど副食物は野菜汁ばかりといふことでしたが、小豆や砂糖などは澤山あつたやうです。殊にそのぜんざいの中にあつた餅はうれしきものであつたのです。鶴村中尉は、今度の増加兵を引率して田中正章君が来たが、今日既に内地へ歸つた、會ひたがつてゐたと、私に話しました。田中軍曹は現役時代からの友達で、内地の話なども聞きたく、私も残念であつたと思ひました。折からこのがたがたのバルコンに皎々たる満月の光がさして来ました。私達は、破れた板戸から流れこんで来る

月光の中で、極めてくだらない話を、駭くべく豊富にしながら、時の過ぐるのを知りませんでした。私が會ひたいと思つて来た磊落な黒川副官は私達とすれ違ひに廣東に出發したとのことで、木村准尉、加藤准尉、林准尉、中西中尉、鶴村中尉などが、このバルコンの放談會の顔ぶれでした。このげらげらと取りとめもない話の中に、一年間を死生の巷を潜つて来たものの口からみ洩れるひとつの響があり、そのけたたましいばかり騒々しい空氣の中に、妙に森閑としたものがありました。私はこの席上にあつて、つとめて故郷のことを考へてみることにしました。これは逆療法です。この逆療法は、小生實驗の結果、極めて効果的であることを發見したのです。考へまいとして胸を襲撃する痛みと、わざと考へることによつて起る陣痛と、何れが大なりや。どうせ満月などといふ厄介なものが出た以上は、こちらから郷愁を搔き寄せるこそ、得策であるのです。

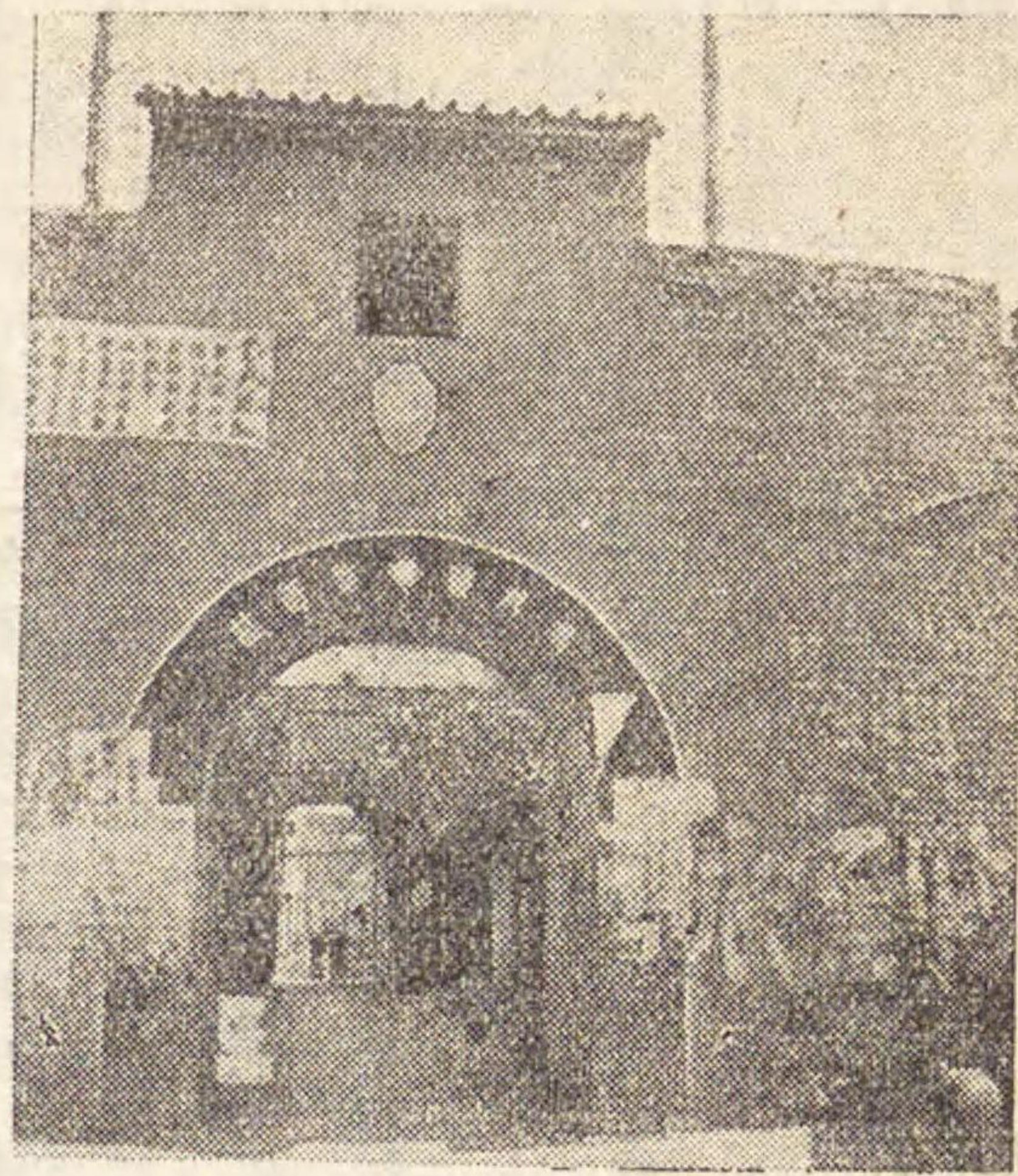
朝、便所に入ると、板壁に幾つも抗日の文句が書きつけてありました。何處にもあるやうなものです。九時に出發をして川岸に出ました。道路傍の壁などには抗日漫畫が一杯に貼りつけてありました。途中で或る大きな白壁の家に、門の兩側に大きく青ペンキで書きつけてある文句を讀んでみると、ふと呼びかけられて振りかへりました。その家は宇土部隊本部であつて、その壁には次の文句があつたのです。

「新生活運動是救國的基本工作」陸軍九三師五五三團政處
「軍民一致起來推行新生活運動」委員長行營政訓處

振りかへると、越智の源さんが立つてゐました。私達は再會を喜び、無事を祝し、急いでゐたので、元氣でゐるやうにとそのまま深く話もしないで別れましたが、越智一等兵とは〇〇から〇〇に向ふ進軍の時に會つたきり、會はずにゐたのです。我々の戦線は常にばらばらなので、同じ部隊でも滅多に會はぬことが多いのです。戰場では、また今度ゆつくり、などといふやうな挨拶は通用しないのです。あの時別れたのが最後だつた、といふことが常にあります。色々話した

いことがあつたのに、あの時話しておけばよかつた、と後悔するやうなことはあり勝なことであるし、私も屢々そのやうなことを経験しました。それが兵隊の運命です。明日をも知れぬ命、といふ言葉は何と使ひ古されて、その切實さを失つた感があるのを遺憾としますが、その凡庸の言葉の内容こそ、唯一の兵隊の悲壯さであり、運命であるのです。一年間も會はずにゐて、或ひはやられたのではないかと考へてゐた兵隊に、ひよつくり出會つたことを、嬉しさと同時に、やはり私は兵隊の運命について考へさせられたのです。さう云へば、今度、東莞に行くことに就つて、私が非常に氣にかかつて居ることは、私の兵隊が果してどうであつたらうかといふことです。白耶士灣上陸直前に私は原隊を離れ、廣東入城後も全く原隊の兵隊に會はず、其の





東莞城

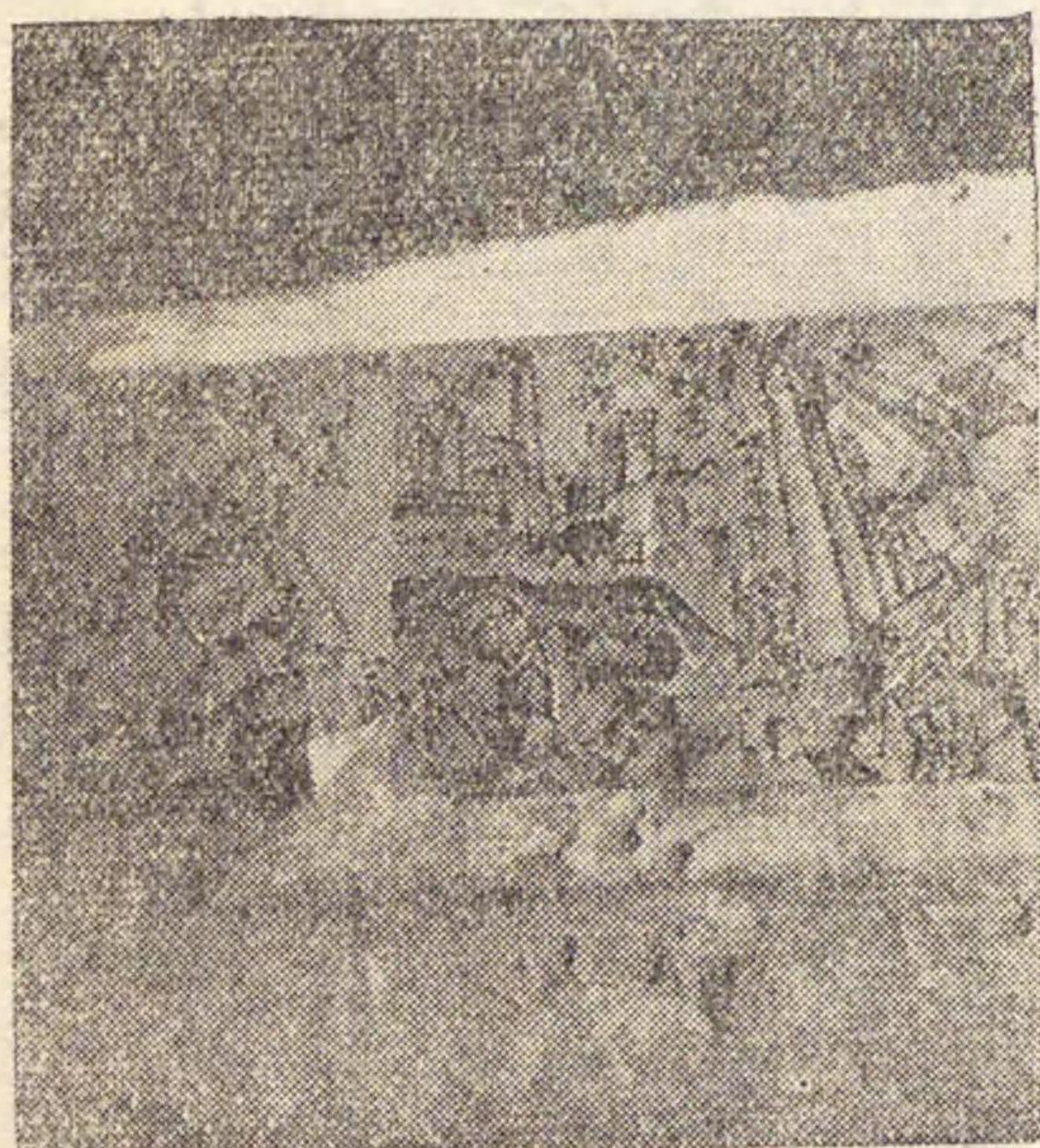
後、竹下部隊は非常に苦戦をしたと聞き、犠牲も多しといふことに氣になること夥しく、常に消息に氣を注げてゐたけれども、詳しいことは何も判らなかつたのです。今度東莞に行くことになつて、そのことが第一に確かめたく、石灘では牧野部隊で黄草嶺の激戦のことを聞かされ、東莞攻撃では荒川部隊は相當の犠牲者があつたと告げられ、私はそのことで胸は一杯であつたのです。

鐵橋が見事に破壊されてゐるので私達は民船で對岸に渡りました。敵軍は廣九鐵道の鐵橋を悉く破壊して居ます。敵は日本軍が廣九線に沿つて西進して來るものと判断したらしいことは、廣東近傍の陣地やトーチカが殆ど東方に向つて設備されてゐるのを見ても想像されます。この川は東江の南流になり、百五十米位の川幅があつて、相當の急流です。私達は自動車と一緒に

對岸に渡りました。對岸には荒川部隊から、警護兵を連れて、田上中尉が迎へに來てゐてくれました。私達は直ちに二臺の自動車で東莞に向ひました。途中の風光は殆ど今までと變りません。たゞ方々に高地が多く、右手の丘陵には塔が見え、歩哨の警戒して居る壊れた橋を渡ると、この附近一帯が荒川部隊の苦戦したところで、向ふの丘陵の蔭で（と、中西中尉は指さし）片山隊が迫撃砲彈のために九名一度にやられたのだ、と説明しました。二里ばかりの道程です。やがて佛蘭西人の教會の前を通つて、東莞の町に入りまし

た。すると城門の前に多くの兵隊や車輛が混雑し、その間に私は一人の兵隊の顔を見てはつとしました。それは阪上伍長でした。阪上伍長は私が隊長であつた時には隊長代理をしてゐた男です。私が車の窓から首を出すと、向ふでも認めて、隊長殿、何とか、と云つたやうに聞えました。が、少し離れてゐたのでよく判りませんでした。

抗日漫畫





私は走り去る自動車の窓から、後から行くから、と
唖鳴りました。そのまま私達の自動車は東莞の門を
入りました。城内は非常に狭く、敷き詰められた石
登の上を少し行くと、自動車は通れなくなりまし
た。城門の両側には「抗戦到底」の字があり、裏側
には、漫画抗日ポスターや、傳單が所狭きまで貼つ
てありました。町には誰も居ません。自動車を降り
て少し歩くと、荒川部隊本部はすぐでした。荒川部
隊長は寛瀾な態度で我々を迎へ、應接室へ案内され
ました。荒川部隊隊長は私と別れた頃と少しも變らず、元氣に溢れ、明快で、威嚴に満ちて居りま
した。後に野原大尉が立派な人だと云ひましたが、我々も部下として非常に敬服して居る部隊長
です。我々は晝食を御馳走になりましたが、此處も亦石灘石龍と同様、糧秣に不自由して居ることが
が判りました。私達は三階の屋上に出ました。古風な石造りの家が密集し、その間から實にすく

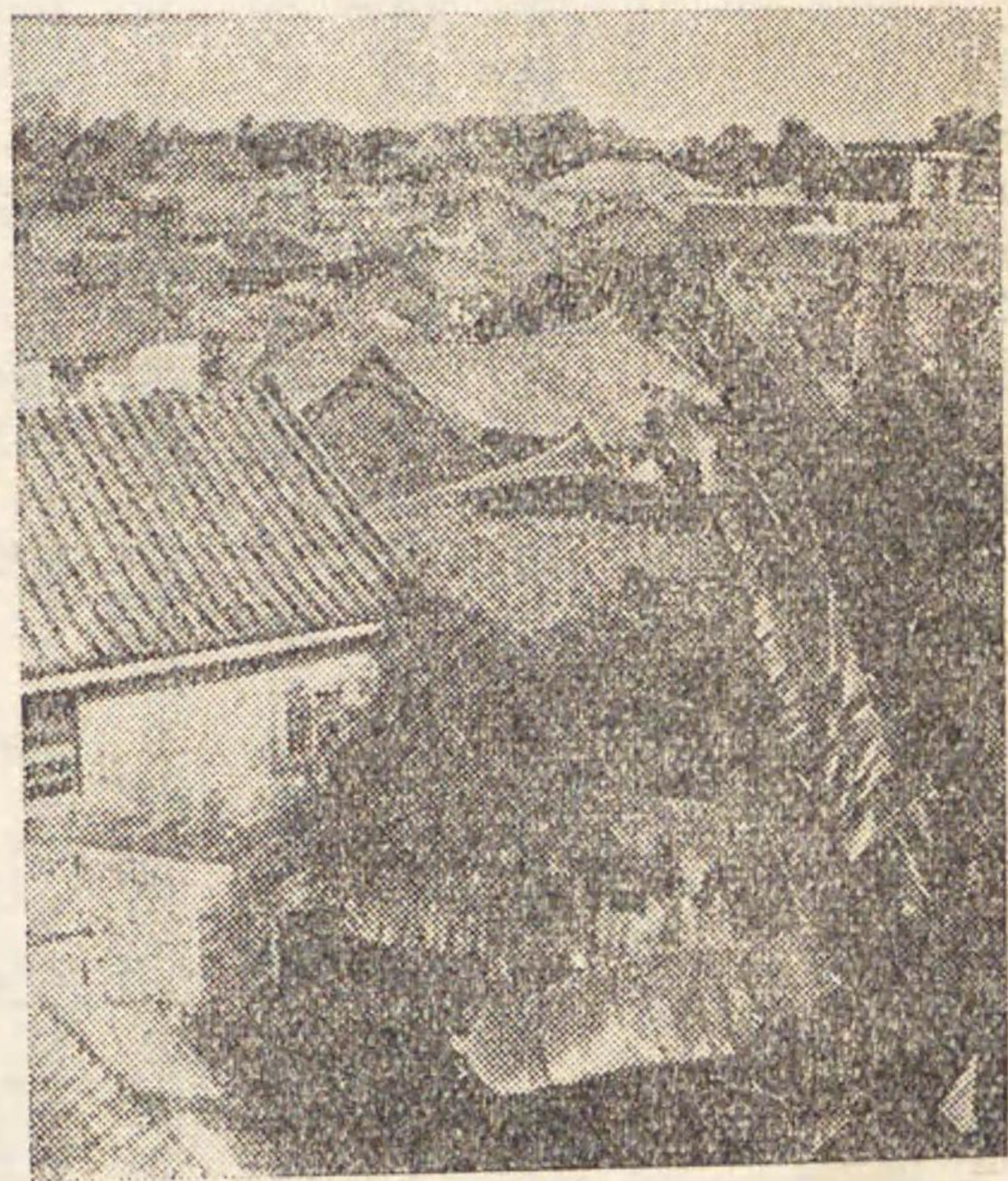
すくと延びた大きな檳榔子や芭蕉の葉が羽のやうに擴がつて居ます。落ちついたよい町です。荒
川部隊隊長は地圖をひろげ、青い屋根瓦の建物や、赤煉瓦の家や、其の附近の目ぼしい建築物を指
さしながら説明し、敵状や當方の警戒配備に就いても詳細に報告がありました。それから私達の
重要な用件である東莞治安維持會の結成に就ては、そのことは既に緒に就き、今日會長初め役員
が間もなく來るといふ答でした。東莞縣は廣東省中隨一の大きな地域を擁して居り、東莞は縣城
の所在地なので、ここに治安維持會が出來るといふことは、戦後建設に貴重なる役割を演ずること
とは言を俟たざるところです。既に東莞の陥落に依つて中山縣は歸順して來てゐます。東莞は人
口約十萬と云はれて居ますが、現在では市民は殆ど逃げてしまつて、市中には殆ど居らず、町外
れにある獨逸人經營の病院に五千人から避難民が入り込んで居るといふことでした。

六、治安維持會

東莞市は城内と城外とに分れて居つて、戦前までは城外の方が商店街として發達し、股賑を極

めてゐたさうです。十一月二十二日に占領した時には全く市民の影を認めなかつたが、便衣隊の仕業と思はれ、二十四日か月末にかけて城外商店街に大火があつて百軒ほど消失、二日には市中質屋から發火、これは大したこともなく鎮火、現在市中は兵隊を以て警戒する外、市民で作つた自警團に依つて義務警察隊を作り、午後九時から午前五時まで巡視してゐる、といふことでした。この近郊にはあまりたちのよろしくない部落がまだ點々とあつて、近く討伐するつもりであるが、大汾のごときは、村長が日本兵一人に就き百圓の懸賞を附して居る、と云ふ話です。やがて、維持會の連中が來たといふので我々は屋上から、先刻の應接室に販りました。背の高い恰幅のよい丸坊主の老人と、オールバックにした若い二人の支那人と、通譯とが來て居りました。この老人が會長である張紹洪で、六十一

東莞市



歳、律師、日本の中央大學法科を出たといふ人です。一體この會は、二日にこの張氏と他の支那人が五人連で來り、自治會を作りたいといふ申し入れがあり、四日には職員表を出し、五日には色色な條項を列ねた願書のごときものを提出して來た。その願書といふのは次のやうなものです。

- 一、爲訪尋電氣技術人員請發通行到港證
- 一、通於貴部隊許可自治會所發通行ト復業ト安居等證有効行使
- 一、請發通過廣州香港ト順德等處船舶證、順德ハ魚類買入レノ爲メ香港廣州ハ商品買入レノタメ

一、請通令貴部隊許可義務警察站街並容許所持小旗有効

一、介紹箕村ト水蛇松兩鄉歸順請發安民佈告以安人心

一、請發通過大胡鄉通行證招回妓女二十數人回城復業

この日支親善文章とも云ふべき願書はよく現在の東莞治安維持會の性質を明示してゐると思はれます。この日華混合文は張會長の執筆したものらしく、通譯張弘懷が詳細に註解をしました。この張通譯の流暢な日本語には驚きました。寧ろあきれたといふべきでせう。張は長い間横濱

で支那そば屋を閉業してゐたのであるが、震災ですつかり焼け出され、歸國したといふことです。近村に居るのであるが、例の大汾の懸賞のことや、土匪の居ることを日本軍の歩哨線に知らせてくれたのも彼で、それ以來荒川部隊の通譯として働いてゐるさうです。菊石のある小柄な張通譯は落ちついた口調で、實に流暢に兩者の意志を通じました。以下は、張弘懷の通譯に依つて、野原大尉と治安維持會長との間に取り交はされた一問一答です。

問 日本軍の來たのを何時知つたか。

答 十一月の二十日まで知りませんでした。

問 廣東の陥落は何時知つたか。

答 十一月十二日に知りました。それ迄は支那軍は日本軍大敗の宣傳ばかりして居つたのです。

問 日本軍に對する感想は如何。

答 支那軍の宣傳が随分早くからなされて居りまして、随分悪く、即ち、日本軍は掠奪強姦放火など無暗にする鬼のやうな軍隊だと聞かされてゐました。

問 實際は？

答 宣傳が間違ひであつたことを知りました。ピラや寫眞や漫畫などで澤山ばらまかれたものです。

問 それではすぐに市民は歸つて來たらどうか。まだ殆ど市中に人影を見ず、獨逸人の病院などに避難して歸らないのはどういふ譯か。

答 まだおつかないからでせう。そのうちにぼつぼつ歸ると思ひます。治安維持會でも盛にそれをすすめて居りますし、日本軍が悪宣傳のやうな軍隊でないと判れば當然歸つて參ります。

問 市中には兵營はあつたか。

答 ありません。支那兵は寺や學校などに入つて居りました。

問 この自治會は市民が信用するか。

答 します。我々は皆眞面目な商人です。

問 この維持會の範圍は？

答 東莞市内だけです。東莞縣全體には我々の力は及びません。

問 東莞縣全體の治安維持會が出来ないか。その際これを統帥して行ける人物は居ないか。

答 蔣介石統一政權の出来る前に居た李軍長なれば皆心服すると思ひますが、今追はれて香港に居ります。然し、聞けば廣東治安維持會準備會長には呂春榮がなつたといふことですが、呂はもと李軍長の部下であつた人ですから、大きな廣州市の方を呂氏がやつてゐて、小さな東莞の方に李軍長を据ゑるといふことでは、李軍長が來ないでせう。

問 經費や税金はどうするつもりか。

答 商人には税金取立のことなど判らない。税金は取られるばかりで取つたことなどは無い。随分色々な税金を取られました。しまひにはおわいにまで税を掛けられました。

問 早く力のある治安維持會にしなければならぬ。日本軍は東洋永遠の平和のためには如何なる援助も惜しまぬ。

答 ナニシロ、ミチハトホイ。一つお願いがありますのは、今のお言葉で安心はしましたが、永久に私達に力を貸して貰ひたいといふことです。私達はやつぱり支那人ですから、日本軍の援護の下に仕事をするといふことは、支那の軍隊から快くは思はれないのです。私達が日本軍と協力して維持會を作つても、此處を日本軍が引き上げてしまふと、私達は漢奸になつてしま

つて殺されます。それが私達一番の不安なのです。何卒永久に私達と協力して頂きたいのです。途中で日本軍が引き上げられるのなら、初めからよした方がよろしいのです。

問 よく判つた。充分協力して君達を死地に陥れるやうなことはしない。
(其の他、等等等)

東莞商人が提出した願書や、この一問一答録は少しく長たらしくなりましたが、これには戦後治安工作に就ての重要な、且つ根本的な教訓が含まれてゐると思ひましたので、煩を顧みず録しました。私達はこれらの會見に於て、政治的意義よりも、これらの商人達が一儲けしようとしてゐるのではないかといふ印象を受けたのです。それはそれでも構はないし、それらを基調として、我々の企圖する線へ近づけなければならぬし、この困難な道こそやり甲斐のある仕事と思はれます。先刻の記録の部分に、ナニシロミチハトホイ、と片假名で書いたのは、我々の問答の間に、ひよつくり、張會長が片言の日本語を挿んだのです。會長は、中央大學出にしてはあまり日本語が判らず、時折り、通譯を煩はさずに自分で話さうとしましたが、舌足らずの子供のやうによく聞き取れませんでした。ひよつくり、どういふつもりだつたか、ナニシロミチハトオ